サトウカズマはおうちにかえりたい

コウカローチ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

爆裂魔法を使い自分の命と引き換えに魔王を倒した佐藤和真。

しかし死後に彼を迎えたのは女神エリスではなく――

命は落とした
名前は塗り潰された
スキルも封じられた
姿形は取り替えられた
自分自身すら失くした

全てを失った「誰か」の大いなる帰宅が始まる

童貞を卒業するために

ｗｅｂの設定が混じってますがキャラクターは書籍版設定
オリキャラ無し、名無しのモブキャラ有り
追記：原作にいないモンスターは出ます。

目次

勇者の末路で悪魔は彷徨う ―― 1
地獄の職場（比喩ではない） ―― 11
豚に身受（しんじゅ） ―― 20
豚に心中 ―― 39
就職地獄期 ―― 56
ＢＮＬ４８ ―― 67
見通す悪魔と見通しが立たない悪魔 ―― 87
テンセイリーガル　～名無し勇者と小悪魔遣い～ ―― 100
悪魔と遊べや紅魔たち ―― 113
下級悪魔のロリ風冷や飯、巨乳を添えて ―― 121

勇者の末路で悪魔は彷徨う

「『エクスプロージョン』――――ッッ！」

世界最大のダンジョンの奥の奥。
俺の解き放った人類最強の攻撃魔法は、魔王を欠片も残らず消し飛ばした。
ついでに、
人生初めての爆裂魔法は俺のことも焼き尽くしたので人生最後の爆裂魔法になった。

・・ゴロゴロして飲んだくれて昼まで寝て、美少女に囲まれて、その中の一人と一緒に童貞を卒業して・・・・・・そんな退廃的な一生を夢見た結果が自爆的魔王討伐だというのだから、どれだけこの世界がふざけているのかがよく分かる。

――――そんなふざけた世界でできた、ろくでもない仲間達。
別にあいつらのために体を張ったわけじゃない。
ただ、ここで決めておかなかったらやけっぱちになったあいつらが何かやらかすのが目に見えたからなあ・・・・・・。
でも、あいつらと会えなくなるのは辛い
本人たちには絶対言わないが、ほんとうに辛い

でも、撃ってしまったものはしょうがない
童貞ヒキニートと魔王
世間体か全世界のどっちかに害をなす二つの存在が、誰にも見届けられることなく消滅したあの日から数日後・・・・・・

俺は、今――――――

「ホースト先輩。業火地獄の火加減はいい感じだし、今日の分も持っていくなー」
「・・・・だから先輩ってなんだよ。昨日届いた罪人の魂はそっちのカゴに詰めてあるからチャッチャと持っていってくれ」
「ここの青いカゴと白いカゴだな。じゃあ行ってくるなー」
『先輩』に挨拶を済ませてから、今日の仕事を始めるべく荷物を運ぶ。カゴが大きい分両手が、中身が軽いので全く重さを感じない。土木工事の作業員をしていた頃の肉体労働とは比較にならないほど楽だ。
先輩も筋骨隆々で黒い肉体に立派な角と羽を生やしているが、風貌に反して気さくな性格なので仕事に対するストレスも少ない。

大して遠くもない距離を移動してたどり着いた先で、メラメラと燃える炎の中にカゴの中身をポイポイと放り込んでいく。
いま放り込んでいるのは生前窃盗を繰り返して地獄に落ちた罪人の魂だそうだ。これらを高温の炎で直焼きすると魂に刻み込まれた罪の汚れみたいなものが洗い流されるんだそうだ。
「ほーれほれ、こんがり焼き上がれー」
魂というのはホラー漫画や子供向けのお化け映画に出てくるようなそれと大差ないデザインをしている。要するに手のひらに乗る程度の大きさをした火の玉だ。
ただし火の色が灰色だったりくすんだ茶色だったりするのはおそらくこれらが罪人の魂だからかもしれない。心が汚いまま死ぬと魂

も変な色になるようだ。
俺が放り込んだ魂たちは燃え盛る炎の真ん中で大人しく焼かれている。くすんだ色の火の玉が真っ赤な炎の中で色が混ざることもなくじっとしている様子は、最初は見慣れなかったものだが今ではインテリアに見えなくもない。
「生前がどうだったかは知らないけど、お前らはいい子だよなー。キャベツみたいにバーベキューから逃げ出さないし、野菜スティックみたいに指を避けないし、セミみたいにバカ騒ぎしないからなー・・・・・・」
火加減と魂の調子を軽くチェックして業火地獄のそばを離れた。
このあとは別のエリアをまわって、魂を平たく叩いたり、水に沈めたり、そのまま煮込んだり、煙で燻したり、乾燥させたりしなければならないのだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・いや、料理じゃないよな？

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「今日の仕事おしまいっと・・・」
空になったカゴを所定の場所に収めると、手頃な大きさの岩に腰掛ける。
地獄というのは意外と暇を持て余すものだ。
そもそも罪を犯したから無条件で地獄に落ちるというわけでもないらしい。先輩からの受け売りになるが人間を裏切って魔王軍に味方する、悪魔や邪神を崇拝する、といった魔に身を落とし人類の害となる行為に及んだ人間が死ぬと最優先で地獄に連れてこられるらしい。窃盗、殺人、強盗、詐欺といったありふれた犯罪が原因で地獄に落ちる人間ももちろんいるが、それも直接地獄に来るわけではなく女神・・・つまりエリス様が地獄行きが妥当だと判断した奴らだけだとか。
あの慈悲深いエリス様をして有罪判決が出されるということは相

当なワルだったのだろうから、俺からしても魂を煮たり焼いたり叩いたり伸ばしたりすることにも抵抗はないのだ。
　そんな訳で、体感では2，3時間しか経っていない内に今日の仕事は終わった。大して疲れも積もっていない。何をして過ごそうかと悩む、この場所は暇が多いが暇を潰せるものがそうない。地獄は荒廃していて殺風景な上、あるものといったら罪人の魂をしばくための施設ばかりなのだ。その施設同士も大きく離れているので魂を運送するのも結構な移動距離になる。
「・・・・・・なんでこんなことになったんだろうなあ」
　やることもなければ遊び道具もないので懐から冒険者カードを取り出す。こっちに来てから何度も手に取って矯めつ眇めつ確認してみたが、面白いものではない。というよりこのアイテムのせいで『今俺が置かれている状況』をまざまざと思い知らされている気分だ。
　アクアに転生させられたこの世界で、初めて手に入れたアイテム。実はアクアとほぼ同じ長さの付き合いになると言っていい。最後に爆裂魔法を習得して魔王を倒すことができたのもこいつのおかげだったりした・・・・・・・・・・のだが。
「色々いじってみても・・・・・ほとんどのスキルが使えないままか・・・」
　そう、『今』の俺は9割近い数のスキルが使用不能になっていた。
「槍」「自動回避」「両手剣」「クリエイトアースゴーレム」「テレポート」「マジック・ゲイン」「プロテクション」「パワード」「ヒール」ｅｔｃ・・・・・・
　家出したアクアを連れ帰りに行くため、アクセルの冒険者達から突貫で教わった種々雑多で共通点も何もないスキルも。
「スティール」「逃走」「潜伏」「敵感知」「バインド」などの、クリスから教わった結果、地力の足りない俺が上手く立ち回るために大きく役立った盗賊スキルも。
　極めつけに、奥の手にして必殺技の「不死王の手」に「ドレインタッチ」まで使えなくなっているのはかなりショックだ。ピーキーな能力持ちのパーティメンバーを上手くサポートしてくれていたのに・・・・・・。

「残ったのが『初級魔法』『中級魔法』・・・・・・そんでもってマナタイトが無い今、まったくもって役に立たない『爆裂魔法』だけとか・・・駆け出し魔法使いか俺は。しかもご丁寧に『テレポート』は使えないのか・・・」

テレポートは高い有用性に比例して上級魔法に匹敵するスキルポイントと習得難易度を持つ。確かゆんゆんもテレポートを習得するまではレベル上げに時間がかかったと聞いた。

――――だから『今』の俺には分不相応らしい。

地獄での仕事の合間に何度もそうしていたように、冒険者カードを眺める。眺めなおす。

俺の名前があった欄には何も書かれていない。

俺の職業欄には「冒険者」の文字はない。

代わりにこんな一文が追加されている。

『種族：悪魔』

「・・・・・・悪『魔』だもんなあ・・・・・・。魔法スキルくらいしか使えないんだなぁ・・・」

最初は他人の冒険者カードかと思いたかったが、討伐した対象モンスターの欄に魔王の名前が記載されていた。つまりこれは変わり果てたとはいえ俺こと「佐藤和真」の冒険者カードに間違いないのだろう。認めたくはないが。

種族欄の変化に加え、名前が上から塗りつぶされるように消えていた。冒険者カードは改竄不可能というのが原則なので見ていて気味が悪いというのもある。

「・・・・・・・・我が名は■■■■!!・・・・・・・・名前が消されているからか、自己紹介もできないとか、どうなってるんだよこれ・・・・・・」

試しに自分の名前を叫んでみたが、口から出たのは盛大に舌を噛んだかのような雑音だった。
だが、もし舌を噛んだとしても大した怪我をすることはないだろう。

今の俺は灰色の皮膚にしょぼい角、枯れ枝のような頼りない翼が生えた、立派な悪魔スタイルなのだから。翼で飛べるおかげで無駄に広い地獄でもスムーズに移動して仕事を終わらせられるのはいいことだが――

これじゃあまるっきり、俺が佐藤和真じゃなくなったみたいじゃないか。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

常識的で真人間な俺が地獄に落とされるという理不尽極まりない末路。それの大本となった会話はこんな感じで始まった。

「ようこそ死後の世界へ。」

「俺はあんたを行くべき道に連行する邪神、レジーナ――」

「佐藤和真、あんたはダンジョンの最下層で自爆して死んだ。つまりは自殺だな」

「――辛いだろうけど、どんな経緯があったとしても」

「自殺した人間は地獄行きと相場が決まっている」

とんでもない発言がぶつけられたこともそうだが、俺がまず驚かされたのはその発言をした当人、邪神レジーナの外見についてだった。

今まで会ってきた神はアクア、エリス様、邪神ウォルバクのような女神ばかりで、男の神というのを見るのは初めてだったのだが、それすらも吹っ飛ぶ第一印象がレジーナにはあった。
端的に言って、顔も衣服も俺と瓜二つだったのだ。
俺の正面で俺のジャージを着て暖炉の前に置かれたソファーにだらしなく寝そべった姿はどう見ても毎朝鏡で見ていた自分の姿そのものである。
ここに来てようやく俺は自分が今いる場所がアクセルにあるはずの自分の屋敷の暖炉のある広間であることに気づいた。あまりに馴染みすぎて違和感を抱くのが遅れえたのだ。
「ん？俺の姿が佐藤和真そっくりな理由か？」
レジーナが俺そっくりの話し方でそんな風に聞いてくる。
「言っとくけど深い意味はないぞ。信者がいなくなったせいで俺は本来の容姿も人格も失くしてな。それで苦肉の策としてつい最近まで熱心な信者をやってくれていたお前の姿を模した傀儡を使わせてもらっているわけだ。本人であるお前はもう死んじまったんだかし、問題ないよな？」
レジーナが改めて俺の死に言及したことで自分の体を確かめてみる。今までエリス様のいる空間に送られた時と違って、俺の体は胸から下が消えていた。どうりで地面を踏んでいる感触がないわけだ。この状態を取り乱すことなく受け入れられているのも完全な死を迎えたからか・・・・・・。
「って、ちょっと待て。地獄行き？マジで？俺が？・・・・・魔王を倒したこの俺が地獄行き!?」
命こそ落としたが悟りを開いたわけでもないのに自分の行く末をのほほんと受け入れられるわけがない。俺はソファーに寝そべったままの俺、ではなく俺の傀儡の中身ことレジーナに詰め寄る。だがレジーナはだらけた態度を改めない。
「そんなこと言われてもなあ。ここには邪教信者、悪魔崇拝者に自殺者、エリス様が叩き落としてきた極悪人が来ることになっているわけだし・・・・・なんで邪神たるこの俺があの女神に様付けを・・・・・

傀儡のモデルに口調が引っ張られるからか・・・・・」
「そこをなんとかしてくれよ!あんた神様なんだろ?頼むよレジーナ様!短い間だが俺はあんたの信者だったんだぜ?敬虔な信徒を助けると思ってなんとか・・・!」
手を合わせて拝もうかと思ったが、もう手の先すらない。地獄行き云々の前に消滅しそうになってないか? ・・・本格的に焦ってきた。
「敬虔な信徒ねぇ・・・・・確かにお前の信者っぷりはなかなかのものだったなあ」
レジーナが「信者」の単語に反応した。やはり神だけあってそのあたりは無視できないらしい。
俺は以前、魔王幹部の一人の策略でレジーナ教に入信させられたことがある。そいつはリッチーでもなんでもない普通の人間ではあったが、幹部に名を連ねるだけあって戦闘力や魔力以外の部分、策略と謀略に長けていたのだ。
数多の魔王軍幹部や強敵に対して搦手と卑怯なトリックプレーを仕掛けてこれを討ち取ってきた俺が1本取られたとは言えばその賢しさが分かってもらえると思う。
しかしまさかここで俺がレジーナ教信者だったことが事態を打開する取っ掛りになるとは・・・・・・なるよな?
「性欲を下地にしていたとはいえ、あの底なしの信仰心があったから天界で無職になりかけたところをなんとかこの世界の地獄案内神のポストに就けたわけだし・・・・・」
何を言っているのか詳しいことは分からないがかなり押せている気がする・・・。もうひと押しだな。
「そうだ、魔王を退治した特典とかで俺を生き返らせたりできないのか?なんだったら生き返ったあと、俺がレジーナ教を布教してやってもいい!」
「特典?・・・・・・あぁ、転生した連中向けのサービスか・・・。あれはエリス様の権限だし・・・そもそも魔王が倒されて平和になった世界じゃ邪教が流行る訳ないだろうが」
「うっ、確かに復讐も傀儡も、平和には似合わないような・・・俺って

やっぱり地獄行きは免れないのか？・・・なんか抜け道とかないのかよ？」
「抜け道ねえ・・・・・俺はエリス様みたいに天国か転生か選択肢を与えるのとは違って、決まりきった道を受け入れさせるのが仕事だし、地獄行きの事実は変えられ・・・・・・・・・・・・・・・・・ん？」
「ん？」
　面倒くさそうな困り顔で、うだうだと言い訳を並べていたレジーナの言葉が途絶えた。
「そうだ！喜べ佐藤和真！地獄行きは変えられないが、地獄の責め苦を免除できる方法があるぞ!!」
「マジか!?正直地獄行きも勘弁願いたいが、まずは一歩前進だな！で、その方法って？」

「お前、悪魔になれ!!」

・・・・・・・・・・・・・・・は？
　いきなりぶっ飛んだ発言をかましたレジーナはソファーに寝転がった姿勢のままで右手を俺に向けた。
「苦しみを与える側になれば自分が苦しめられることはない！現実世界ならそれこそ復讐されることもあるだろうが地獄ならそれもない、悪魔として一方的に魂をシバいても反撃される可能性は、ゼロだ」
　その手の平から真っ黒な煙が吹き出すと、大蛇のように俺の全身に絡みついてくると、
「レジーナ、ちょっと考えさせ――」
「悪いがもう他にいい解決手段はない。――それでは佐藤和真！俺からの特典としてその『悪魔の傀儡』をくれてやる。それを着て地獄での第二の生を謳歌してくれ！」
　どこまでも深い深い穴を滑り落ちていくように、俺の意識は薄れていき――

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

こうして、

手のかかる仲間に苦労しつつ、時に命を落としたり、逮捕されたりしながらも、この素晴らしい世界のために戦い、平和な世界を取り戻した俺は――

――悪魔として地獄に落ちた。

「なめんな！」

？

地獄の職場（比喩ではない）

地獄に朝はない。
太陽や月が昇る代わりに罪人の魂が降ってくる。
あの手のひらサイズの火の玉が、空の彼方から落ちてくるのである。
かといって雪やあられのようにキラキラしているわけでもなく、くすんだ汚い色の魂がボタボタと泥のような音を立てて落ちてくる。そんな光景に情緒などない。
下級悪魔と成り果てた俺の寝起き一発目の作業はこうして落ちてきた魂を拾い集めることから始まる。
罪人の魂に直接触ると生前の記憶や邪念、煩悩、不浄な思考が頭の中に流れ込んでくるので最近は手袋をしている。
「なんで俺はサキュバスのお姉さん達と働けないの？」
拾い集めた魂をカゴに放りながら周囲を見回し『同業者』達に愚痴ったが、返事は返ってこない。
地面に散らばった魂を手づかみ、または直接口にくわえてカゴに運んでいるのは獣に近い姿の下級悪魔、グレムリンたちだ。あいつらは見た目も中身も人間に近い俺とは違って頭の中まで動物レベルだから魂から漏れ出る記憶に何かを感じることはないのだろう。
よく見ると、拾った魂をカゴに入れる前に軽く咀嚼して、悪感情らしきものを絞り出している個体もいた。朝メシのつもりか？
俺は後で食事が支給されるのでここでつまみ食いしたりはしない。というか罪人の魂から直接悪感情を得るのは抵抗が強い。
別に同じ人間に手を出すのは気が引けるとかではなく、地獄に落ちたばかりの濃い邪念は普通に気持ち悪いからだ。
ちなみに邪念に触れるとこういうのが聞こえてくる。

〝可愛いよ！可愛いよ！安楽少女とっても可愛いよ！ペロペロ！

ペロペロペロペロペロ!!!〃
〃スライムの中・・・あったかいナリィ・・・〃
〃・・・・・マンティコアにも、穴はあるんだよな・・・〃

・・・。

今日は変態のまま死んだ罪人が特に多かったようだが、酒、金、女、暴力などについての低俗で品のない邪念が内包されているのがほとんどだ。

こうして無造作にかき集められた魂が地獄の各所から一箇所に集積されることになっている。

その後は俺よりも魔力があり、魂の性質を鋭く見抜く目を持った、中級悪魔やホースト先輩達のような契約もなく暇を持て余した上位悪魔が罪状ごとに仕分けるのだ。殺人、窃盗、詐欺、女性関係、邪教崇拝ｅｔｃ．・・・・・・と手際よく作業が進んでいく間、俺たちは待機という体の休憩時間である。

直接手を触れないと魂の中身を判別できない俺のような下級悪魔では参加しても作業効率が落ちるだけなのだとか。

こうやって仕分けが終わった魂は色の違うカゴに分けられているので、それぞれの罪業に合わせた地獄のエリアに運搬するのが次の仕事になる。俺の周りではグレムリンが殺人者の魂の詰まったカゴを口にくわえ、遠く離れたエリアではサキュバス達が昏睡レ〇プをはじめとした姦淫の罪を犯した魂を収めたカゴを肘にぶら下げ、談笑しながら飛んでいく。

それぞれの魂に相応しい地獄への招待が終わればそのまま解散、サキュバスたちは魔界の巣に、グレムリンや俺は地獄のどこかで適当に寝られる場所を探す、わけだが・・・。

「・・・・・・・・サキュバスの巣、なんて素敵な響きなんだ」

折角地獄に来たんだ、お近づきになるのは悪いことじゃない。なに

せ今や同じ悪魔なのだから誰に憚ることもない！
今の俺の目標はサキュバスと仲良くなること。地獄にも潤いは必要だ。
そうは思うが、実現は遠い。サキュバスは仕事が終わるとさっさと帰ってしまう上、飛行能力が俺よりも高いので追いかけても上手くいかない。
そもそも悪魔とは言え女子の群れに話しかけるコミュ力があれば引き籠もりになどなっていない。アクセルのサキュバスとの間にあった交友も俺が上客だったからこそのビジネスライクなものに過ぎないのだ。
「アーネスの姐さんってサキュバスとは違うんだよな？全身ムチムチだけど」
「言葉に気をつけな新入り。あんなおチビどもと一緒にするんじゃないよ！」
女子グループと仲良く出来るきっかけがつかめない俺は、一人孤高を貫く高嶺の花、上位悪魔のアーネスとの会話イベントを進めることにしていた。
アーネスの姐さんはホースト先輩の同僚で、同じ主人に仕えた仲だとか。雄々しく剛健なホースト先輩と対照的に露出多い格好に出るとこは出て締まるとこは締まった体には、どうしてアクセル勤務のサキュバスじゃなかったのだと遣り場のない思いが湧いたものだ。
「アーネスの姐さんの羽ってすごく立派だと思うんだよ、俺はこんなひょろっとしたボロボロの羽で、ちょっとコンプレックスがある身としては、素直に羨ましい」
「そりゃどうも。悪魔ってのは物質的でなく魔法的存在だからね、肉体の出来の良さこそ高位生命体であることの証さ」
「なるほどなー。サキュバスのお姉さん達って、羽も角もどちらかというと可愛らしいサイズだもんなー。でも、あんなに小振りな羽なのにスムーズに飛べるのはなんでなんだ？」
「なんだ、まさか今までその貧弱な羽を使って自力で飛んでいたのかい？普通は『飛行』の魔法を使って羽の能力を補助するんだよ。そん

なことも知らないって、あんた知能が発達したグレムリンの変異種だったのか？」
「お、俺のことはここでは置いといて・・・・・『飛行』魔法・・・・・・そういえばアクアがそんなこと言っていたような・・・マンティコアには羽はあるけど魔法で飛ぶとか・・・・・・」
「アクア？」
「いや、なんでもねー。アーネスの姐さんも飛ぶときはその立派な羽に魔法をかけているのか？」
「さっきから姐さんってなんなのさ・・・・・・まぁ、そうだね。羽だけで飛ぶと大きい音が鳴るし、細かい動きができないしね。あんたは下級悪魔にしちゃよく働いているからなんだったら後であたし直々に教えてあげてやってもいいけど？」
「いいのか!?そのムチムチした胸と同じくらい立派な羽を使って手とり足とりご教授願えるんですか!?」
「サキュバスじゃねえっつってんだろ!!」
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「おう、新入り。ちょっと来い」
モンスターに欲情し、不正にモンスターを飼育していた変態貴族の魂。
モンスターに欲情し、危険なモンスターを無断で繁殖させた変態冒険者の魂。
モンスターに欲情し、秘密でモンスターを街中に持ち込んでいた変態一般人の魂。
それらをまとめて針山地獄に放り込んでいい感じにミンチにしてきた帰り、俺はホースト先輩に呼び止められた。この上位悪魔は見た目のゴツさに反していい先輩ではあるのだが、滲み出す魔力が俺とは比べ物にならないので、どうしても萎縮してしまう。人間だった頃は公爵級悪魔にさえ啖呵を切っていたが、同じ悪魔になってしまうとこんなものである。敬意なんて持ち合わせてないのについ腰が引けて先輩呼びしてしまうのだ。

そんなホースト先輩からどんな指示が来るのかと近づいたところ、
「お前、今日から魔界の方で寝起きしていいぞ」
・・・・・・・魔界とは、地獄に密接する悪魔や魔族たちだけのエリアのことで、地獄を悪魔の職場とするなら魔界は悪魔の居住区に当たる場所で・・・・・・・。
「えっ、マジですか!?魔界!?地獄と違って地面が舗装されていて住居もあってまるで一つの街の様相をなしている魔界!?」
「お、おう?・・・・お前はグレムリンもどきにしてはよく働くし、だったら地獄で住み込み従業悪魔にしておくのもアレだと思ってな。入居申請したら意外と簡単に通ったぜ。認可をくれた公爵様に感謝しとけよ」
「悪感情を得るための嘘とかじゃないですよね!?」
「下級悪魔から搾り出すほど腹は空かしてねえよ。それに悪魔は契約の生き物、人は騙すが契約は守るし嘘はつかねえ。それが掟だ」
「わーい!やっと屋根のあるところで眠れるぞぉお!!馬小屋以下の環境からの脱出だあああ!!」
「あぁ、聞いてねえ・・・そこまで感情を剥き出しにする悪魔なんざ初めて見たぞ俺様は。ま、喜んでくれたようでなによりだぜ」
「それじゃ、今日はこれで上がるんで!!」
こうして、意気揚々と俺は帰路に着いた。新しい住居なのだから帰るというのも変な話だが、少しテンションが高くなっているのかもしれない。
なにせ今までは寝床もないまま雑魚寝でやり過ごしていたのだから。
地獄はとにかく荒涼としたもので、寝そべるのに丁度いい岩を探すのにも三日かかった。近くに火炎地獄があったせいで寝苦しくなり、岩を引きずりながら寝心地のいい場所を探すのにさらに二日かかった。グレムリンらは特に眠ることもなく仕事が終われば悪感情のつまみ食いをしにどこかへ消えてしまうのだが、俺は食欲だけでは満足しない、睡眠も欲しいのだ。
・・・・・・・・・・・・・・・睡眠欲だけではなく、性欲

も満たしたいところだが、今の俺にはそれはできない。サキュバスのお姉さん達は人間としか〝そういうこと〟をする理由がないので俺を相手にはしてくれないだろう。
「食って、寝て、働いて・・・それでいいじゃないか。悪魔に性欲はないはずだし」
職場以外に話し相手がいないせいかすっかり独り言の癖がついしまった。
他にも人間だった頃の習慣が根付いている、睡眠欲や性欲がそれだ。このままずっと悪魔のまま、悪魔として地獄で暮らしていれば、いずれ俺の魂まで悪魔になるのかもしれない。
「しかもどうだ、地獄は命の危険もないホワイト企業だし？メシの種は尽きることなく降ってくるし？先輩たちは優しくてナイスバディだし？しかもしかも？家まで手に入っちゃった」
歩けば足の裏が傷だらけになりそうな荒野も、教えてもらった飛行魔法のおかげでさらに楽に移動できるようになった。おかげでもう目的地に到着した。
そこにあったのは人骨らしきパーツや血のような色の煉瓦を使って組み上げられた、一人暮らしにはなんの不足もない小屋。ホースト先輩から聞いていた特徴と一致する。
「ほらみろよー、地獄に相応しい粗悪な住処を覚悟してたのに、小洒落た小屋なんか貰えちゃったよー・・・めぐみんならもっと大喜びしてたであろうデザインだけど・・・地獄ってやっぱいい職場だわー・・・」
魔界は地獄と違って平らに舗装された地面に街灯や噴水らしきものまで設置されている。
人間の街並みと違うところといえば、家と家の間がちぐはぐに離れていることや、傾斜のきつい斜面や崖の途中といった明らかに人間じゃ出入りできない位置にも平気で建造されているくらいだろうか。自在に飛べる悪魔向けだからこその自由な建築なのだろう。
「わーお、しかも家の中はまっとうと来た」
子供のものらしい、小さな頭蓋骨でできたドアノブを回した先、部屋の内装はまさしく「普通」だった。シンプルなベッドと、簡素なキャ

ビネット、地獄のその辺で転がってそうな岩を加工したテーブルと椅子。全体的な色合いが赤や黒に偏っている事を除けば一人暮らしを始めた大学生の部屋って感じだ。
俺はベッドにどっかりと寝そべる。体感で数週間ぶりに背中に当たるクッションがひどく懐かしい。
「これで地獄にも安住の地ができたわけだ」
天井を見上げながら確認するように呟く。
俺は地獄に馴染み始めていた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

地獄に落ちた。
それは字面にすると酷いものなのだろう。魔王を倒した勇者に対する仕打ちではないと万人が同情してくれるだろう。あるいはアクセル一の鬼畜男には相応しい最期だと笑って流されるのだろうか？
だが、地獄に落ちなかったらどうなっていたのだろう？
ちょっと考えてみる。
俺のパーティメンバーじゃまず到達出来ないダンジョンの奥底で、女神であるアクアでも絶対に蘇生できないくらい粉微塵に成り果てて死んで、エリス様の元に送られ、次の転生先を選んで、というところまではフローチャート通りだろう。
行く先は「何もない天国」か「見知らぬ赤子の人生」
俺は楽な暮らしがしたいだけであって何もしたくないわけじゃない。自分で言うのもなんだが性欲と金銭欲は人並み以上だ。ミニマリズムを極めきった天国と相容れない。
だとすれば、真人間で常識的で英雄で勇者である俺を地獄に放り込んだこの世界か、生まれ故郷ではあるが俺のような落伍者に厳しい日本で新たな命としてオギャーと生まれ直すしかないわけだが――

――そこに、「佐藤和真」はもういない。

……
まぁ？
それを思うと？
そう考えると？
地獄の生活も悪くないんじゃない？
肉体的にも名義的にも佐藤和真ではなくなったわけだが？
『俺』は今ここでこうして生きているし？
適度に体を動かせるルーチンワークもあるし？
衣食住の問題もたった今コンプリートしたし？
幸い俺は一ヶ月以上誰とも会話せず部屋にこもっていられるニートと呼ばれた上流階級。悪魔の友人なんて作らなくてもいいし必要ない。職場に気のいい先輩がいればそれで十分以上だ。
結論。
地獄で第二の人生を当たり障りなく謳歌しましょう！
俺はそこまで頭の中で組み上げた「住めば都理論」を反芻して、現状への感想を再確認すべく嘘偽りない言葉で表現した。

「・・・・・・みんなの所に帰りてぇなあ」

悪魔は人を騙すが、自分は騙せないらしい
あの世界じゃグレムリンがダンジョンにいた。ホースト先輩やアーネスの姐さんも召喚されてあの世界にいたらしいし、どこぞの地獄の公爵もあの世界じゃアルバイターだった。
世界最大のダンジョンの一部、瘴気の濃い場所は地獄につながっているらしい。魔王城には地獄につながる魔法陣が設置されてあるらしい。
あの世界に帰る方法はどこかに存在することを俺は知っている。
だからどうしても、益体もないことに頭を悩ませてしまう。
あの世界じゃ魔王が倒されてから何日経ったのか、とか

魔王を倒した俺の銅像でも建ててくれないか、とか
あいつらは魔王城から無事に脱出できたのか、とか
アクアは天界に帰ることはできたのか、とか
ダクネスはまた後先考えず突っ走ってないか、とか

めぐみんは、俺のせいで泣いたりしてないか、とか

「・・・・・・・・」

地獄での新生活は悪くない。
でも、ちょっとだけ『調べ物』くらいはしてみるか。

と、そこでノックの音がした。
ノックができるほど文化的で知性のある地獄の住人となると・・・・・・。
ベッドからのっそり起き上がった俺に、ドアの向こうから甘ったるい声が流れ込んできた。
「ごめんくださぁい、ご近所さんとして挨拶に来ましたぁ。わたしぃ、サキュバスの――――」
「はいはいはいはいはい!!今開けます!!!」

待望していたサキュバスエンカウントチャンスに、俺はドアに向かってすっ飛んだ
あの世界に帰還する方法を調べるのは明日にしよう、そうしよう。
？

豚に身受（しんじゅ）

邪神の思いつきによって悪魔に、それも大した能力も持たない下級悪魔に転生させられた俺こと佐藤和真、原理は不明だが名前まで取り上げられているため正確には『元』佐藤和真とかいう未確認生命体として地獄と魔界を行き来する毎日を送っている。

しかし俺は心まで堕ちたわけではない。地獄には落ちたが、心だけは人間のままのつもりだ。

悪魔の体に人間の心、それが今の俺。

そんな俺は今何をしているかといえば、

「デビルブロー!!!!」

「のわあっ!?」

俺の悪しき魔力を帯びた拳がハゲ頭に突き刺さる！

「き、ききき貴様ぁ・・・なんの前触れもなく何をしようと痛っ!!?」

「おいおいおいおい!!随分な態度じゃねえか！そんな干物みたいな体でよぉ!!生前は随分迷惑かけてくれたなぁおい!!くらえ!!邪悪なるグー!!」

「ごふっ！なんの、恨みでワシをぼへっ！ワシほどの、人物にこんな・・・狼藉がはっ！許されると思っておるのかぁ・・・！」

「忘れてるのか!?ここは地獄で、俺は悪魔なんだぜおっさんよぉ!!つまり、ここじゃ悪いことした奴を叩いたり、物理的に炎上させたり、凍結させたりするのは正義なんだぞ！」

「あ、悪魔?・・・そんな、小枝のような、ひ、貧弱な羽で・・・?」

「うるっせー！俺もそう思ってるよ!!んなこたどーでもいい!!謝って!!ほら、早く謝って!!魔王討伐後にようやく会えた顔見知りがお前みたいなおっさんだった俺によぉおおおおおおおおおおおお!!!」

――オヤジ狩りに勤しんでいた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「人間どもの世界に行く方法？一番楽なのは召喚してもらうことだな」

新居を斡旋してもらった日から何日経ったのかは昼夜の概念のない地獄では分からないが、新しいベッドの上で寝起きした回数が３回を越えた頃、俺はようやくホースト先輩と食事を共にする機会を得た。

今までは、仕事場である魂の集積所でどっしり構えた上位悪魔たる先輩と、配達業者よろしく地獄のあちこちを飛び回る下級悪魔の俺とは予定がなかなか合わなかったので、この機会を幸いと地獄からあの世界に舞い戻るための手段についての質問を投げてみたところである。

で、これがその答えだ。

「召喚・・・地獄にいる俺たち悪魔が向こうに喚ばれて飛び出てってことだけど、じゃあアレか？行き来は向こうの人間の意思次第で、こっちから向こうに行く方法はないのか？」

「こっちから？悪魔が自分から人間世界に行く動機なんざ新鮮な悪感情の食べ歩きぐらいしかねえだろ、お前そんなケチくさいメシばっかり漁るのはやっぱ不満だったのか？」

「いや、人間界に関心事があるんだよ。地獄って食事はともかく娯楽が無いじゃん？普通のグレムリンと違って知力のある俺にとっては一日が長くて長くてしょうがないんだよ」

「娯楽ねえ・・・悪魔のくせに俗っぽいやつだなお前は。悪魔は契約果たしてなんぼだろ」

「その契約ってのも人間と交わすものなんだろ？だったら食べ歩きでなくとも自分から契約を結んでくれそうな人間を探す方法ってのがあってもおかしくないと思うんだけど・・・」

俺用にわざわざ支給してもらった食事を咀嚼しつつ対面に腰掛け

た先輩と会話を重ねる。ぶっちゃけ先輩には何のメリットもない会話である以上、あくまで雑談っぽく話を繋げないと先輩がうんざりして話を切り上げる可能性もあるので注意が必要だ。
　ちなみに俺用の食事というのも、当然罪人の魂である。ただし地獄に来てから十分な時間責め苦を受け続けた結果、ほとんどの邪念や煩悩が絞り出されきった絞りカスであり、それゆえに俺が触れたり齧りついたりしても不快な思念を放つことはない。その分悪感情も「かじられるのは嫌だ」とか「強く握られるのは嫌だ」といったシンプルで淡白な味しかしない。味のなくなったガムを噛み続けている気分だ。
「自分から行く方法なあ・・・人間界にある物を使って間接的に自分を顕現させるか、地獄のどっかにあるっつう人間界と溶け合わさった入口まで歩くくれえか」
「・・・歩いてあの世界まで行けるのか!?」
「人間界のどっかに濃厚な瘴気の吹き溜まりができりゃ、地獄につながる可能性もあるって話で、狙ってできることじゃねえ。『運の悪かった悪魔』がうっかり向こうに滑り落ちた挙句、討伐されるって場合がほとんどだな、地獄側からしたら事故と一緒だ」
「うーん・・・運が悪くないとあの世界に行けないのか。俺には無理だな」
「はあ?」
　ちなみに悪魔でありながら冒険者カードを持っている俺だが、ステータスは冒険者時代の頃とほぼ変わっていない。悪魔になったからといって魔力が上がったり逆に知力が下がったりもしていない。
　言うまでもなく幸運のステータスも他の追随を許さない数値なので、エリス様が地獄にこない限り地獄で一番幸運な悪魔は間違いなく俺だろう。嬉しいニュースだ。
「いや、別に嬉しくねえわ・・・」
「なんの話をしてんだお前は」
　嬉しくないニュースだと、魔王や爆裂魔法で巻き添えにした他のモンスターの経験値が入りレベルは１０以上アップしたのにステータス全体は大して伸びていないことか。ダクネスはともかくめぐみん

にまで力負けしたままカンストしてしまったのかもしれない。
「それで、もうひとつの方法だっけ？間接的に自分を顕現させる、ってどういう方法なんだ？」
「あぁそれか、お前みたいな余分な残機の無い悪魔にゃ縁のない方法だぜ？」
「いやいやいやいやいや、ここまで聞いたんだし最後まで教えてくださいよ、せんぱぁい!!」
「・・・下級悪魔は俺様に媚びてくるもんだが、お前の媚び敬語は気持ちわりいな」
　ホースト先輩が微妙に嫌そうな顔をしながらこっちを見てくる。この悪魔は何故かアーネスの姐さんより表情豊かなのでそれがよく分かる。
　とはいえ嫌そうな顔をしながらも話を切り上げたりはせず、話を続けてくれるようだ。
　この先輩は意外と面倒見がいいのかもしれない。
「しょうがねえなあ。地獄に行く方法のもう一個ってのはな、自分の残機だけを人間界に送って、それを核に土や石で自分の体を作るって方法だ」
　そんな説明を聞いて俺には思い当たる節があった。
　地獄の公爵こと元魔王軍幹部のバニルである。あいつは仮面を中心に砂をかき集めて体を作っていた。めぐみんの爆裂魔法により仮面を破壊してもなお『残機が減った』の一言であっさり復活していたのはこういうカラクリだったのか。あの仮面は本体ではなく残機の象徴で、それを地獄から送り込んできていたのだ。
　そもそも公爵級の悪魔をホイホイ召喚できる奴がそのへんにいるわけないもんな！
　ホースト先輩の説明は続く。
「本体が地獄にいるのは通常召喚と一緒だが、こっちの方法は異物を取り込んで存在している分、悪魔としてはとんでもなく弱体化しちまう。だから俺様でもこの方法は使いたくねえ、残機の無駄遣いになるしな」

「なるほどな、自力であの世界に行くのはあんまり現実的じゃないのか・・・」
　ということはバニルはあの状態でも本領ではなかったのか、底が知れないにも程がある。
　俺は食い終わった魂を吐き出した。他の魂に比べると随分透き通った綺麗な色になっていた。
　俺が咀嚼した事で悪感情と罪業を全部吐き出しきったのか？
「おっ、いいもん見たな新入り、魂の浄化完了の瞬間だ。俺様も久々に見たぜ」
「浄化？じゃあこの魂ってどうなるんだ？」
「そりゃ、地獄を卒業するのさ、その後どこに行くのかは知らんが。ま、見てればわかるぜ」
　いいものを見た、という割に先輩は大して態度を変えず俺が吐き出した魂を顎で示す、
　地獄での長い責めと悪魔によるしごきに耐え切った魂は軽くなった身を翻しながら天へと登っていった。
　くすんだ火の玉だったそれは地獄の赤黒い風景の中で白く輝き、ゆらめく火を尾のようにして精一杯泳いでいく。その光景は、なんだか人間の魂の強さと美しさを全力で体現しているようで・・・。

「受精を目指す精子みたいだな」
「し、新入り、お前・・・・・・」

　先輩が滅茶苦茶微妙な表情をしながらこっちを見た。悪魔はお世辞を言えても嘘をつけないのでしょうがない。俺は悪魔に成り立てなのだからなおさらそういう人間との違いに慣れていないのだ。もちろんそんな弁解はしないが。
　魂はもう見えないくらい高く昇っている。先輩はどこへ行くのか知らないといったが、多分女神様の所に行くんじゃないだろうか、と俺には推測できた。
　アクアが日本で死んだ若者、エリス様がモンスターに殺された人

間、レジーナが自殺者とかを相手にしているのだから、地獄をクリアしてきた魂を相手にしている女神もどっかにいるのだろう。

・・・・・・・・・ん？そう考えると悪魔って人間の転生を手伝っているのか？

「なあ先輩、悪魔がこうやって悪人を更生させて転生を手伝っているってことはさ」

「あん？」

「人間と悪魔って実は結構仲良くやっていけるのか？」

不殺主義の大悪魔であるバニルや、貴族として立派に勤めていた（過去形）高位悪魔ことゼーレシルト伯、冒険者との共存を苦にしないサキュバスのお姉さん。人間との折り合いをつけて生きている悪魔はいないでもない。だから俺の言っていることもそれほどトンチンカンではないと思うのだが・・・。

「仲良くねえ・・・。邪神様に相当長いこと仕えていた俺様は、まだ人間に召喚された経験はねえからなあ・・・・・・・・・・・・・経験はなくとも予定はあるが」

「予定？」

「昔の話だよ、気にすんな」

俺がこの質問をした理由は何となくじゃあない。『保証』が欲しかったからだ。

――もし俺が悪魔のままでも、かつての仲間に受け入れてもらえる――

そんな都合の良い可能性が運良く存在すると、地獄に来て以来一番頼りになる先輩からの保証が欲しかった。

「その仲良くってのはよお、どういう意味合いだ？長期の契約を結んだ悪魔が契約主と行動を共にしている内に最後はダチになるなんてよくあるぜ？召喚も契約もビジネスだが、そこに楽しみを見出す奴は

ざらにいるからな。まぁ、契約が終わるまでの間柄だがそれはしようがねえ」
「うーん・・・・・そういうビジネスライクで短期的な関係じゃなくてさ、もっとこう、しがらみのない友人関係とか純粋に仲間としてっていうのが理そ・・・もとい興味があるんだ」
「なあーんだそりゃあ？親友になってから裏切って悪感情でも峯ろうってか？グレムリンもどきにしちゃ贅沢嗜好じゃねえの・・・・・しかし、友人なあ・・・・・」
立派な牙の生えた顎に手をやり、雄々しい角を傾けながら再び深く考え込むホースト先輩。この先輩が真剣な表情をすると顔のパーツがごついせいでかなり怖い雰囲気になるので早いとこシンキングタイムを終えて欲しい。
俺みたいな下級悪魔との会話に真面目に付き合ってくれた先輩は、色々と思い出すことでもあったのかあちこちに目線をやったあと、長い思考を終えて俺の方を見た。
「俺様から言わせれば、悪魔と人間が仲良くなるってのは無理な話じゃねえ。悪魔は人間より高位な生命体ではあるが、人間の理解者でもあるからな。友人にはなれる」
「おお！」
その言葉に俺が喜んだところで、先輩は一言付け足した。
「だが、仲間にはなれねえ。この俺様が断言する」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

アホだが気のいいムードメーカー、宴会芸の得意な賑やかアークプリースト、アクア
頭のおかしい爆裂狂だが、俺の大事な恋人未満にして名実ともに最強となったアークウィザード、めぐみん

性癖に致命的なほど従順だが、それでも死なず崩れず倒れない鉄壁のクルセイダー、ダクネス

それぞれが内に問題を抱えていながら、さらにその尖った性格ゆえにどこからともなく問題を持ち込んでくるという歩く台風のようなパーティメンバー。

それなりに沢山のクエストをこなし、ベテランと呼ばれてもおかしくないレベルにまでなったにも関わらず安定感というものが生まれることは全くなく、どれだけ作戦を立てて準備を重ねても何故かしょっちゅう命懸けになってしまう、そして俺が命を落としてオチがつくポンコツパーティメンバー。

悪魔になって嘘がつけなくなった今なら自覚できるが、俺はあいつらになら命を懸けてもいいと思っていたんだろう。うん、多分、そんな気がする。口には出さないけど。

・・・とまあ、安定志向だったはずの俺が何度も何度も命を危険に晒してきたのに不思議とパーティを解散しなかった理由が、男のツンデレとかいう需要不明な属性が俺にあったからだという事実が判明した・・・・・・・・のだが、状況は全く好転していない。

悪魔のままでは人間の『友人』にはなれても『仲間』にはなれない。

あの後、その理由を先輩に反論の隙なく説かれた俺はそれはもう落ち込みに落ち込み・・・。

「それでぇ、私としては筋肉質で力強い男の人の魂がほしいのにぃ、姦淫の罪を犯した魂って生前はブクブク太った貴族とかぁ、勢いだけのチンピラばっかりなのよぉ?ありえなくなぁい?」

「うんうん分かる分かる」

「ほんとに分かってるぅ?なんだか胸ばっかり見てなぁい?」

「見てる見てる」

「・・・・・・悪魔だからって正直すぎなぁい?」

何か喋るたびに連動して胸がふよふよ揺れるご近所サキュバスさんと歓談することで癒されることにした。
「・・・そうだなあ、貴族は権力で好き放題している奴も多いらしいからなあ。俺の知ってる貴族も変態と変質者ばっかりだったし」
「そうなんだぁ、変態の魂が吐き出すドロドロした悪感情がスキって娘の方がメジャーなのは分かるんだけどぉ、私はヘルシー志向っていうかぁ、ケンゼンな精神？そういう純粋な魂を踏み躙りたいのにぃ・・・」
「いやいやいや、健全な精神の持ち主は地獄に来ないだろ」
「そっかぁー、やっぱり人間界に行かないとダメかなぁ、私はまだまだレベルが低いから不安なんだよねぇ」
「サキュバスは女性冒険者から全力で排除されるしなあ、俺もレベルは４０を越えたけど悪魔としては雑魚だし、召喚してくれそうな知り合いもいないから行けそうにないよ。・・・・・あれ？サキュバスってどうやって人間界に行ってるんだ？残機を使ってどうにかするのか？」
「残機を使う方法は弱っちゃうから普通はしないよぉ！だから先に人間界に降りた公爵様や知り合いのつよぉい悪魔の方々に召喚してもらうよう申請するんだぁ」
「なるほどねぇ・・・そういうシステムだったのか」
　このサキュバスは地獄生活では俺より長いわけだが、ホースト先輩達のように強力な魔力を滲み出させているわけではないので肩肘張らずに話せる相手だ。こういう打ち解けやすさ、コミュ力こそが男に取り入ることに長けたサキュバスたる所以なのかもしれない。加えて揺れるおっぱいを眺めることで滋養強壮効果があるというのだから言うことなしだ。
「噂によるとぉ、魔王様が倒されたっぽいしぃ、今なら軽い旅行くらいならできそうだとおもわなぁい？」
「へえ、サキュバスにとっても魔王ってのは怖いものなのか？」
「んーとねぇそれもあるけどぉ、魔王退治に頑張ってた冒険者さんがこれを機にいーっぱい引退しちゃうかもでしょ？だから討伐されな

いかもーって、こと」
「ああ、そういうものなのか？冒険者なんだから魔王がいなくたってクエストをこなして食っていかなきゃだろ？カエルとかゴブリン狩ってさ」
「そーゆー意識低い冒険者ばっかりじゃないでしょお？なんかぁ、勇者候補っていうのがいるらしくってぇ、その手の子達はみんな魔王退治に必死だったらしいよぉ？」
「ああ、あの日本人の奴らか・・・・・俺は宴会好きの駆け出し冒険者しか知り合いにいないから考えてなかった。そりゃ他人にラスボスを倒されちゃ、燃え尽き症候群になる奴も出るわなあ」
　俺には全く理解できないが、某ミツルギのようにアクアにもらった力で真剣に打倒魔王を目指していた連中もいたんだろう。王都でも沢山見かけた気がする。そんな奴らにとって、その場の流れ、もののついでで魔王を倒しちゃった俺はどう映っているのだろうか。・・・・・・まさか逆恨みなんてしてないよな？
　まあいいや、それより申請書が出せれば俺もあの世界に戻ることができるという新情報の方が大切だ。
　あの世界にいる悪魔、それも権力とかを持ってそうなのは見通す悪魔のバニルか、残虐公ことゼーレシルト伯か。バニルとはダンジョン最奥の財宝の採掘を手伝う約束をしているので、地獄を出たいと言えば快く手伝ってくれそうだ、そもそもかの残虐公は現在俺とダクネスのせいでエリス様とアクアから日常的にシバかれているから申請書どころではないだろう。
「ところでさ、その人間界に行く申請書？それを俺に用意してもらえないか？」
「ん？いいのぉ？あなたそーんなに弱そーなのにぃ？」
「弱そうで悪かったな。・・・その、なんだ、あの世界にはまだ果たしていない約束があるんだ」
「・・・・・・ふぅん？」
　まぁ、約束といってもダンジョンの財宝云々はさっき思い出したことなんだが。

それとは別に、俺にはもう一つ約束がある。

――――「アクアを連れ戻したら、その日の夜に二人で凄い事をしましょう。それまでは・・・・・・」

約束の内容について詳しく言うつもりはなかったが、サキュバスは急に真剣になったように細めた目で俺を見た。彼女も下級悪魔ではあるが「約束」を重んじているのは先輩たちと同じらしい。それが伝わってくる豹変っぷりだ。

そして、顎の下をなぞりながらしばらく考え込んだ後サキュバスはぷるんとした唇を開いた。

「じゃあぁ、私の頼みごともぉ、聞いてもらっちゃおっかなぁ？」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

地獄が意外とホワイト企業だったり、上級悪魔が割と話せる奴ばっかりだったり、魔界が形だけはちゃんとした街だったりと悪魔になってからの生活は意外性に囲まれている。

意外、というのは「思ったよりまとも」という意味だ。そしてまた、その例に違わずご近所のサキュバスからの依頼もまた意外だった。

「覗き魔、ねえ・・・地獄の中でも犯罪行為かよ」

俺は目の前にいる相手の背中に話しかけた。

場所は俺たちの住居がある場所から少しばかり離れただけの岩場、身を隠すのに適したサイズの大岩がゴロゴロしており、そこにいたこいつが犯人に間違いないだろう。

そう、サキュバスからの頼まれたのは『覗き魔を追い返すこと』だった。

地獄や魔界の意味を見失いそうなになるほどに「思ったよりまとも」な女性問題に最早なにも言えない。ちなみに探すのに苦労はしなかった。こいつからは色欲の感情がダダ漏れだったからだ。

悪魔の俺に感知出来るような感情を漏らす存在、覗きなんてする段階で知能がある奴とは思ったが・・・・・・まさか『人間』とは。
そう、魔界の住宅街に忍び寄ってサキュバスを窃視していたのは人間だった。魂の状態ではなくガッツリ五体満足の生身の人間である。ただし、健康体とは言えなさそうだが。
やせ細った体なのに腹の周りにだけだらしなく付いた脂肪。ハゲ散らかした頭にしぶとく残った金髪。頭髪に反して胸毛やすね毛だけは一丁前にモジャモジャだ。
一言でいうと、痩せたハゲ豚。
・・・・・・・・いや、そもそもなんでこんなところに人間が？
地獄とは魂を洗う場所、だから何千年と続く更生施設と言えなくもないのだが人間が生身でここにいる理由にはならない。加えて、ここは地獄ではなく魔界、さらに意味不明だ。
強いて言うなら牛乳工場の社員寮に牛が侵入している、とでも言えばいいのか。
まあ、俺にとってはそこにどんな事情があるかなんてどうでもいい。俺のような新入り下級悪魔が知らなかった経緯があるのだろう、何も考えずパパッと済ませるか。
「おら、あんただろ！俺のご近所サキュバスさんにやらしい視線を送ってたのは！とっくにばれてるから逃げたほうがいいぜ。意地汚く残った髪を燃やされたくないだろ？ほら、『ティンダー』」
そう言いながら指先に初級火炎魔法を灯すと、明かりに反応したのかそいつは振り向いた。特に予想を裏切ることもない汚い顔で、そこにボサボサの髭がぶら下がっている。それでもその醜態に同情や憐憫が湧かないのはそいつが罪人だからか、俺が悪魔だからか。
あるいはそいつの顔にどこか見覚えがあったからか・・・・・・。
なので、無意識に頭をよぎった名前を口にしただけだったが、そいつは確かに返事をした。
「アルダープ？」
「・・・なんじゃあ、貴様は・・・」

そして、口に出して返事されてしまえばもうそうとしか思えない、こいつアルダープだ！

アレクセイ・バーネス・アルダープ

アクセルの元領主にして、ダクネス曰く『裏で色々悪いことをしていた狡猾な人間』であり、具体的には領主としての責務も果たさないままに金銭問題を丸投げしてダクネスの実家に借金をおっかぶせた悪辣っぷりで俺たちのパーティを巻き込んだ。俺の知らないところで何をしていたかなど想像もできない。というか他人事なので知ったこっちゃない

「いやいや、わかるもんだな。随分と痩せて・・・いや、老けたな？体型なんて萎みきってるのになんで分かるのか自分でも不思議だ。悪魔になったから魂とかに敏感になったのかな？」

「なにを、わけの、わからんことを・・・・・。ワシは忙しいんじゃ・・・、あっちに行っとれ」

「覗き魔になっても偉ぶるのが抜けてないのか・・・まぁ、中身のない人間ほどそれを隠すためにプライドだけは膨らむとはよく聞くけど」

「うぅるさい、何を言っとるのか、わからん・・・ケダモノのような、見た目の分際で、ワシに口答えするな・・・」

「こんなに弱っているなんてな。喋り方に勢いがないし、会話も成立してないぞお前。こっちは色々思い出してきたってのに」

恐らく尊大な口調でこっちを威圧しているつもりなんだろうが全く怖くないし、呼吸が弱っているのか言葉も途切れがちだ。老人に見間違えるほど弱っているのにこの短い会話だけでこっちをイラつかせてくるのは相変わらずで、だから嫌でもコイツに関する記憶がよみがえってきた。

まず、アクセルで倒した魔王軍幹部のデュラハンの討伐報酬が借金でマイナスになったのもこいつのせいだった・・・。

あと、ダクネスの結婚式を強行しようとしてうちのパーティとダクネスの親父さんにさんざん迷惑を掛けてくれやがったし・・・。

しかも、結果的に知的財産のほとんどをバニルに安く売り渡す原因になったのもこいつだったな・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「お前は魔界から追い出す前にしばき倒すことにするわ」
「ほあ・・・?」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

そして冒頭に至る。
これがオヤジ狩りまでの顛末だ。かつてアクセル一の鬼畜と呼ばれ、今や悪魔となった俺とはいえ、まさか本当に理不尽で非道な行為に手を染めると思ったか?これはただの仕返しだ。
やられたら地獄と魔界の果てまで追いかけてやり返す男、それが俺だ。
下級悪魔なりに力を込めてアルダープをげしげしと蹴りつけ、頭を叩いて溜まった鬱憤を晴らす。魂を直接いじめた時よりもやや濁りが多いとはいえ良い悪感情が吹き出てきてお腹も膨れるので一石二鳥である。
「悪事がバレて夜逃げしたとは聞いていたが地獄に逃げ延びているとは思わなかったぜアルダープ様よお!」
「アルダー・・・プ・・・?そ、それは・・・?」
「いや、そこでボケ老人化するなよ、俺が老人虐待してるみたいに見えるだろ」
「貴様はぁ・・・なぜ、ワシを、知っておる・・・?」
「逆にお前はなんで自分の名前すら忘れかけてんだ・・・・・・まあいい、教えてやろうか?俺の正体を」
「ひぃ・・・!」

恐らくこいつがアルダープなのは間違いないのだが、痩せた老人を足蹴にし続けるのはだんだんと気が引けてきたので、別のアプローチで怖がらせることにした。
グレムリンもどきと呼ばれている俺にも申し訳程度の牙や角は生えている。それをグッと見せつけながら威圧すると、アルダープはそれだけで体を縮こませた。目を見開いて手も震えている、もはや崖っぷちに追いやられた虚弱老人にしか見えない。

・・・・・・・・なんだか、やってることが普通のモンスターと一緒なのだが、俺は後戻りできるのだろうか？

いや、これは悪質な覗き魔を大人しく退場させるための戦略的示威行為だから大丈夫！俺の人間性は健在だ！
そう自分を納得させ、改めて目の前の毛むくじゃら老人を睨みつけた。
「教えてやるよ。俺の正体を・・・」
「しょ、正体・・・？ワシには、他の悪魔の・・・知り合いなんぞ」
「くっくっく・・・そりゃあそうだろうなぁ、お互い姿形はもはや別物だもんなあ・・・」
畳んでいた羽を広げ、俺のシルエットが大きくなったように見せかけるとやはり面白いくらい怯えてくれる。
最弱職として侮られることが多かった俺としてはちょっと楽しくなってきてしまった。
めぐみんならもっと盛り上げてから自己紹介するのだろうが、俺はここらで正体を明かすことにする。聞いて驚けアルダープ！
「俺の正体は■■■■だ!!」

・・・・・・・・・・・・・・・。
肝心なところで口からノイズが出ちゃった。恥ずかしっ！
「・・・何？何と言った？何も聞こえんぞ・・・？」

アルダープが虚を突かれたような間抜けな表情をしているが、多分俺も間抜けな顔をしているので痛み分けである。
そういえば『佐藤和真を名乗る行為』はできないんだった。恐らく俺の冒険者カードの名前欄が塗り潰されていることと、悪魔は嘘がつけないことが関係している。
俺は自分で話の腰を折ってしまったことは水に流すことにした。
「えっと・・・・・・ダクネスのパーティに■■・・・・・・サトウって男がいただろ？『そいつ』が過去にお前のせいで色々あってだな。今、転生した魂が■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■・・・・・・・あれえー？」
だが、自分の正体を話そうとすると途中から名前以外の単語も全てノイズになってしまった。悪魔のルールは遠まわしだとしても自己紹介を許してくれないらしい。
「ダクネス・・・・・・？はっ！ラ、ララティーナ！き、ききさまぁ！ワシの、ワシのララティーナの関係者か！ぅげほっ！げほっ！」
「おっ、そっちから察してくれたか。そうそう思い出せ、ララティーナお嬢様のパーティに男が一人いただろ？思い出してみ？」
俺から直接開示できなくとも相手に示唆することはできるようだ、これは新発見。まあ魔界に生身の人間なんて今までいなかったんだから今まで気付かなかったのも仕方ないか。
「おおお・・・ララティーナ！ワシのララティーナ！」
「なんかちょっとずつ元気になってないか、お前？・・・もっと思い出せって、俺からしたらようやく会えた知り合いなんだぞ？それがお前だってことにはもう眼をつぶるからさ、俺とアクセルでの思い出話でもしようぜ？」
しかし狡猾で知られたはずのアルダープはそこで思考停止してしまい、咳き込みながらダクネスの本名を叫ぶだけだった。こいつダクネス以外に興味なさすぎだろ。
しかし、ちょっとずつ活気を取り戻しているというか、テンションが上がっているのは目で見てわかる。サキュバスの覗き見にはセラピーのような効果でもあったのか？ちなみに最近気付いたのだが、俺

は体に関しては悪魔だからムラムラしたり興奮したりはできない、目の保養にはなるがそれだけだ。
　まあ、元気になってきたのならそれでいい。これでお引き取り願う際にちょっと乱暴にできるというものだ。散々足蹴にしてから言うものでもないけれど。
「ダクネスの話なら向こうで俺がしてやるからさ。お前は知らないだろうけどあいつ、新しい装備を手に入れたんだぜ、聞きたいだろ？だったらほら、あっちに行くぞ」
「ララティーナ・・・貴様、ワシのララティーナのことを・・・？」
「そうそう、知ってる知ってる。詳しい話を聞かせてやるからほらこっち来い」
「こら、引っ張るな！ワシを誰だと・・・ワシを・・・ワシ・・・？」
「はいはい」
「・・・ワシは・・・」
　アルダープが身に纏っていた服はあんまりにもボロボロすぎてどこを掴んでも破れそうなので肘を掴んで無理やり引いていくことにした、軽い体は俺の力でも簡単に動かしていける。悪感情を摂取して体力と魔力が回復したのでさらに楽だ。
　でもどこに連れて行こうか・・・・・とりあえず地獄でいいかな。間違いなく罪人ではあるだろうし。

・・・・・・・と、全く感動的でない、しかし意外な再会とサキュバスからの依頼を済ませようとしたところで。

「・・・ワシの名前はアルダープ」

　ボケ老人の気配が消えた。
「ワシの名前はアレクセイ・バーネス・アルダープ・・・そうじゃ、アレクセイ家の主にしてアクセルの領主・・・」
「ど、どうした？自己紹介か？あとお前もう領主じゃないからな・・・？」

肘を掴まれたまま、虚空を眺めてブツブツと訳の分からないこと呟いている。
いや、違う。今までの耄碌状態と違って『訳の分かること』を呟いている？
これはまさか。
「アルダープ、お前・・・正気に戻ったのか？」
「山盛りの黄金に、使い捨ての愛人・・・そうじゃ、自慢の息子も・・・・・正気？」
「おう、正気な。地獄の瘴気じゃないぞ」
「正気・・・ワシはまた、正気に・・・・・・？」
なんか、アルダープがワナワナと震え始めたんだけど。
地獄も魔界も意外とまともだと思って自分を誤魔化していたところもある俺としてはこういうイレギュラーな反応は非常に不安になるのだが・・・・・・。
するとアルダープがいきなり叫び始めた！
「わあああああああああああああ！ワシは、ワシはあああ！」
「ふわっ!?いきなりなんだよ!?」

「また正気に戻ってしまったのかあああああああ!!」

という、錯乱した悲痛な叫びと共に――

「もういやだ！何度狂おうとしても！何度気を触れさせようとしても！何度頭をバカにしても！正気に戻される！狂えない！狂えない！何度も何度も何度も元の状態に捻じ曲げられる！正気に捻じ曲げられるのだ！あいつが、あいつが・・・！」
「狂えない？捻じ曲げ？誰のことだよ――」

――そいつが来た。

「――はあ？」
「ひい！　来たのか!?」
　そいつは、バニルが着ているのと同じタキシードを着ている。
　そいつは、目が離せなくなるような美青年でよく見ると左右の目の色が違う。
　そいつは、そんな「形」をした途方もなく巨大な魔力と瘴気の塊だった。
　視線をそいつの方に向けたまま硬直した俺の手元で、アルダープが叫んだ。
「マクス・・・・・・地獄の公爵・・・・・・マクスウェル・・・・！」
　えっ？
　・・・・・・・・・・・・・・・え゛っ？

豚に心中

人間らしい生活のために太陽が必要だというのは分かってもらえると思う。

でも、太陽に近寄り過ぎることが危険だということも分かってもらえるよな？

卑近な例だと熱中症や脱水症状の危険があるし、俺の元いた世界には太陽に近づきすぎたせいで翼が燃え尽き墜落死した男の神話があったはずだ。

翻って悪魔の生活に必要なものは魔力だ。悪魔は物質としての肉体を持たず、魔力ありきで存在しているからだとかなんとか。

だから悪感情や瘴気を摂取して体内に魔力を作り出す。人間が日光を浴びることで体内に栄養を作り出すように。

そして人間同様に、大量の魔力をぶつけられることは悪魔にとって危険である。魔力で構成された肉体は膨大な魔力の前では掻き乱され、撹拌されて、――――ボンってなるそうだ。

さて、以上の事実を踏まえて現状を端的に説明しよう

「アルダープ！アルダープ！僕だよ！さあ、逃げられるものなら逃げてみてよアルダープ！」

灼熱の太陽が追いかけてきた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「うおわあああ！来るな！来ないでくれマクス！もうこないでくれええええ！」

「やめてえええ！消えちゃう！俺が消えちゃう！来ないでマクス様ああああ！」

俺とアルダープは同じ方向に逃げていた。アルダープが隠れ場所にしていた岩場の奥へと潜り込んでジグザクに抜けていくが、地獄の

荒れた地面を歩き慣れていて、さらに羽で浮いて移動できる俺と違ってアルダープは手足がやせ衰えているのもあって足元がかなり覚束ない。
俺がまだボンッとなっていないのも、アルダープが捕まっていないのも単にマクスウェルとかいう公爵悪魔の追跡がゆっくりとした徒歩だからに過ぎない。
「そこの小悪魔！ワ、ワシを引っ張るならもっと丁寧にせんか！」
「うるせえな！助けてもらってる分際で何なんだお前は！頭が治ったと思ったのに性根はそのままか！」
そう、俺はアルダープの腕を引きながら共に逃げていた。
どうして俺達のパーティに危害を加えてきた奴を庇って一緒に逃亡しなければならないんだ？
マクスウェルの狙いは恐らく俺じゃないし、そもそも俺のような下級悪魔なんて視界にすら入っていないだろうからさっさと一人で逃げるべきなのに、こんなことになったかと一言で言うと、
「悪魔ってこんな面倒くさい生態なのかよ！」
今の俺が悪魔だからだ。
俺は既に「申請書を融通してもらう代わりに覗き魔を追い払う」という約束を結んでしまっている。だからアルダープを放置していくことが出来ないのだ。
マクスウェルが逃げ出したアルダープをどこかに連れて行ってくれる可能性も十分高いと思うのだが、それを保証してくれるものがない上に「俺が追い払う」という条件が満たされない以上契約を破棄したことになるようだ。
契約不履行を侵した悪魔がどうなるかは知らないが迂闊な真似はできない、こっちは何も知らない成り立て下級悪魔なのだ。
悪魔の本懐、生態に逆らうことはできない！
「あがっ!?」
「こけたっ!?早く起きろ！追いつかれるぞ！地獄に来てまで痛がってる場合か！」
「やかましいわ！下級悪魔風情が、このワシに指図するでない！」

「ああ?・俺のおかげで何とか逃げられてんだぞ?・どうする?・このままあいつに捕まっていいのか?・あいつ怒ってるかもしれないぞ?・二度と逃げられないように、すんごいことをされてもいいのか!?」
「ひい!・も、もういやじゃあ・・・マクスのところはもう嫌じゃあ・・・!」
　腕を引っ張られては偉そうに言い返し、かと思えば大悪魔に対して縮み上がって怯える。正気に戻ったかと思えばこの錯乱っぷり、見る影もないし、ざまあとでも言ってやりたいところだが、こいつを走らせなければならないので俺は精一杯声を張り上げた。
「ここで終わりじゃねえだろアルダープ!・震えるな!・奮い立て!・お前は仮にも領主にまで上り詰めた男だろ!・王族やダクネスの実家に取り調べを受けても何かしら汚い方法で切り抜けてブクブクと私腹を肥やしてきたんだろ!・その図々しさをどこに失くしたんだ!・ねちっこさこそお前の強みだろ!」
・・・・・・あれ?
　どうして悪魔の俺が人間を、しかもかつての敵を熱血に励ましてるんだ?
　今はもう考えないでおこう。こっちも死ぬか生きるかだ。
　アルダープは何とか体を起こしたが、そこで顔を顰めた。なにやら右足を抑えている。
「ぐ、うう・・・足を捻ってしまった・・・お前、ワシを背負っ」
「甘えんな。『フリーズ』」
「ふほおおおおおおおおおおおおお!?」
　抑えていた方の足首に向かって氷結魔法をぶちかました。腫れてるなら冷やして治せ。
　爆裂魔法を使ったわけでもない奴を背負ってたまるか!
「き、貴様・・・助かった後で覚えておれ・・・」
「助かりたきゃ走れ!・この豚骨罪人!」
「ヒューッ!・ヒューッ!・いいよアルダープ!・痛みの悪感情だ!・アルダープ!・些細な痛みで大袈裟に痛がるところが可愛いよアルダープ!・どんどん強い痛みを与えたくなるよアルダープ!」

「なんか喜んでるぞあいつ・・・・・・こわっ、はよ走れポンコツ罪人」
なんとか痛みの止まったらしいアルダープを引いて走り出す。
そんな俺たちを後ろから、あの甲高い声だけが追いかけてきた。
「楽しみだ！楽しみだよアルダープ！痛みが恐怖に育つ瞬間が！恐怖が絶望に転ずる瞬間が！他の悪感情が全て枯れ果てるほどの絶望が！ヒューッ！ヒューッ！ヒューッ！」

アルダープは大概ダクネスにゾッコンだがこいつもこいつでアルダープに心酔しすぎだろ！巻き添え食ってるこっちのことも気にかけてくれよ！
しかし、悪感情か・・・。こうして逃げている間にも隣にいるアルダープからは常時、痛みや恐怖をブレンドした悪感情が湧き出ているし、それはマクスウェルだけでなく俺の体内にも栄養として吸収されているのが分かる。
これならもしかして・・・。
俺はアルダープを片手で引きずるように走りながら反対の手をマクスウェルに向けて、
『ファイアーボール』！『ライトニング』！『ブレード・オブ・ウインド』！」
中級魔法を連続でぶちかました。俺の習得している中で最も攻撃力の高い魔法が真っ直ぐ標的に向かっていく。直後、礫が弾け粉塵が巻き起こった。一つ一つの魔法に限界ギリギリまで魔力を込めただけあって自己新記録間違いなしの威力だ。
そして、初級魔法すら撃てなくなるほど魔力を消費した俺はというと・・・。
「すげえ！魔界の瘴気と悪感情のおかげで魔力がガンガン回復していく！」
ピンピンしていた。

「なんなのだ前・・・ちっぽけな悪魔のくせにやるではないか！」
「ふはははは！俺は名も無き悪魔！中級魔法を操り、いずれあの世界に舞い戻る者！」
肺に吸い込んだ瘴気と胃に溜まった悪感情が消化され、消耗した魔力を新たに補っていく感覚を初めて理解した。まるで内臓がマナタイトになった気分だ。しかも瘴気なら魔界に溢れている！
俺には魔王戦において、マナタイトがないと大した攻撃魔法を撃てなかった苦い思い出がある。だから今ちょっと楽しい。ドレインタッチなしで魔法が連発できるのは爽快感があるな。
「とはいえあいつの魔力は消えてない、足止めにしかなってないみたいだ！行くぞポンコツ罪人」
「なっ、このワシを、まだ走らせるのか！」
「そうだ走れほら！そして悪感情を吐き出せ！」
分かってはいたが、マクスウェルは土煙の中から平然と姿を現した。焦点の合わないオッドアイも、危うげにふらつきながらも確実にこっちを捕捉している足取りも何も変わらない。
アルダープの腕をわざと強く引いて再度走り出す。そうすることでアルダープから吹き出た痛みと怒りの悪感情が掴んだ手から伝わってきた。
それと同時、急速に回復した魔力を休むまもなく攻撃魔法につぎ込む！
「足くらい滑らせろ！『ファイアーボール』！『ファイアーボール』！『ファイアーボール』！・・・・・・・・・おまけに『ティンダー』！」
「あちっ!?貴様ああ！なぜ今ワシにちょっとだけ攻撃した!?」
「美味しいご飯を製造するためだよ！」
マクスウェルの追跡は止まらない。
アルダープは相変わらず喧しい。
俺は未だに下級悪魔のままだけど。
何となく、悪魔の戦い方が分かってきた気がする！
流石に公爵悪魔に勝てるとは思ってもいないが・・・。

「これなら負けねえ！」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

数分後。

「これでも撒けねえ！」

状況は全く進展していなかった。

魔界の瘴気と「食い溜め」した悪感情で魔力を高速回復、それでも足りなければ追加の悪感情を補充するためにアルダープを張り倒し、たっぷりの魔力を込めた魔法を放つ。

別に思い上がったつもりはない。後先考えない魔力を込めても紅魔族の連中が楽々振り回していた上級魔法から二段も三段も落ちるのは見ればわかる。そんなものが公爵悪魔に通じるならバニルが魔王軍幹部なんてやってないからな。

「でも、これはいくらなんでもおかしいだろ！倒せるとは思ってないけど、足止めすらできないのか!?大悪魔ってのはこうも理不尽なのかおい!?」

マクスウェルと俺達の距離は広がらない、狭まりすらしない。こっちは走りながら魔法を放ち、向こうは夢遊病患者のような頼りない足取りで歩いているのに状況は膠着したままだ。

例えば機動要塞デストロイヤーや巨大スライム状態になったハンスが相手の場合、こいつらにファイアーボールをぶつけても止まらないだろう。

だが、マクスウェルは青年の姿で、二本の足で歩いているのだ。体がデカいわけでも不定形なわけでも八本足でもない。これだけ攻撃しているなら足を滑らせたり転んだりするぐらいはしてくれてもいいだろ!?暖簾に腕押しでもしてる気分だよもう！

しかし俺にはまだ次なる策がある――――

「アルダープ！僕だよ！煙の中からこんにちは！それともおはようかい!?ヒューッ！ヒューッ！」

「ぎゃあああああ！驚かすなマクスゥ！おい小枝悪魔！この策で逃げ切れると言っておったではないか！」

「うるせえお荷物罪人!!なんてこった煙幕も効かねえのかよ！」

けど、その策もダメでした。

ありったけのクリエイトウォーターで生み出した水を、荒れた地面の窪みや亀裂に流し込んで巨大な水たまりを作り、同じくありったけの魔力を込めたファイアーボールでそれを一気に蒸発させる。

その水蒸気に紛れて逃げる方向を大きく変えて隠れ進んだのだが・・・・・・この有様である。彼我の距離はまるで固定されたかのように変化しない。

「お、おい小悪魔！近づいてくる！マクスが近づいておるぞ！」

「えっ、嘘・・・!?」

ほとんど俺に引きずられているに等しいアルダープが叫ぶ。必死に走っていて前を見る暇もない俺とは逆にこいつはマクスウェルの方から目が離せないらしい。目が離せないくらいに怖がっているのだろうけれど、こっちが走りにくいから走るのに集中してくれないかな・・・。

俺も走りながら何度か振り向く、背中を焼くような高密度の魔力はさっきからビンビンに感じているが距離が近づいているかは目で見て測るしかない。

起伏の激しい岩だらけの大地はひどく見通しが悪い。そんな中を問答無用で直進してくるタキシード姿は確かにさっきよりも近づいているような・・・・・・？

「気持ち縮まっただけだろ！慌てんな！」

「そんなことはない！あいつが来る、来とるんじゃ！」

「わあったよ！だったら必死こいて走れよこら！」

しかしこいつ何をいきなり怯えだしたんだ？

おかげで恐怖の悪感情が湧く量が増えた気もする、それに恐怖に対

する絶望のブレンド比が増えた。近くにいる悪魔の俺にはそれが敏感に分かる。
「ヒューッ！ヒューッ！ヒューッ！」
マクスウェルが急に声を上げた。見ると嬉しくてたまらないとでもいうように口の端がつり上がった笑みを浮かべている。
そうか、分かった。
俺がアルダープをひっぱたいて悪感情を引き出すように、マクスウェルはこうやってじわじわアルダープを追い詰め、好みの悪感情を絞っているんだ。
「でも、あいつは公爵悪魔だろ・・・こんな地道なやり方で手に入る悪感情なんて高がしれてるんじゃ・・・」
「そうだ！飛べっ！飛ぶんじゃ木っ端悪魔！その小汚い羽で飛んで逃げるがいい！」
「はあっ!?人が気にしてる羽のことをまたストレートに・・・飛んで欲しけりゃもう少し痩せ・・・無理か」
飛んで逃げるという方法は思いついていた。
これでも俺の『飛行』スキルはそこらの下級悪魔を上回る熟練度を誇る。地獄の地面は整地されてなくて歩きづらいので仕事中はずーっと飛んでいたからだ。
最初の頃は他の悪魔同様に時と場合に応じて歩いたり走ったりもしていたが、『飛行』スキルを覚えて以来もはや浮きっぱなしである。そりゃレベルも上がるというものだ。
でも流石に人間一人ぶら下げて飛んだことはない。こっちは瘴気と悪感情を補充しながら消費するという自転車操業な状態でようやく逃げているんだ。公爵悪魔相手にぶっつけ本番なんてできるか！
例えばここで一気に魔力が跳ね上がるようなことがあればいいのだが、瘴気の濃度はどこも一定、悪感情を出してくれる魂は地獄にならいくらでもあるが魔界にはない。
俺はマクスウェルに打ち込み続けていた魔法を一旦止めて走る方に集中する。
しかし、走ってもダメ、迎撃してもダメとくればもうどうし

ろってんだ！
「何回言ったか知らんが理不尽にも程があるぞ公爵様はよお！アルダープ！お前痩せるだけじゃなくてもうちょっと小さくなれよ！そしたら荷物よろしく運んでやるからよ！」
「無茶吐かすな！ワシがこの地獄に来て何十年たったと思っとる！小さくなって隠れられるならいくらでもやっておるわ！」
「何十年って、お前一年くらい前までアクセルにいたじゃねえか！」
「何を意味のわからんことを言っとるんだ・・・？お前がワシの何を知っとる！」
「え、なに？俺がおかしいみたいに・・・お前もしかしてずっと逃げてんのか？」
「いや、何度も逃げ切れずに・・・お、思い出させるんじゃない！」
アルダープが過去の惨事を思い出したように竦みあがった。
と、そこで突然、
俺にはピンと来た。
人間だった頃の知識と記憶が今の状況に引っかかるところがあったのだ。
――いつまでも引き離せないが追いついても来ない
――本人曰く何十年も繰り返してきたのに
――どれだけあがいても逃げ切れない
――絶望
『この私の体は好きにできても、心まで自由にできるとは思うなよ！
城に囚われ魔王の手先に理不尽な要求をされる女騎士とか……どうしようカズマ、予想外に萌えるシチュエーションだ！』
『必死に生きようと無茶なクエストを受け続けた私は、力及ばず魔王軍の手先に捉えられ…組み伏せられて……私はそんな人生を送りたい！』
俺がこの状況から連想したのはそんなどうしようもない回想。
聖騎士にしてドM、至高のシチュエーションを求めて被虐性癖の道を突っ走る俺たちのパーティメンバーにしてアルダープが地獄に落

ちてまでご執心のダクネスのお言葉である
この切迫した状況であいつの言葉が頭に降りてきたってことは――
――
「――プレイの一環か？」
俺は、足を止めた。腕を掴まれたままのアルダープがつんのめって転ぶ。それでもすぐに起き上がって早く逃げろだなんだとぎゃあぎゃあと喚きだす根性があるあたり只者じゃない。
だが、逃げ出す必要は、もうない。
公爵悪魔のマクスウェルもまた、動かなかったからだ。
岩場の影でぼんやりと立ったまま、こちらを無表情で眺めている。アルダープが大袈裟に怖がるのが面白いのか偶に手を振りながら。
その様子を見て俺は深く息を吐いた。
あー、緊張した。マクスウェルが近づいてきたらアルダープはともかく俺は即消滅するところだった。しかしこれで確信は得られた。
――やはりこれはプレイだ。
アルダープを適当に逃がし、それを追いかけじわじわ追い詰めるというシンプルなもの。
逃げ出したペットや囚人を毎回痛めつけ続けるとその内檻から逃げ出さなくなるそうだが、それを模したのかもしれない。
ダクネスが被虐性癖ならマクスウェルは加虐性癖といったところか。
どうやらアルダープの周りには極端なのしかいないらしい。
「おいアルダープ、マクスウェル様とやらの好みの悪感情はどれだ？俺の予想じゃ絶望か焦燥のどっちかだと思うんだが」
「はあ？こんなときに何を言っとる！ああまずい・・・！近づいてきとる、近づいてきとるぞ！マクスがワシに！」
「錯乱してんじゃねえ！ほら、ララティーナのこと教えてやるから！」
「はっ！ララティーナ！」
ダクネスのことを出すと一気に正気に戻った。アルダープが偏執

的なのかダクネスがそれほど魅力のある女なのかは知らないが、あの被虐性癖を知っている身としては閉口だ。
もしかしたらアルダープはダクネスの外面しか知らなかったのかもしれない。
ん？なんか思いつきそうだ。
これがうまくいけば満足したマクスウェルは追いかけっこを切り上げてアルダープをどこかに連れて行ってくれるだろう、今ならそれが確実だと分かる。
これは逃避行じゃなかった。保護者の悪魔と罪人の鬼ごっこみたいなものでしかなかった。だから主催者が満足すればそこで終わりなのだ。
「絶望だ・・・マクスはワシの絶望を得るために何年に一度かこうやってワシを逃がすんじゃ・・・」
「なるほど、それを追いかけて、逃げ切れないと悟ったお前から絶望をいただくって寸法か。しかし体感で何十年もの間そんなことをやってるのか？絶望したとか言いながら何度も挑戦しているじゃないか。お前には学習能力がないのか？」
こいつの言葉を聞くと脱出の希望を捨てていないような印象を受ける。それは絶望の概念とは矛盾しているんじゃないのか？
「それは・・・・・そうだ、思い出してきた・・・思い出してきたぞ・・・マクスの力のせいじゃ・・・ワシが死ぬこともなく、正気を失わないのも、何度失敗してもそれを忘れてまた逃げ出してしまうのも・・・」
「力？公爵連中がえげつない能力持ちなのは知っているけど・・・なにか？アイツの能力は記憶や人格を弄る系ってことか？」
正気を失わない、失敗したことを忘れる、と聞けば洗脳系能力者みたいだが・・・死なないというのがよく分からない。悪魔なのに蘇生魔法が使えるのだろうか。
参照できる公爵悪魔の記憶が見通す力を持つバニル一人なのでどうにも予測が立てにくい。
アルダープは未だマクスウェルから目を逸らさないままその力について言及した。

「・・・し、真理をねじ曲げる者、辻褄合わせのマクスウェル・・・奴が力を使えば世界は奴の思うがままなのだ・・・」
「・・・・・・・・・は？」
　こいつ今なんて言った？世界を思うがまま？
『ワシを正気に戻す』と奴が決めれば・・・とにかくそうなるのだ、過程や辻褄は全て捻じ曲げられて結果へと紡がれる・・・ああ！そうじゃ！また思い出してきた！・・・い、今までも奴は『逃げたワシが捕まる』という風に辻褄を合わせた上でワシを泳がして楽しんでおったんじゃ！」
「おい！おおい！おいおい！お前ふざけんなよ!!じゃあなんだ？これだけ走っても妨害しても逃げ切れないのは『アルダープが捕まる』って未来が真理として確定しているからか!?最終的にそうなるように辻褄が合うってか！だったら何しても効果がないわけだよ！とんだ骨折り損だ！」
　バニルが未来を覗き見る能力で、マクスウェルは未来を好きに設定する能力ってことか？
　俺はちっぽけな体に詰まった自分の命と魔力を張っていたのに、実は負け確イベントだとか・・・なんたるガッカリ感！攻略サイトはどこだ！負け確と分かっていたら魔力の無駄遣いなんてしなかったよ！
　俺の中にやるせなさと怒りがふつふつと湧き上がる。これはやり返さないと気が済まない、やり返すべきだ、やり返そう。
　もちろん影を踏むのも畏れ多い公爵様に楯突く気はないけど？
　そもそも影が踏めるほど近寄ったらボンッってなるからね、俺が。
「アルダープ・・・悪魔が嘘をつかないのは知っているな？」
「はあ？そのまぬけ面を近づけてきたと思ったらいきなりなんだ？それよりマクスが止まってる内に早く逃げんか！」
「まあまあ落ち着け、今から大事なことを伝えるからちゃんと信じてくれってことだ。ララティーナのことだぞ」
「ララッ!?」
　俺が足を止めたことで地面にへたりこんでいたアルダープが顔を

はね上げた。それに連動したのか絶望と恐怖が少し薄れて別の感情が流れ出てきた。　これは喜悦と、期待か？

「・・・ヒューッ!!!」

もちろんそんな喜ばしい感情を喜ばないのが悪魔だ。

アルダープから絞っていた悪感情が途切れたことが気に障ったらしいマクスウェルが追跡を再開する。完全な無表情のまま一歩、踏み出した。

それだけで地面は轟音と共にひび割れ、衝撃で岩は吹き飛びマクスウェルとの間にあった遮蔽物は全て消え失せた。おまけに飛んできた岩や瓦礫は俺達を綺麗に取り囲むように地面に突き刺さりバリケードとして退路まで断ってくる始末。

幸運では説明のつかないこの現象は辻褄合わせの本領発揮ということか。

「マッ、マクスウェル・・・！怒っておるのか!?こらっ！そこの小悪魔！貴様のせいでマクスウェルが機嫌を損ねたでは」

「ララティーナのお嬢とマクスウェル、どっちが大事なんだよ、いいから聞けって。この名も無き悪魔がとっておきの真実を教えてやる」

一歩踏みしめる毎に修復不可能な亀裂を生み出しながら大悪魔が迫ってくる。俺が不純物を混ぜ込んだ絶望を元に戻して徴収するために。

そのあとは辻褄合わせの力でアルダープを記憶喪失にでもして鬼ごっこを再開するのだろう。

しかし、甘い。見通す悪魔を出し抜いたカズマさん・・・・・の関係者からしてみればそれはあまりにも甘い。絶望とは二度と手に入らないものにこそ覚えるものだ。

俺はアルダープの耳に口元を寄せると――

「ララティーナな、ファーストキス済ませちゃったぞ」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「ヒューッ！ヒューッ！すごいよ、すごいや！アルダープ！こんな上質な絶望は何年ぶりだろう!?愛しの君を連れ去ったあの日から・・・・・あれ？いつだっけ？誰かに手伝ってもらってたような・・・？ああそれにしてもすごい絶望だ！アルダープ！君を選んだ僕の目に狂いはなかった！ヒュッ！ヒューッ！」

整った髪を振り乱し、オッドアイを爛々と輝かせた公爵様がアルダープの周りをはしゃぎ回っている。

こうして落ち着いて眺めていて気づいたのだが、マクスウェルは後頭部がぽっかり欠け落ちているようだ。イケメンに敵意を抱いている俺でも、あのグロすぎる穴を見て突っかかろうとは思わない。

一方で、アルダープはというと膝をついて魔界の空を見上げたまま燃え尽きたようにピクリとも動かない。全身は汗びっしょりで周囲には吐き散らかされた吐瀉物や血が泥のように点々としている。数分前まで苦しみもがいていた時の名残だ。

ちなみに俺はアルダープを放って空に避難しました。

ララティーナことダスティネス・フォード・ララティーナ、愛称ダクネスの初めてのキスがどこかの誰かのものになったという真実は、それはもう猛威を振るい、結果としてとんでもない量と質の絶望の悪感情を爆発させた。

アルダープは最初、頭を強く殴られたかのように驚愕に目を見開くだけだったが、俺の言葉に嘘がないと理解した途端頭を抱えてそこら中を転げ回り、悶えに悶えて岩や地面に額を打ち付け血とゲロをこびりつけてまわった。骨と皮ばかりの老人とは思えない七転八倒っぷりには、ちょっと申し訳ないと思わなくはないほどに。

以前クリスから聞いた話ではアルダープの執着はダクネスが子供の頃からのものだったらしい。例えそれが変態性欲だろうと偏愛だろうと、そこらの青少年向け純愛ラブコメなど駆逐してしまうような底知れない感情ではあったのだろう。

結果としてアルダープは領主の権力と横暴の限りを尽くしてもダ

クネスを手に入れることはできなかったし、どんな過程があったかは知らないが今や地獄の公爵のおもちゃになっている。
それでもこいつにとってダクネスは生きる原動力みたいなものではあったのだろう。
アルダープがダクネスの本性を把握していたのかは今となっては知る由もない、しかし少なくともアルダープがラティーナへ向けていた欲望はぽっきりと根元から折れた。
正気を失くして絶叫し、食いしばった歯がポップコーンのように四散する様には流石の俺も溜飲を下げざるを得ない。
「ファーストキスっては最初の一人だけのもの。こればっかりはどれだけ辻褄を合わせても覆らないもんなあ」
倒れ伏してピクリとも動かない豚骨亡者の周りを踊り狂うタキシードを着た大悪魔を眺めながらしみじみと俺は呟いた。ちなみに暴れまわったアルダープの全身の怪我はマクスウェルが能力を使ってよく分からない感じで治ったらしい。
こうして公爵様には満足頂けたわけだが、ダクネスのファーストキスを頂いた佐藤和真、彼の関係者である俺としては今回の件はギリギリだったと言わざるを得ない。
マクスウェルがちょっと早く遊びを終わらせるつもりだったら俺は情報を集めきる前に消滅していたし、アルダープがファーストキスを自分で奪えなかった程度でショックを受けるような処女厨でなかったらあれほどの絶望は得られずマクスウェルも満足しなかったのだから。
「これも幸運パラメータのおかげかな・・・」
そういうことにしておこう。
俺は名も無き悪魔。地獄随一の幸運の持ち主にして中級魔法を操り、やがてあの世界に返り咲く予定の者。
絶望を余韻まで堪能して満足したらしいマクスウェルがアルダープの腕を引いている。どうやら連れて帰ってくれるらしい。ようやく俺も肩の荷が降りた気分だ。そもそも悪魔の持つ、契約を放棄できないという性質がなければこうも危険にならなかったような気がす

るのだが・・・。
上空からの第三者目線でそんなことを愚痴っても意味はないか。
と、ここでマクスウェルが、ゴリゴリと音を立てながらアルダープを引きずっていた手を放した。どうやら完全に意気消沈して脱力しきった肉体が運び辛いらしい。
「そうだ、どうして忘れていたんだろう！アルダープ！アルダープ！絶望上手なアルダープ！今日！君から受け取った極上の悪感情のお返しをしないといけない！ずっと昔に誰かから言われたんだ！僕は忘れっぽいって！ヒューッ！ヒューッ！だから急いでお返しをするよ！」
瞳はキラキラと輝いているが後頭部は底なしの暗い穴が空いた頭を振り向かせ、そんなことを言う大悪魔。これはアクアが「名案を思いついたわ！私ったら天才ね！」と発言した時に匹敵する危険度だと直感した。
「アルダープ！大好きな君が元気に魔界を駆け回れるだけの『力』をあげるよ！」
そう言うとマクスウェルは首を下に傾けた。頚椎が折れたんじゃないかと思うほど鋭い角度だ。同時に欠けた後頭部の断面がアルダープを向く、まるで大砲の照準を合わせたように・・・。
「この世にある我が眷属よ。地獄の公爵マクスウェルが命ず・・・・・」
どす黒い魔力が後頭部の穴からごぽりと溢れ出た。なんだあれ!?俺は全力で羽ばたくと同時に飛行魔法を発動して急速離脱した。
「汝に我が呪いを！『カースド・ダークネス』！」
聞いたことのない魔法が発動し直撃したアルダープが黒い光に包まれる。
遠目に見ると、かつてダクネスが食らった死の宣告を彷彿とさせる光景だが・・・。

「さあ、立って！アルダープ！ヒューッ！ヒューッ！」
明らかにヤバい魔法の直撃を受けてもぴくりとも動かないアルダープに喜色満面のマクスウェルが呼びかける。アルダープはどう見ても走れる様子ではない。
しかし、変化は一瞬
「・・・・・・・・・・・・・・・お？」

アルダープの膝がビクンと痙攣すると、その体がバネ仕掛けのように立ち上がった。その弾みで首が仰け反る。
「ヒューッ！ヒューッ！走ろう！走るんだ！走れ！アルダープ！」
その言葉が何かのスイッチだったのか、さっきまで虚脱状態だった老人とは思えない勢いで無茶苦茶に足を動かして地面を跳んでいく。
だが、目は虚ろで、上半身はグラグラと芯が通っておらず、両腕を振り乱したままだ。
恐らくマクスウェルは洗脳ではなく呪いか何かの魔法を使ったのだろう。今のアルダープはそれのせいで我武者羅に走らされている。それは見えない糸に引きずられている操り人形のようだった。
うわ、マジかよ・・・あれ、両足首が折れたまま走ってるじゃねえか・・・。
マクスウェルはアルダープの隣を難なく並走し、二人は地平線に向かってどこまでも駆けていった。
「ヒューッ！さあ行こう！魔界の彼方へ！ヒューッ！ヒューッ！ヒューッ!!」
魔界の中心、その一等地にあるという公爵の邸宅に辿り着くまでにアルダープの両足の骨や筋肉が原形を保っていられたのかどうかは知らない。
まあ何があっても辻褄を合わせてどうにかするのだろう。
はい、契約履行。

就職地獄期

　それはホースト先輩からされた話。
「悪魔と人間だって友人にはなれるさ。お互いがお互いを気に入ればいいだけなんだからよ」
「でも仲間、冒険者どもが組むような『パーティ』ってなるとそうはいかねえ、ああいうのはただ気が合えばいいってだけじゃ足りねえからな」
「『目的』が合わなきゃいかねえんだよ」
「討伐依頼だろうが、金稼ぎだろうが仲間ってのは同じ目標を掲げて足並み揃えて動くもんだ。当然互いに信用し合う必要があるし、時と場合によっちゃあ命すら預け合いになる。これが友人関係にねえ物だ」
「あん？・・・・・・ああ、おう、そうだな。確かに信用や誠実っつう言葉は悪魔のためにあると言ってもいいだろう。掌返しと口八丁手八丁で契約を破るのはいつの時代も人間だ。アーネスも昔はそれで散々苦労させられたらしいしなあ。だが、言ったろ？悪魔と人間の間には信用があっても同じ目標がねえ」
「悪魔ってのは人間をはじめとした魂を持つ生物の悪感情ありきで存在できる。どれだけ人間と共にあろうが、悪魔にとっちゃその人間をイラつかせたり怒らせたり絶望させなきゃ干涸らびちまうんだよ」
「人間は大なり小なり幸福になるための目標を持ってるのさ。そんで目標に至るための目的が、固いメシを食いたい、名誉が欲しい、女が欲しい、金が欲しい・・・・・・。こんなところだな。グレムリンもどきのお前には分からんだろうが」
「でも悪魔である限り悪魔にとっての目標は最終的に人間の不幸だ。そうじゃねえと上質な悪感情は手に入らねえからな。どうあがいても辿り着く目標が真逆なんだよ」
「絶対に有り得ない例え話だが、全人類が悪魔と和解したとするだろ？人間と悪魔が心の底から仲良しこよしになるわけだ。それはいい世界かというとちがうだろ？」

「だってそうなっちまったら悪魔は悪感情が枯渇して全滅するんだからな」

「だから悪魔は『契約』ってルールを使うわけだ。人間は幸福のため贄を捧げ、悪魔は悪感情のため力を貸す、違う目標を持った同士が辛うじて交流する最後の方法なわけよ」

「・・・・・・そんなひでぇツラすんなよ。俺様が悪いことしたみてぇじゃねぇか、聞かれたことに応えただけなのによ・・・・・・・・・・んあ？お前の落胆の悪感情にはなにやら人間臭さがあるな・・・別にとって食いやしねぇが」

「別に友人関係だっていいじゃねぇか。俺様もちいっとばかし前にそんな感じの間柄の人間がいたんだぜ？」

「つっても俺様は邪神様復活のためにそいつの力が必要で、逆にそいつは俺様の目的には全く興味なし、俺様の持ってくる食い物にしか食いつかねぇし、他にもわがまま三昧だったがな」

「・・・いや別に？嫌いな奴じゃなかったぜ。万が一俺様を召喚しやがったらまた仲良くやるかもな」

「・・・・・・なんだって？・・・ああ、確かにこれ友人っつう割には擬似契約状態、互いの目的のために約束を交わした感じになっている・・・俺様としたことが見落としてたな」

「ま、まあ俺様は生まれながらの上級悪魔だしな！無意識に小さな契約をクリアしちまうこともある」

「・・・うん？契約を達成できるほどの実力がないと友人すらできないんじゃないかって？」

「ま、まあ下級悪魔でもステータスが高けりゃなんとかなんだろ！レベルを上げてステータスが高くなればよ！」

「・・・・・・うおっ、すげえ悪感情」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

それはアーネス姐さんからされた話

「はあ？召喚申請書の読み方だって？」

「あぁ・・・グレムリンもどきだから悪魔文字を読めるほど知力が上がってないんだね」
「じゃあなんで申請書なんて持ってんだか・・・・・・いいわよ、」
「まず上に名前でしょ？その下に身長、体重、角の本数と、羽のサイズと指の総数・・・ん？なんで指の数って、６本指の奴にも対応してるからに決まってるじゃない」
「あと、サイズはちゃんと書いておくんだよ、召喚用の魔法陣に羽が引っかかったら向こうの悪魔に迷惑かかるからね」
「ここから下の大きい欄は、あんたが今まで魔界や地獄でどう働いて、どれだけ功績を上げたか、そういう来歴を簡単に記入するの」
「職歴？履歴書？何言ってんだい？そもそも私はこんな紙切れ使ったことないからねぇ、そこまで詳しくないんだよ」
「・・・じゃあどうやってあの世界に召喚されたかって・・・・・・あのねえ！あんたみたいな下級悪魔に毛が生えたようなのと！上位悪魔たる私を同列に語るんじゃないよ！」
「私みたいな高ステータスの悪魔は魔界にも人間界にも自然と名前を知られていくんだから、こんな書類を受け取るまでもなく召喚したいって奴はごまんといるのさ！」
「まあ、人間からはもう二度と召喚されたくないけどさ・・・」
「ゴホン！それはともかく、あんただってわざわざ申請書の書き方を聞いてくるぐらいなんだから、私ほどじゃなくともステータスには自信があるんでしょう？」

「・・・・・・・・・なんだいその悪感情は」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

この悪感情の正体は落胆、ガッカリ感にほかならない。
文字通り体を張って手に入れた召喚申請書とやらも今ではひどく頼りない。
俺がそうなっている理由は至ってシンプル、地獄や魔界からあの世

界に召喚してもらうにはそれなりに実力を示さなければならないことが判明したからだ。
よく考えたらザコ悪魔をわざわざ魔力を割いてまで召喚しようとする奴がいるわけない。
必要なのはレベルアップと自己アピールか・・・・・・。例えばどんなのだろうか。

わたくしの名前は■■■■です。角はＳサイズが二本、翼もＳサイズが一対、指は２０本、身長体重はカクカクシカジカ・・・・・・。
地獄では主に窃盗犯と殺人犯、それとモンスターに変態性欲をこじらせて犯罪に発展させた者の魂を取り扱っておりまして、それらを火炎地獄、凍結地獄、針地獄の３つを中心に振り分けておりまして・・・・・。
あっはい、特に印象に残ったエピソードですか・・・・・・・・・・・・・・・
あーはい、えーと、はい。
ある日、女性型のマンティコアばかりを非合法に飼育して性欲の捌け口にしていたサディスト変態貴族の魂と、ジャイアントアースウォームに飲み込まれるのが好きすぎて違法に繁殖させていたエンドソーマフィリアの変態冒険者の魂を担当しましてですね・・・。

これを一緒に氷結地獄に入れたところ、性癖が混ざっちゃったんですよ。

『雄のマンティコアに後ろからぶち込まれながらアースウォームのお口にぶち込みたい』とかいう声が魂から聴こえてくる始末でした。
・・・こんなわたくしですが、召喚して頂いた暁にはきっと役に立ってみせます！

「・・・・・・・・・・就活かよ！」

思わず叫んでしまったが、周囲にいるのは言葉も分からないグレム

リンなので気にしない。
武装国家ベルゼルクが実力主義だったのに対して魔界は実績主義らしい。面接なし、実技試験なし、書類審査オンリーということはそういうことだ。もしかしたら上級、下級で差を付ける、学歴フィルターならぬ悪魔階級フィルターすら完備されているのかもしれない。
アルバイトですらアクアと一緒にあの世界に転生するまで一切経験がなかったし、冒険者カードがあれば諸々の手続きは済んだから履歴書すら書いたことがない。
就職して社会人になるどころか、学生だったかもあやしい俺にとってこれは魔王を倒すよりも難易度が高いんじゃないか？
というわけで件の書類は白紙で自宅に放置されたまま、俺は今日も地獄で働いていた。
「こいつとこいつが強盗、こいつとあいつが殺人、あとは全部変態か・・・よしっ、じゃあこっちはおなじみの火炎地獄までよろしく」
飽きもせず罪人の魂を詰めたカゴを両手に指示を出す。
俺の指示を受けた数匹のグレムリンが小型動物のような唸り声で返事をした後、火炎地獄の方へ駆けていった。
ホースト先輩が罪状ごとに仕分け、さらに俺によって悪感情が濃い物を振り分けられたカゴを咥えて。
あいつらは飯を支給されている俺と違って仕事中のつまみ食いが主食なのでこうしてやると喜び、そして手懐けやすくなる。
「ダンジョンで出くわした時はあんなにビビってたグレムリンも、こうなると可愛いもんだな」
自分の担当分を抱えて魔界を低空飛行で移動する。その速度は数日前よりずっと早い。今日もまたあっという間に仕事が終わるはずだ。これも俺とグレムリン達の連携の練度が上がったおかげだろう。
そう、つい最近大幅にレベルが上がった俺は他のモンスターに簡単な指示ができるようになったのだ。
アーネス姐さんは魔力を込めた殺気や威圧でグレムリンを統率したり誘導したりて仕事をさせることがあるのだが、俺がしているのもそれに近い。

ただし強制力もないし理不尽な命令は出来ないが、ちょっとしたお願いや提案が通じるので、さっきのように仕事を手分けしたり俺が苦手としている変態の魂の担当を交代してもらったりできる。なんだか恐ろしいモンスターを飼い慣らしているようで気分がいい。

このレベルアップについて心当たりはある。

アルダープから大量に発生した絶望を食したことだ。

ダクネスの初めてのキスを暴露したとき、別にマクスウェルの分を横取りしたつもりではなかったが間近にいたことでおこぼれがもらえたらしい。そしてそれが俺の大幅レベルアップに繋がったのだと思う。

脳科学や心理学については詳しくないが、人の感情というのは記憶や経験の産物なのだろう、つまり悪感情にも経験値はあったらしい。そして、食事や討伐によって経験値を得てレベルが上がる法則は魔界にも存在したようだ。

スキルポイントこそ爆増したがステータスはほぼ変化がなかったので、自宅にしまってあった冒険者カードをなんとなく確認するまで気付かなかった。

ちなみに悪感情を摂取しただけで、命を奪ったわけではないので冒険者カードの討伐履歴に変化はなかった。

・・・・・というかもしも記録されようものなら、例え人間社会に戻れても俺はアルダープをはじめとした多くの罪人を手にかけた世紀の連続殺人者と誤解されて処刑されかねなかった。

と、地獄に適応したおかげかトントン拍子に成長、変化してきた自分の身の振り方を再確認しながらあっという間に仕事を終えたところ、不意に声をかけられた。

「あっ、モドキ君だぁ～」

それなりの速度で飛んでいる俺に併走しながら声をかけてきたのは、申請書を渡すことと引き換えにアルダープを追い払わせた小悪魔的隣人こと、ご近所サキュバスさんだった。

手に何も持っていないところを見るにどうやら仕事を終えた後ら

しい。
「おひさぁ、お互い仕事明けぇ？」
「そうそう、今から帰るところだ。最近レベルアップしたおかげで飛行速度が上がってさ、一日のノルマがあっという間だから暇で暇で仕方ねえよ」
「えぇ？もうあの紙があるんだし、人間の世界に行くつもりじゃなかったのぉ？」
「あー、ちょっとな・・・タイミングが合わなくて、色々準備をしようとは思っているんだけど」
「準備ぃ？ステータスに足りないところがあったとかぁ？」
「そそそ、それは置いとこう・・・あれだよ、ちょっと職歴をもっと豊富にしようと思ってな、その機会を探してるところさ」
　これはあまり嘘ではない。めぐみんに腕力で負けたままカンストしてしまったステータスも由々しき問題ではあるが、地獄の新入悪魔である俺の・・・所謂「職歴」が浅すぎるのも問題なのだ。あの世界で申請書を受け取るであろうバニルがそれを気にするかはともかく。
「だから申請書を使うのは少し先になるかもな。大事に保管させてもらってるよ」
「・・・・・・・・・・そっかぁ」
　そこまで話したところでサキュバスさんは口を閉じ、じっとこちらを見つめてきた。
　なにか申し訳なさそうな顔をしているが、こっちも気を遣ってしまうので黙り込まないで欲しい。
　やがてサキュバスさんはそのぷるんとした唇を開いた。
「モドキくぅん・・・私、そのことであなたにゴメンなさいしないといけないのぉ・・・」
「ゴメンなさいって・・・謝るってことか？」
　謝罪？まさか、あの世界に戻るための手続きには申請書だけじゃ不足があるとか、そういう話か？
　サキュバスさんと俺は近くに着地するとちょうどいいサイズの岩に腰掛けた。羽を畳んで向かい合う。俺の背中から生えた羽は折り

畳み傘の骨のようにポキポキ折れながら小さくまとまり、サキュバスさんの腰から生えた羽は俺より小綺麗にまとまった。
「それで、謝りたいことっていうのは？」
「・・・え、えっとねぇ・・・こないだの依頼では苦労させちゃってごめんねぇって・・・」
「ああ、そのことか・・・確かに大変だったよ」
もじもじと膝をこすり合わせたり胸の前で指を突き合っている様子は本来なら可愛らしくていじらしいはずなのに、それをやっているのがサキュバスだというだけでなんだか淫靡な光景というか、これから二人でいやらしいことでも始まりそうな雰囲気に見える。
「まあ、仕方ないって。まさか公爵様が出てくるとは予想外だったし」
「ううん、あの覗き魔がマクスウェル様のペットだってことは知ってたんだぁ」
「・・・・・・・・・・・・は？」
と、そんな風に割と衝撃的な事実が明かされた。えっ、なに？・・・つまり危険を承知で俺にやらせてたってことか!?
「え・・・・・・マジで？」
「マジなのぉ、でも契約は契約だし？」
小首を傾けチロリと舌を出しながら手を合わせると豊満な胸が二の腕に挟まれてふにょんと形を変えた。それにより元々少ない布地で包まれていた乳房が押し上げられて今にもこぼれそうだ。
・・・・・謝る姿すら、もう、なんというか、見応え抜群です・・・。
そんな素敵な光景を見られただけで満足してしまいかけたが、俺は頭を振って邪念を追い出し、改めて怒鳴った！
「こんの悪魔っ子ー！俺がどんだけ苦労したと思ってんだ！消滅しかけたんだぞこっちは！」
「ごめんってばぁ！地獄に人間がいる段階で上級以上の悪魔の誰かの『趣味の品』だなぁって分かってたんだけどぉ、調べたらまさかの公爵様のだったからぁ、私じゃどうしようもなかったのぉ！」
「そんなの俺だってどうしようもないって分かるだろ！どういう無茶ぶりだ！」

「え、えっとねぇ、ちょっとした悪魔ジョークだったんだけどぉ、モドキ君が普通に快諾しちゃったからぁ、悪魔としては持ちかけた契約はそう簡単には解除できないしぃ・・・」
「そりゃこっちも目的があったからな！せめて全部説明してくれたら準備を整えるくらいはしたのに！」
「やぁん！それは言いがかりでしょお！」
「言いがかり？」
「うん、嘘をつかない悪魔にとってぇ、情報をわざと伏せて取引するのは常識でしょお？」
「え・・・あっ、そうなのか・・・」
　俺は言葉に詰まる。あの世界の俺ならこんな言い負かされ方はしないのだが、ここは地獄なので俺の知らない地獄の常識があるのだ。
　実際に、サキュバスさんはこの俺に命懸けの苦労をさせたことには謝っているが、危険な契約を持ちかけたことは毛ほども悪びれていない様子だ。ここじゃあ騙されたほうが悪いのだろう。思い返せばバニルの言動にもそんなところがあった気がする。
「そうだな、次からは周辺情報を整理してから・・・というか気軽に約束事はしないようにするよ」
「あれぇ？・・・もう怒ってないぃ？」
「今回のは勉強料ってことにしておくよ。申請書も手に入ったしレベルも上がったから、結果オーライだしな。じゃあ俺はこれで」
　アクセルでお世話になっていた、そして人間に戻れた暁にはこれからもお世話に成り続ける予定のサキュバスお姉さん達に免じて、これ以上怒ることはやめておこう。
　相手がサキュバスでなかったら絶対に許さなかったところだ。
　そのまま低空飛行で飛んで帰ろうとした俺の手が掴まれた。もちろん掴んだのはサキュバスさん。
「まだ何か用か？」
「え、えっとねぇ・・・あのぉ・・・」
　白くて細い指が俺の手首にしっとりと巻き付き、向けられた瞳はいつの間にか潤んでいて、暑くもないのに頬はほんのり赤く染まり、吐

息も不規則。見ているだけでこっちの体が火照ってくるような気がした。
「ここで会ったのも縁だから、『お詫び』させてもらえないかなぁって・・・」
「へぇっ!?」
それは考えるまでもなく意味深な言葉。サキュバスのお詫びと聞くだけで想像と妄想が一気に膨張して滾る。
ここにきてフラグ立った?あのサキュバスと、あの!サキュバスと!仕事ではなくプライベートでの関係を築くチャンス?
視線を下ろすと、低めの身長に見合わないはち切れそうなバストがふるふると揺れている。
こっちの視線に気付いているのか、続いてサキュバスさんは両手で俺の手を包んで引き寄せた。
「私い、柔らかさには自信あるんだよぉ?」
サキュバスさんは、俺の手を握ったまま、少しずつ胸に引き寄せていく。
怪しげな光沢を持った胸、その谷間は俺をどこまでも吸い込む深淵のようで・・・・・・。
ダクネスの胸元に手を突っ込んだことはあるが、あの時は大して感触を楽しんだ記憶がない。じゃ、じゃあ淫夢サービス以外で胸を堪能するのはこれが人生初なのか俺!?
俺の腕が、指が、手の平が胸の谷間に少しずつ引き寄せられていき

「華麗に脱皮!」
そのセリフと共に、俺の指先が土嚢のような固い感触に突き当たった。そのまま弾力もクソもなくズブズブと沈んでいく。
「フハ!フハハハハ!低身長巨乳のご近所小悪魔かと思った?残念!我輩でした!ちなみにあの小悪魔は貴様のような肉食系男子は論外であるからして、貴様に立つフラグなどこの広大な地獄のどこにも存

在しないというわけだ！」

サキュバスさんの体が砂のお城のようにさらさらと崩れ、代わりに現れたのはどこかで見た仮面とタキシード姿の公爵悪魔、見通す悪魔ことバニルだった。

「うむうむ、期待と劣情を裏切られたガッカリ感！想い人を人間界に残している身でありながら発情していたことを知り合いである我輩に見られたことへの羞恥！実に美味である！フハハ！フハハハハ！フハハハハハハハハハハハハハ！」

ＢＮＬ４８

大悪魔バニル。
地獄に来てからこっち、こいつの名前を思い出すことは度々あった。
地獄の公爵にして元魔王軍幹部の見通す悪魔。しかし幹部でありながら恐らく魔王より強い。魔王を倒した俺達のパーティがこいつを仕留めきれていないという事実がその証明だ。
土砂を固めて出来た再生可能の肉体に、高い魔力と長命により蓄積された戦闘経験、果ては人間に憑依する能力まで使いこなし、場を掻き乱したついでに精神攻撃で悪感情までつまみ食いしてくるという徹底した悪魔ぶり。
対悪魔のエキスパートであるアクアに、人類最強の攻撃手段である爆裂魔法を操るめぐみんの二人がいて辛うじて勝利を収めたと思ったら『残機』を使ってちゃっかり復活する始末。あまつさえ自身が討伐されたことすら狙い通りだったというのだからやってられない。所謂「負け確イベの敵キャラ」である。マクスウェルといい、公爵はこんなんばっかりか。
だったら戦うよりも味方になっちまうかと持ちかけられた儲け話に一も二もなく乗ったのが俺だった訳だが・・・・・。
そういや人間だった頃、ダンジョン最奥の財宝をバニルにくれてやるって約束をしたんだった。
ん？悪魔にとって約束は絶対だが、人間だった頃にした約束は悪魔になったときどうなるんだ？
「そこの最弱勇者の成れの果てよ。例え貴様が人間であろうと悪魔であろうと、約束を踏み倒そうとしている相手が我輩である時点でおしおきは確定であることを忘れてはおらぬか？」
「うおっ!?人の頭を見通すなよ！」
相変わらず絶好調な見通す力にイラついたのは事実だが、なんだか懐かしくなってしまった。アクセルでこいつと何度も積み重ねた商

談と打合せを思い出す。
　それはそれとして確認しておかないといけないこともある。俺は覚悟を決めると、バニルの目を見ながら口を開いた。
「・・・・・あのサキュバスさん、実は最初からお前の変装だったとかじゃない、よな・・・？」
「うむ、今の我輩は無間地獄を埋め尽くしかねない量の書類と業務を抱える多忙の身。手の込んだ嫌がらせなどする暇などない。件の淫魔が女子会で貴様の下心に満ちた視線を嘲罵しておる隙を狙って我が残機がこうして足を運んだだけのことである」
「あ。そういえば俺が消滅してないし、お前本体じゃなかったんだな。魔力の圧も俺が耐えられる程度だし」
　サキュバスさんへの幻想をぶち殺されなかったことで何とか平静を取り戻した。
　人間だった頃の雑談だったかで、バニルは残機を使って３０人くらいに分身できるとか言っていた気がする。つまりこいつもその分身の一人だろう。
　本体が地獄のどっかで働いているとして、かつてキールのダンジョンで俺達が倒したのが一代目、今もアクセルにいるであろう個体が二代目、じゃあこいつは三代目以降のどれかということか。悪魔のデタラメっぷりがよくわかる。
　しかし、もっと重要なことがある。俺はそこに突っ込んだ。
「足を運んだってことは・・・さっきの知り合い発言といい、お前、俺の正体に気づいて・・・いや、見通しているのか!?」
　仮にもこの大悪魔が知らないことなどウィズやアクアの未来を除けばほぼ皆無と言っていいだろうし、だからこれはほとんど確認みたいなものだ。
「ふむ、今の我輩に分かることは微々たるものだが・・・」
　バニルは仮面の向きをわずかに調整するようにしながら俺を見て口を開いた。
「我輩の目の前にいる矮小な悪魔の魂が、数日前に魔王を倒したものの拠点にしていた街にも戻らないまま忽然と姿を消し、魔王軍の襲撃

を退けた後の駆け出し冒険者の街の復興作業の傍ら捜索活動が進められるものの、ギルドにも自宅にも愉快な夢を見られるという噂の喫茶店も含めて影も形もなく、しびれを切らした仲間の一人である短気な魔法使いとおつむの足りないプリースト発案の下、世界最大のダンジョン内の捜索を始める準備として被虐性癖の聖騎士が、同じく復興作業中の王都騎士団に助力を要請してまで探し出そうとしている性欲旺盛な最弱職の男の魂と同一であることくらいしか分からんな」

「待て待て待て待て！一息に喋るな！でもお前がほとんど知り尽くしていることだけは分かったぞ！だからもう一回説明しろ！してください！」

「今の発言は初回サービスである。二回目以降は有料となっておるが持ち合わせはお有りで？現物支給制で働いている小悪魔よ」

「この野郎!!」

バニルはまるでテープの早送りのように一瀉千里に喋りきった。おそらく情報に飢えている俺をイラつかせて悪感情を得るためだろう。

辛うじて聞き取れた内容をまとめると、短気なめぐみんとおつむの足りないアクアが俺を探すためにダンジョンにまで突入しようとしていて、被虐性癖のダクネスがダンジョン捜索のために王都に協力を仰いでいる・・・・・・こんなところか？

これはなんとなく、冒険者仲間としてあいつらのシンプルな思考回路を知る俺の予想だが・・・・・・アクアとめぐみんが後先考えずにダンジョンにテレポートしようとしたところをダクネスやゆんゆん、もしかしたら魔剣の奴とかが押しとどめ、捜索活動なら一旦王都やアクセルから協力者を募った方が成功率も上がるとかなんとか説き伏せている光景が目に浮かんだ。

変態のくせに偶にまっとうな事を言うダクネスと、紅魔族出身でありながら常識的なゆんゆんの面目躍如である。グッジョブだ。

しかし、こうしちゃいられない、俺もさっさとあの世界に戻らないと。

渡りに船とばかりに大悪魔バニルも出向いてくれたことだし公爵

様のお力とやらを借りてさっさと地獄を脱出してしまわないと！

ホースト先輩達やサキュバスさんに挨拶も無しにいなくなるのは気が引けるからちょっと猶予をもらったほうがいいか？

なにはともかく、俺はバニルに向き直ると召喚について頼むことにした。

「ところでさ、折角来てくれたんだから俺をあの世界に召喚してくれないか？」

「うむ、超断る」

超断られた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・えっ、マジで？

俺の中にあった今後の予定が一瞬で真っ白になった。

「ちょちょ、ちょっと待てって、そういうのいいから、あ、悪感情ならさっき食ってただろ？これ以上俺を揺さぶってどうするつもりだ？」

「揺さぶるも何も、馬車や転移魔法屋が有料サービスであるように召喚儀式とてまた同様。我輩、代価もなしに投げつけられた不躾な頼み事を突き返しただけである」

「うぐっ、それもそうだった。・・・・・・あっ、代価といえばあれがあるだろ！世界最大のダンジョンの財宝！ぶっちゃけ俺がダンジョンごと爆裂したから全部が残っているとは言い難いけど、俺が発掘向きのスキルを取得すればなんとかなるだろうからさ！あれを担保にできないか？」

「一応、我輩が最後に見通した段階では財宝はほぼ全て無傷である。貴様がダンジョン内を逃げ回って距離を稼いだことにより幸運にも爆裂魔法の被災を免れたようだ」

「おお！だったらそれでなんとかなるだろ？」

「虫のいい考え方をしているところ残念だが、かの財宝は貴様の人間

だった頃のレベル上げの代価として既に契約済みであるからして、改めて召喚のための代価にはならん。二重契約、というものに抵触するのだ」
「あっ・・・・・・」
　そうだった。魔王城に突撃するべく大量のスキルポイントをゲットする必要があった俺はウィズとバニルの協力を得る代価として２０億エリス分の買い物をしたのだが、最終的にはダンジョン奥に隠されていた財宝のほとんども渡すことになっていたのだ。
　そして俺は抱えきれないほどの財宝を分けて運ぶため、ダンジョン最奥をテレポートの行き先に登録したわけだが・・・バニルにとっては俺が死んだことで財宝が放置されている今は契約が保留扱いなのだろう。
　しかし、ここで言い負かされる俺ではない。地獄の常識には疎いが、今俺とバニルがしているのはあの世界についての交渉であり商談なのだから。
「でもほら、あれだぞ？地獄からじゃダンジョンへのテレポートは出来ないんだから、俺を召喚しないと契約は完了しないぞ？」
　論点を変えてみることにした。召喚するための代価の話から、召喚することによるメリットの話へと。
　しかしバニルは先程から俺の話に全く食いついてこない。片手間に仮面の角度を調整しながら憮然としている。
「何を勘違いしているのかは知らんが、契約が完了しないことで焦るべきは貴様であるぞ、へっぽこ小悪魔」
「え？どういうことだ？俺が焦る？」
「このまま財宝回収の目処が立たないということは・・・・・・・・・・・貴様は下賤な下級悪魔の分際で地獄の公爵と交わした契約を一方的に破ったことになるのだからな。お仕置き確定であるぞ」
「確かにそうだけどさ・・・」
　そこでバニルは俺に向かって一歩踏み出した。背の高い向こうが俺を見下ろす形になる。
「人間は殺さないというのが我輩のポリシーではある。つまり悪魔は

その限りではないのだぞ？」
「いっ!?」
今まで聞いたことのないシリアスさを潜めたバニルの声に震え、俺は思い切り後ずさった。無意識の内に飛行魔法まで使っていたようで、それなりに距離は空いたが地獄の公爵は気にも留めずにこちらをじっと見ている。廃威力のビームや光線を持つあいつにとって距離など何の問題にもならないことに遅れて気づいた。
悪魔なのに冷や汗がダバダバ流れ出す。やべえ、地獄というホームグラウンドに戻ったせいかバニルの雰囲気が絶好調に怖い！
「じょ、冗談だよな？・・・お、俺だってあの世界に帰ろうと色々努力してるんだぞ？本当だぞ？悪魔嘘つかない！」
「悪魔は契約と約束を絶対とする性質上、あからさまな偽りを述べられないというだけである。相手の言質や曲解、誤解と無知を利用して人間をだまくらかすくらいは悪魔の義務教育であるからして、アクセルにおいてかつて悪魔以上に鬼畜と呼ばれたどこかの誰かと似た魂を持つ貴様ならどうとでも切り抜けそうであるなあ・・・」
「しないしない！事実そのどこかの誰かだって商談に関しちゃ真摯だっただろ？」
両手を突き出すように降参の構えを取って必死に言い繕っている俺を見て、バニルはフンと鼻を鳴らしてピリピリとした空気を解いた。
・・・・・・た、助かったか？
「そうであるな、冗談ということにしておこう。我輩の見通したところ貴様も現状を打開しようと足掻いていたのは事実のようだ。もし貴様がすっかり地獄に馴染んで悪魔としての第二の人生を受け入れていた場合は容赦なく我が本体の力を以て貴様を滅するところであったぞ」
「お、おう・・・・・そうだよ、お、俺はアクセルに帰る気満々さ・・・！」
面倒見がよくて表情豊かなホースト先輩や一見刺々しいが仕事には人一倍、ならぬ悪魔一倍誠意を以て取り組んでいるアーネスの姐さ

ん、順調に交流を続けているサキュバスさんや素直なペットっぽく見えてきたグレムリンとの生活のことを頭の片隅に置きつつしっかりと応えた。うん、しっかりと応えられたよな？別に地獄になんて馴染んでないよな俺？

「もう、怒ってないよな、バニル・・・様・・・？」

「端から貴様ごときに怒りなど覚えておらん。ちっぽけな悪魔が我輩の気分を掻き乱せると思っておるのか？魔王の奴が派手に散って以来、ここ数日煩わしいことばかりで機嫌が悪かっただけである」

「そ、そうか・・・・・・やっぱりあれか？魔王が死んだから残党狩りとかされているのか？お前元魔王軍だもんな」

「我輩のような善良な大悪魔には残党狩りなど無縁に決まっておろう。それに我輩は現役魔王軍の時から数百年不覚をとらなかった悪魔であるからして、地上で何があろうと我が本体は今は机にかじりついて終わらぬ執務に取り組むだけのこと」

「終わらぬ執務」の単語が出ると同時、バニルは仮面の額に手をやるようにしてため息をついた。そんなに仕事がしたくないらしい。

とりあえず不機嫌そうな雰囲気は無くなったので改めて召喚してもらえるように頼みたいのだが、次はどう話を持っていったらいいか・・・・・・。

「む？なんだ貴様、無礼極まりなくもまだ我輩をテレポート屋のように利用する気であったか。言っておくが――――」

が、しかし。バニルの話を聞きながら思案する俺の目に、その残機バニルの仮面に刻まれた数字が入ったことで思考が停止した。

あれ？よく見たら、こいつの仮面に書かれている数字「Ⅱ」じゃね？

「――――目の前にいる我輩こそが二代目バニルその者であるぞ？訳あってアクセルから地獄に戻っておるのだ」

・・・・・・・・・あれっ？それって・・・。

「つまり、なんだ。貴様が例の紙切れを提出できる相手は、地上のどこにもおらんというわけだ」

詰んでね？

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「我が部下の悪魔達からいよいよ突き上げを食らってしまってな。我輩が魔王軍に籍を置いてから数百年に亘って滞った仕事を処理せねばならなくなったのだ」

バニルの説明はそんな風に始まった。その部下とやらに俺は覚えがある。ウィズとバニルで世界最大のダンジョンにレベル上げに向かったとき、その最下層において戦力強化のために召喚されていた屈強な姿の悪魔達のことだろう。

喚び出されて早々、バニルに対して愚痴ったり文句をつけたりと異様に人間臭いというか、仕事に疲れたリーマンのような空気感を醸していたのが印象的だった。

「それで『主導権』を地上から地獄に戻したのだ。冒険者で言うところの、遠征帰りと考えればよい。魔王が死んだことで地上もしばらくは騒がしくなる。良い機会に職場の整理をしておこうと思ってな」

「主導権だの仕事だの、悪魔ってなんなんだよ本当に・・・・・・・・でもいいのか？お前がいないとウィズが商才の無さを発揮して魔道具屋を倒産させちまうんじゃないか？」

一応、魔王城に遠征に行く前に最高品質のマナタイトの料金２０億エリスを払ってはいるが、そもそもそのマナタイトにしてもバニルが別口で手に入れた２０億エリスをウィズが一瞬で消し飛ばして仕入れたものだ。

アクセル随一の商才の無さを誇るウィズの前ではどれだけ潤沢な

資金でも風前の灯だろう。
痛いところを突かれたらしいバニルの口元がへの字に歪むと苦々しく口を開いた。
「・・・・・苦しまぎれの策として、濫費店主には予算を与えておいた。ゼーレシルトに見張らせ、予算を1エリスでも越える買い物をした場合はマジで許さんと伝えた上でな」
「マジで許さんのか・・・・・というか、もうウィズを止めるのは諦めたんだな」
「悲劇は止められぬ、奴のセンスは世界の終焉まであのままであろう。我輩にできることはただ被害を最小に留められるよう全力を尽くすだけである」
「地獄の公爵に全力を出させるほどのセンスってなんだよ・・・・・ところでさ、そのゼーレシルトだけど」
「ゼーレシルトに召喚を申請したとしても、通る可能性は非常に低いと言わざるを得んな。奴は貴様の事情など毛ほども知らんのだから」
俺の提案は被せ気味に否定された。さすが見通す悪魔である、イラっとする会話運びだ。
「それに奴は基本的に人間の恥辱と劣等感が好きなだけの善良な悪魔でしかない、人間に危険が及びかねない悪魔召喚などするはず無かろう」
「それもそっかぁ・・・書類の上じゃあ俺はザコ悪魔でしかないもんなあ」
悪魔というのは下級であるほど知能が低く、すぐ人間に襲いかかる。これは冒険者だった頃に知ったことだ。めぐみんとゆんゆん、どっちに聞いたか忘れたが。
下級悪魔は人を騙したり貶めたりする知恵を持たないため「苦痛」や「恐怖」といった、爪や牙を使って襲いかかるだけで簡単に手に入る悪感情を狙うからだそうだ。
俺は落胆と絶望に近い感情をため息に混ぜて吐き出す。バニルが現れたおかげで光明が見えたと思ったのに、あっさり潰えてしまったことで全身から魔力が抜けてしまいそうだ。

「バニル様よお、他の俺にもできる方法であの世界に行けないのか？申請書はワヤになったけどさ悪魔があの世界に出る方法は他にもあるんだろ？」
　なけなしの希望を振り絞って問いかけてみる。ぶっちゃけこれ以上聞いても心が折れる回答が返ってくる気しかしないが、地獄はとにかく時間が余っているとはいえ広大だし、他に頼りにできる心当たりがない。
　それに久しぶりに会えた知り合いとあっさり別れるのも何かスッキリとしない。
「俺には残機がないから、今お前がやっているような分身を地上に送るなんてできないしさ。もう一つの方法としては、なんだったっけ・・・・・瘴気がどうこうっていう・・・」
「地獄のどこかにぽっかりと空いた陥穽が瘴気を通じて地上に繋がっているという話か？確かに以前アマリリス殿のペットの地獄ネロイドが陥穽より地上に迷い出たことがあったな」
　地獄ネロイドというのが何かは知らないが、やはり前例があるらしい。陥穽、つまり落とし穴のような瘴気の吹きだまった場所がどこにあるかなら見通す悪魔なら楽々見つけられるだろう。
「悪い方法ではないが、地上の中で地獄と繋がっている場所とは魔王城の一室、世界最大のダンジョンの奥の奥、人間の国々とも魔王領とも大きく離れた未開の魔の森くらいのものだ。大なり小なり仲間の力をあてにしてきた貴様が一人きりで踏破できるものではない」
「えええええ・・何だよそれ。魔王は倒したのに城は危ないままなのか・・・・・ってそうだ、魔王軍残党とか魔王の娘とかいるのか・・・」
　召喚のための手段が端から消えていく、俺の精神も端っこから追い詰められてきた。
　しかし、相手は地獄の公爵だ。俺の知らない抜け道や裏技があったりしないのか？
　いや、あるに決まっている！こいつはそういう大事なことをいいタイミングまで伏せておいて儲けを上げるタイプだ！

「残念だが」
　そんな俺の読みをバッサリ叩き切るように、
「貴様と我輩では『契約』は成立しない。今の貴様には何もないのだからな」

　バニルが断言した。
　そしてニヤリと笑うとさらにこう続けた。
「だが、『依頼』ならしてやっても良い」

「依頼？大悪魔のお前が下級悪魔の俺に？どういうことだ？」
「どうもこうもない。我輩が現在かかずらっている問題の解決のために貴様を起用してやろうと言っておる。そしてその代わりに貴様は晴れて地上に復帰できるというわけだ」
「やっぱり解決手段あったんじゃねえか！もったいぶりやがって！俺の絶望の悪感情返せ！」
「うむ、随分生意気な口をきくな元小僧。断言するが、これは最後の手段であり同時に外法も外法である。だが受けないというのならそれもまたよし」
　最後の手段だと断言されたことでやっぱり俺は追い詰められていることを自覚してしまう。俺はこの蜘蛛の糸を掴んでいいのか？ぶら下げているのは大悪魔だぞ？

「でもまあ・・・・・受けるよ。お前以上に頼れる奴は地獄にはいないんだから」
「よろしい。ではまずは場所を移そうか」

　バニルが指を鳴らすと俺達を囲むように魔法陣が現れた。
　それは黒い光を放ちながら怪しく輝き、俺たち二人はずるずると足から沈んでいく。しかし地面に埋まっていくような不快感はないので、おそらく転移魔法に似た物だろうと俺はされるがままにしておいた。

「お前ってテレポート?使えたんだな・・・キールのダンジョンで戦った時もこれを使えば討伐なんてされなかったんじゃないか?」
「破滅願望を掲げる我輩が敵前逃亡など選択するものか。むしろ討伐できるものならしてみろと盛大に煽って悪感情をせしめる方が生産的であろう」
「まあ悪魔的に考えれば生産的だな・・・」
俺とバニルはついに頭の上まで地面に沈み込んだ。そのままぐんぐん沈み込んでいく感覚だけが続く、テレポートというよりエレベーターだ。地中は真っ暗だがバニルと俺の姿だけは魔法陣の光に当てられ浮かび上がっている。向かう先は地獄の深淵、バニルの仕事場だ。
「ところで地獄からアクセルって見通せないのか?できればあいつらが今どうなってるとか、そもそも俺が魔王を爆裂した後のことも知りたいんだけど」
「不可能である。本体ならともかく、今の我輩に地獄と地上を繋ぐ程の力は無い。そもそも両者の時間の流れは速さが違うのでな」
「じゃあさ、何か分かることだけでも教えてくれよ。お前は二代目だから少し前までは向こうにいたんだろ?」
俺が頼むと、バニルは案外素直に語り始めた。またぞろ焦らしたり拒否したりするかと思ったんだが、意外である。
「ふむ・・・とある小僧が粉微塵になってダンジョンの欠片と混ざり合ったのと同じ時分、小僧を除いた急造パーティはまだ魔王城におった、近衛兵を全て退けた後でな。直前まではアクセルから魔王城を見通そうにもあの発光女が邪魔しておったのだが、どういうわけか魔王を倒されると同時に天に還ったようであるからして、それ以降のあれこれはしかとこの目に捉えておったよ」
「ふんふん・・・・・って生き残ったのは知ってるんだよ。お前さっきあいつらがダンジョン捜索を始めようとしたとか言ってたじゃねえか。俺が聞きたいのはその先だよ」
「その先となると・・・元々小僧とネタ種族のぼっちの二人でアクセルまで転移、脱出する予定だったものを、小僧がいつまで経っても戻ら

んし、そもそも奴の転移魔法は魔王城を登録しておらんことからして、ぼっち娘が爆裂娘のマナタイトを使って二度転移魔法を行使し、辛くも全員脱出となったわけだ」
「ああ、ゆんゆんがテレポートを連発したのか。しかしめぐみんがそう易々とマナタイトを渡したのか？あれ一個で爆裂魔法一発だぞ？」
「ふむ、いい読みだ。さすがは両思いといったところか？」
「ち、ちげえし！めぐみんは爆裂魔法に関しちゃ思考回路が単純だから読み易いだけだよ！」
「うむうむ。美味なる羞恥の悪感情、ご馳走様である。貴様の読みは大当たりであるな。恋の病をこじらせた爆裂娘が大事な大事なマナタイトを渡すことをそれはもう渋りに渋ったせいで魔王軍の残党と出くわしかけたのは傑作であった」
「笑えねえよあのバカ何やってんだ。・・・・・・ところでその話だとアクアはどうなったんだ？」
「あの不愉快な女か？思い出すも忌々しいが・・・」
　最初のうちは俺のいなくなったあとの顛末をペラペラ話していたバニルがアクアについて聞くと途端に口が重くなり、仮面越しでもわかるほどの渋面を浮かべた。そんなに女神が嫌いなのかこいつは。
「おそらく自身の意思で現界したのだろう、以前より神気を増した状態でアクセルに復活しおった。貴様くらいの小悪魔ならくしゃみだけで浄化できるほどにな・・・」
「ええ・・・今までも十分強くてアホだったのにさらに強いアホになったのかよ・・・アクセルを水没させたりしてないだろうな」
「それどころか今の奴なら世界最大のダンジョンすら隅々まで水没させることすら可能であろう」
「ああ・・・やりそう。『こうすれば詰まったトイレみたいにカズマもダンジョンから流れ出てくるんじゃないかしら！』とか言ってじゃぶじゃぶ流し込みそう・・・」
「少なくとも、薄利店主とゼーレシルトは奴の神気を恐れて避難しておる。おかげで魔王退治記念祭に乗じて出店を構えて儲けに儲ける計画はおじゃんである」

「・・・あのさ、もしかしてお前もアクアから避難するために地獄にきたのか？」
「・・・・・・・・・・・・・」
「・・・なんか、うちのバカがすんません」
俺のいないところで仲間が迷惑をかけまくっている。そう考えただけで頭を抱えたくなった。でも今の俺の頭には角が生えているので抱えにくい。

しかしアクアの奴。天界に帰って、そして俺たちの所に帰ってきたのか・・・・・・。

「・・・・・そこな小悪魔。そういう感情は我輩の好みとするところではないのだが・・・」
「う、うるせえ！」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

なんじゃこりゃ。

「再三言っておるように我が本体は多忙でな、疲れから魔力の方も乱れに乱れておるので貴様では視界に入っただけで消滅する恐れがある。よって踏み込めるのはここまでだ」

なんじゃこりゃ。

「ここは地獄の中層。今は少し事情が違うが公爵直属の悪魔たちの仕事場であり、地獄の中間管理を担う場だ」

なんじゃこりゃ。

「ようこそ我が職場へ」

バニルの仕事場はどうやら地獄の地下にあったらしい。
しかしここも地獄とはいえ俺やグレムリンの職場と違ってかなり快適そうな作りになっている。
まず地面は赤色の大理石のタイルが敷き詰められ、上品な光沢を放っている。
何らかの魔道具があちこちに設置され気温の管理をしているのか、俺の職場と違って極端に暑かったり寒かったりするエリアもないようだ。
ホースト先輩級の魔力を漲らせた上級悪魔が書類に目を通してどこかへ持っていき、また別の上級悪魔が机にかじりついて山のような書類に片っ端からハンコを連打していた。
ダンジョンでバニルが喚び出したときに見かけた連中もあっちこっちにいることにもようやく気付いた。
・・・・・・まあここまではいい。
問題はそうやってあくせく働く上級悪魔を上回る機敏さで仕事をこなしたり適宜指示を出したりしている奴だ。よくみるとあちこちに散らばって身を粉にして働いていながらも態度が尊大なので間違いなくここの上司達なのだろうが・・・。
「ふむ、書類に不備もなし、隣の領地へ郵送する。準備をするのだ」
「今年度の地獄に落ちた魂の罪状ごとの量の推移と分析が済んだぞ、さあ持っていけ」
「痴れ者め！印鑑を捺すのに朱肉が乾ききっておるぞ！血の池地獄から赤インクをもらってくるのだ！」
「さて公爵の会談に向かう、乗り物を用意せよ。・・・・・地獄の馬は止めておけ、あやつは公爵の中で一番慈愛に溢れておるからして、悪魔以外の生きとし生けるもの全ては惨殺されることは決定事項である。故にもっと安価な生物に車を牽かせて経費削減を図るが吉とでた」
机に齧り付いて働くバニル。
機敏に動きまわっているバニル。

上級悪魔にきびきびと指示を出しているバニル。
恐らく別の領地へと出張する準備を進めているバニル
バニルと上級悪魔とバニルとバニルとバニルと上級悪魔とバニルバニルバニル・・・
「なんじゃこりゃあああああああ!!」
バニルがめちゃくちゃいる!30体どころじゃねえ!
残機を使った分身ができることは知っているがここまで増えているとか思うかよ!
俺の声に反応したのか何人かのバニルがこっちを見た。額の数字以外全く同じデザインの仮面が一斉に向けられると非常に怖い!
ちなみに上級悪魔は多忙のあまり俺のような下級悪魔に見向きもしなかったのだが、それは逆にありがたい。
「こ、これが、四六時中ネチネチと羞恥心を煽られ、悪感情を絞られ続けるというバニル地獄か・・・」
「公爵相手に失敬であるぞ木っ端悪魔」
呆然としたままこぼした俺の言葉が耳聡く拾われた。いつの間にかバニル式転移魔法は完了し、大理石のツルツルした感覚を足の裏に感じていた。
「な、なんでこんなことになってんだ?こんな光景もしもウィズが見たら卒倒するぞ?」
見ての通り、恐らく分身で仕事を分担しているんだろうが・・・。
部下の悪魔を含めてフロアをぎゅうぎゅう詰めにする程増やさなくてもいいんじゃないか?見通す悪魔のくせに、先が見通せないくらいの人口密度じゃねえか。
アクセルでウィズの魔道具店をなんとか経営させていた要領の良さや手腕を知っている身としては明らかにオーバーな人海戦術だと言わざるを得ない。
「まあ、そのことについて説明する前に経緯を語っておこう」
「当然のように心の声を読むなよ」
俺をここまで案内してきたバニル二代目が仮面を撫でつつフロアを見渡しながら話し始めたことによると、

「数百年の間、我が領地ではほとんどの仕事を部下に押し付けていたわけだが、当然ながら中には我輩でなければ処理できないものもある」
　そこで新しく近寄ってきた別のバニルが抱えた書類を数えながら説明を補足する。額の仮面には「Ｘ」と書かれていた。
「公的文書のサインしかり、地獄の現場の視察しかり、公爵同士の会談しかり、インタビューしかり、グラビア撮影しかり、だ」
　上級悪魔と打ち合わせ中だったさらに別のバニルがこちらを振り向いて言葉を継ぐ。額の仮面の数字は「ＸＬⅡ」
　・・・というかグラビア撮影ってなんだそれ。
「しかし我輩の体は一つ、これには参った」
　改めて二代目バニルが嘆くように額に手をやる。
「真なる悪魔の肉体を持つ我輩の本体は、雷が天から地へ落ちる速さの８０倍で歩くことが可能であるし、片手で人間の小国を土地ごと持ち上げるだけの膂力もある」
　片手で巨大な魔道具を持ち上げ、その性能を確認していたバニルがこちらを見ずにそう言った。額の数字は「ＸＸＸＩ」
「故に我が本体が本気で地獄中を駆けずり回れば山とある仕事を終わらせるのは簡単である。だがそのスペックを振るって働こうものなら如何に我が部下といえども巻き添えを食いかねず、グレムリンも確実に余波で全滅する」
「本気は出せない。だが、全力で働かなければ仕事が終わる頃には神々との最終戦争が始まってしまうだろう。そこで我輩は考えた」
「そうだ、我輩を増やそう、とな」
「幸い残機なら国の一つでも建てられる程に残っておったことだしな」
　数多のバニルがリレーのように会話を引き継いでいく。なんの意味があるのかわからない。正直今まで見てきた光景の中で一番地獄じみている。
「お、俺の周りに集まるな!!お前ら忙しいだろ！」
「だから少しずつ分担して会話しているのではないか」

「新手の嫌がらせにしか感じねえよ！ステレオでペラペラ話しかけられる方の身にもなれ！」
視覚にも聴覚にもバニルの存在は負担が大きい、強い魔力がそこから溢れているのも関係があるのかもしれない。
もうさっさとバニルからの『依頼』とやらを解決して帰らせてもらおう。
俺のそんな心の声を見通したのか、隣に立っていたバニルがわずかに身を傾け、周囲に聞こえないように話しかけてきた。真剣な話をするつもりだろう。
「実はこやつら分身はただ仕事のためだけに用意されたわけではない」
「・・・・・・・・・だろうな。俺は地獄の管理職の内容は知らないけど、お前の如才なさを考えれば五人もいれば十分だと思うぜ？」
「フハハ、最弱勇者のお墨付きとは痛み入る。そもそも地獄は地上の数百倍時間の流れが速いため焦ったり急いだりする必要はそれほどないのだ。我輩が仕事を溜め込みすぎたことを差し引いてもここまでの分身は必要ないのは事実である」
「ってことは、あれか・・・・・仕事以外の理由のためにこんなに残機分身を作ったわけか」
「そして、それが貴様への依頼に繋がるというわけだ。我輩直々に依頼される幸運を噛みしめよ」
そこでバニルはさらに声を小さくした。俺は耳に魔力を集中させることで聴力を強化する。悪魔の肉体に慣れた頃に覚えたテクニックだ。ちなみに視力も上げられる。
鋭敏になった聴力がバニルの言葉を拾う。
「あれらは我輩本体の影武者も努めておるのだ」
地獄の公爵にして元魔王軍幹部、魔王よりも強いと噂のバニルの影武者？
悪魔であるこいつは冗談は言っても嘘は吐かない。

だとしても、数百年に亘って残機を減らすこともなかったバニルに・・・影武者？
つまりそれって・・・・・・。
「実は我輩、ここ最近何者かに命を狙われておってな」
「やっぱり帰っていいですか？」
「それは不可能である。悪魔が一度承諾した約束は破れないものだ。依頼も同様である」
「ぐっ！」
だからさっき会った時、散々こっちの希望を打ち砕くような言動ばっかりしてきたわけか！俺が依頼を拒否できない状況を作るために。
でも待てよ、バニルの命を脅かせるような奴なんてアクアやめぐみん以外に思いつかねえぞ？
ってことはもしかしたら・・・。
「もしかしてお前の命を狙ってるのってアクアか？俺にあいつらのところに行けって言ってるのか？」
もしそうだとしたらバニルは、なんだかんだ言いながら俺があの世界に帰る手筈を整えてくれたツンデレさんになる訳だが・・・。
「無論、違う。犯人は地獄にいる我輩を今まで何度も狙い撃ちにしておるのだ。アクセルの地でダンジョン捜索の準備を進めている乱痴気女や爆裂娘に性騎士ではこうはいくまい」
「ですよね！くそったれえ！」
だったらどうしろって言うんだよ。仮にもバニルがこうして影武者を山ほど用意するような大掛かりな防衛策を取らざるを得ないようなレベルの、俺の知らない『敵』がいるんだろ？
魔王より強いバニルより強い敵ってなんだよ！
しかもそんな奴を相手に俺に何をさせるつもりなんだ。
「無論、調査や情報収集などといった些事を任せるつもりはない。犯人を見つけ犯行を止めるまでが依頼である」
「無茶ぶりすぎるだろ！お前にここまでさせる敵に俺が勝てるかよ！」

「フハハ、謙遜は止すがいい。魔王を倒した手腕を我輩に見せてもらおうではないか！」
バニルは抗議に耳を貸す気配すら見せず、ビシッと俺に指を差すと高らかに告げた。
「手段は問わん！貴様は我輩の残機を脅かす謎の犯人に一発キツイのをお見舞いするのだ！期待しておるぞ？魔王殺しの勇者の魂を持つ見知らぬ悪魔よ!!」
やっぱりこの悪魔嫌いだ！

見通す悪魔と見通しが立たない悪魔

「指名召喚？」

大悪魔バニル。

魔王を倒した俺ですら倒せるとは思えない、強敵にして不敵な存在。さらに勝ちも負けもトラブルもチャンスも全て儲け話に繋げる敏腕経営者の一面も持つ。ただしウィズの破滅的商才に台無しにされるので後者の顔はあまり知られていない。

ともかく俺が知る中で最も厄介で最も有能で最も強力な人物。

そんなバニルの命を狙う敵がいるというあまりにも信じがたい事実の詳細を詰めるべく、地獄の奥底にある公爵直下のオフィスのさらに奥にある応接間にて俺は説明を受けることにした。

そして残機分身バニル二号から出てきたキーワードがそう、『指名召喚』だ。

「確か・・・特定の悪魔を狙って召喚する方法だったか？」

ホースト先輩との雑談で聞いたことがある。指名召喚はその名の通り召喚したい悪魔を召喚術者が指名できる召喚方式だと。

「然り。下手人は我輩を地上に呼び寄せたいのであろう、その指名召喚を我輩相手に繰り返し行ってきておる。公爵パワーで拒否しているが、しつこい上に、精度に関しても無視できなくてな」

ただし召喚対象とした悪魔に関する深い知識とその階級に応じた魔力量、そしてなによりセンスを必要とするらしい。才能がなければ高い魔力を払っても別のしょぼい悪魔を呼び寄せて終わりだとか。

「公爵悪魔の指名召喚を成功させるには相当な魔力が要るだろうに・・・しかも成功まであと一歩とか何者だよ・・・」

犯人に思い当たる節としてはアクアの送り込んできたチート持ちの連中の誰かだろうか。それなら今件の唐突さも納得がいく。あいつらは最初から強い分、段階を踏まずにいきなり強い連中を相手取ろうとするからな。身の程知らずとも言う。

バニルの噂を耳にして、ちょっとした名誉欲や好奇心から貰い物の才能を好き放題ふるって悪魔の迷惑も考えずにゴリ押し召喚を試みているといったところか？
「しつこいってことは何度も挑戦してるってことか？だったらその召喚術者は結構真剣にお前の力が借りたいのかも知れないだろ。召喚に応えてやったらダメなのか？」
「生憎と今は忙しいのだ。どこの誰とも知らん馬の骨に付き合う義理はない。それにどうやら彼奴は単に我輩を利用したいだけでもなさそうだ」
応接間のソファーにふんぞり返りながら説明してくれていたバニルが、そこで渋面を作るようにして向かいに座る俺に顔を寄せてきた。仮面越しなのに嫌そうなのはよく分かる。プライドの高いこいつにとって命を狙われている近況が気に食わないのだろう。
しかし下手人とやら、バニルを利用したいだけじゃないってどういうことだ？
「彼奴は我輩を討伐するつもりらしい」
なるほど、命を狙っているとはそういうことか。その不届き者の召喚術者が犯人か。そういう程知らずっぷりはやっぱりチート持ちの行動を思わせるが・・・。
まあ、ぽっと出の才能でイキってるような奴なら魔剣のカツラギの二の舞にしてやれるが、それ以外の可能性、本物の実力者とかなら俺の方が危ないな。
「お前を討伐しようとしてる奴ってそれ、もしかしてアクアとかじゃねえよな・・・？」
「貴様は知らんだろうが、ある種の神気は邪悪な魔法陣を無効化することがある。故に強化された奴が召喚術師の傍にいるはずはない」
「そういうもんなのか・・・」
言われてみればアクアはウソを見抜く魔道具を無効化したりしていたな。正確には嘘をつくときに体から出てくる邪気を浄化するとか言ってたっけ？
ポーションを真水にするわダイナマイトを縮小するわ、加えて召喚

魔法までダメにしちゃうのかあの駄女神は。
俺が一人納得しつつも、いまいち犯人像が確定しない中、バニルは体を起こして元の尊大な姿勢でソファーに収まった。
「我輩がそのへんの馬の骨に討伐されることはないが、半端な実力では不発に終わり魔力の空費にしかならん指名召喚をこう何度も命中させてくるとは只者ではない。不器用な聖騎士や爆裂魔法以外の技能を持たぬ魔導師が一生かかっても到達できない領域にいるのは確かだ」
バニルが示しているのが誰かはわかるが、一生とかいうと大袈裟な気が・・・・・・・・・・・あれ？しないな。
召喚術についてはそう詳しくは知らないが、あいつらだと例え死後転生しても無理だろう。
さて、犯行方法についてはこうして教えてもらったから、もう少し詳しく周辺情報を教えてもらおうか。
「まず経緯はこうだ。地獄に復帰したある日、我輩の残機の一体が何者かに召喚されかけた。無論我輩は抵抗し、やり過ごしたがな」
「召喚されかけるってのはどういう状態だ？」
「引力、とでも言うのか・・・地上に向けて引き上げようとする力と意志を感じたのだ。一流の召喚術師なら我輩が反応する隙もなく地上に喚び出してくるであろうが、こやつの術には見通す力が介入する隙があったために察知、対処できたわけだ」
「隙があった？・・・・・・そいつ只者じゃないとか言ってなかったか？」
「未完成の技術を並外れた才能で補っている様相を魔力の流れから感じたのだ。つまるところ下手人の正体は大魔導師のタマゴ、といったところか」
「なるほどタマゴねえ。将来に期待ってことか、チート野郎じゃあねえな。お前はどうやって対抗したんだ？地面にしがみついたり二段ジャンプで脱出したりしたのか？」
常に泰然自若としていた大悪魔が召喚魔法陣からせかせか逃げ出している光景を想像したら笑える。

「笑っておる場合か・・・。我輩の対処はもっとクールであるからして、具体的には残機分身の核たる仮面のみを脱皮、下級悪魔を囮に避難したわけだ」
「下級悪魔を囮に?なんでここでグレムリン達が出てくるんだよ?」
　さっきまで公爵悪魔の話をしていたのにいきなり出てきた下級悪魔の名前に引っかかった俺はバニルの説明に質問を挟んだ。
「無論、我が分身の性能を向上させるために使っているからである。地上にいた頃は砂と土だけを素材にしたお粗末な顕現だったが、地獄においては土と砂の次に手に入りやすい下級悪魔の肉体をも使用することで残機分身一人あたりの業務効率を上げたのだ。ほれ見るがいい」
　そういうとバニルは上半身の一部を崩壊させた。タキシード服が砂と土になってサラサラと流れ落ちると、その隙間から獣のような牙と瞳が・・・・・・。
「うわっ!?マジでグレムリンが埋まってる!?」
　バニルの胸元から覗いているのは確かにあいつらの体の一部だった。まるでグレムリンがバニルの着ぐるみを来ているような光景というより、生き埋めになっているようで、同情するしかできない。
　以前もバニル人形とかを操ったり販売したりしていたが、こいつの人形趣味もここまでいくのか。
「我輩を人形マニアのように捉えるのはやめてもらおうか、これは魔力効率を優先した結果である。」
「お前、人間には甘々なのに悪魔には容赦ねえな・・・あいつらも俺の同僚だったんだが」
「知ったことか。とにかく今日までは何度命を狙われようと組み込んでいた下級悪魔のみを切り離し、下手人の召喚魔法への身代わりにしてやり過ごしていたのだが、人身御供にした小悪魔を見通したところ、全て召喚された先で一も二もなく滅される未来が見えたわけだ・・・。地上と地獄は距離も時間の流れも乖離が大きく、下手人の人相までは見通せなかったがな」
「でも下級悪魔とお前じゃ実力に天界と地獄ほど差があるだろ。身代

わりなんて止めて、召喚された瞬間お前直々に召喚者をボコったらだめなのか？」
　召喚者をしばき倒して召喚儀式を無効化する。そういう風にして契約も結ばず地獄に帰る方法があったと記憶しているが、バニルはそうするつもりはなかったのだろうか。俺と違って実力は十分以上だろうに。
「正式に契約を結ぶ前なら、召喚された悪魔が召喚者を殺害して召喚を無効にするのも有りではあるが、我輩はご存知の通り不殺主義。いざ対面してしまった場合、なし崩し的に契約を結ばされる可能性は零ではないのだ。故に顔を合わせずやり過ごしたほうが吉なのである」
「それもそっかあ。でも仮にも公爵悪魔が顔も知らねえ人間に随分な警戒っぷりだな。アクアが聞いたらクソ煽ってきそうだ・・・」
「ろくすっぽ仕事のできん奴の言葉など響かん。公爵の面子に関わるため訂正しておくと、いくら余分な分身があるとは言え一体でも職場を離れたら困るからこその防護策であり、修羅場さえ越えてしまえばこちらのものである」
「さっきはそれほど分身の数はいらないって言ってなかったか？」
　まとめよう。どうやらバニルを狙って召喚しようとしている奴がいて、そんでもって忙しくて手の離せないバニルが身代わりに送り込んだ下級悪魔は高確率で討伐されていて・・・・・・？
「それってただ単に召喚ガチャに失敗したから処分しただけじゃないか・・・？」
　なんか、それがしっくり来た。案外バニルが大人しく召喚されれば話は穏便に片付くんじゃないだろうか。
「ぬ？・・・ガチャ？聞きなれない単語だが・・・・・・何故であろう、途方もない巨額の動きそうな儲け話の匂いがするのである」
「いや、ガチャ商法に手を出すのは止めとけ、こんな中世でやると冗談でなく社会が傾く。名も無き悪魔が断言するぜ」
　アクセルにいた頃、バニルには散々儲け話の元になる知的財産を横

流ししていた。
本来著作権違反なり特許権侵害なりで洒落にならない罰を受ける行為であり、そこを異世界マインドでぶっちぎっていた俺でも流石にやってはいけないことくらい分かる。
バニルはそれ以上追求してくることもなく、そして言うべきことも全て言い切ったとばかりに腕を組んでじっとこちらを見つめてくる。いつの間にかその片目は非生物的に赤く光っていた。
アクアのいない地獄じゃあこいつの能力は無敵だ。俺みたいな小悪魔のことなら先の先まで見通せていることだろう。
「さて、悪名高き勇者にして無名の悪魔よ。何か悪辣な策は思い浮かんだか？」
つまり俺に尋ねるまでもなく俺の返答は見通しているわけで。
「わざわざ聞くなよ。こいつを倒す方法なんて一つしか無いだろ？」
▪
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
悪魔も食事はできる。
ただし悪感情や瘴気の摂取と違ってほとんど栄養にならない。
人間で言うところのタバコや酒と同レベルにまで必要価値が落ちる。
だがしかし。
「かんぱぁい！」
「おーう、乾杯」
「か、かんぱい・・・？」
宴会だった。
俺の前で、というか俺を囲んで行われているのはまごう事なき宴会だった。
血のような色をしたワインと頭蓋骨のようなデザインのワイングラス。
あとは何らかの肉。匂いと見た目からしてモンスターの肉だとは思う。いくら地獄だからといって人肉とかに出てこられたらどうし

ようかと思った。
「モドキくぅん！」
いつの間にか隣に座っていたご近所サキュバスさんが俺にしなだれかかってくる。小さな衣装に申し訳程度に覆われた胸が遅れて俺の腕にくっついた。
ご、ごちそうさまです・・・。
それにしても「グレムリンもどき」から「モドキ君」ってどういうニックネームの変遷なんだよ。名前要素皆無じゃないか。
「聞いたよぉ。なんだかよく分からないけどぉ、出世するんだってぇ？」
にこやかに笑いながら細い指先で鎖骨をグリグリ押してくる。なんだかよく分からないがそういうことらしい。
ことの発端はバニルの仕事場に足を運んだ次の日の仕事終わりだった。
バニルとの『作戦会議』を終えて帰宅し就寝。その後は下級悪魔として通常営業を再開したのだが、いつもどおり犯罪者と変態の魂を相応しき地獄に叩き込み終えたところでホースト先輩から呼び出しをくらい、気づけば宴会だった。
悪魔特有の情報網があるのか、俺がバニル領地に出向くことという報せが俺の出世祝いに結びついたわけだ。
「って、出世とは限らないだろ、ただの部署替えだって」
「んもぉう、誤魔化しちゃってぇ。公爵様となんだかお話してたんだってぇ？そんな私たちじゃあ考えられないシチュエーション、栄転じゃなきゃなんなのぉ？」
「あー、そっか。確かに色々話はしたけど。やっぱり公爵様ってのは偉い人なのか」
「わぁお、大胆発言～。恐れ知らずぅ！公爵様なんて地獄の底の底のそのまた地下奥深くのお方なんだよぉ？地獄を通じて生と死を含めた全ての概念と世界の行く末を支配するお方なんだよぉ？偉いどころか視界に入れることすら誉れ高いんだからぁ」
「なんだか聞けば聞くほどとんでもない規模の存在だな・・・公爵様っ

てのはそんなにデカいスケールのお方だったんだな」
「特にバニル様なんてグラビア写真集があっという間に売り切れてプレミアがつくほどなんだからぁ！」
「その褒め方は逆にスケールダウンじゃねえか？」
　まあとにかくそういうことだ。
「さぁさ、一杯どうぞぉ。サービスサービスぅ」
「ああ、おっとっと・・・・・・淫魔にこういうことをしてもらうのは初めてだな」
　俺のグラスにサキュバスさんがお酌をしてくれる。人間の冒険者に取り入るための手管の一つかもしれないが、その注ぎ方はかなり堂に入っていた。
　ただし酒瓶のデザインがやはり地獄的に禍々しいので、意識すると食欲がなくなりそうだ。
　そういえば、バニルが以前言っていたことだが、このサキュバスさんの異性の好みって俺とは離れているんじゃなかったっけ？じゃあこれって社交辞令？俺の出世らしき噂に対する媚か何か？
「あ、あのさ・・・あ、あんたの男の好みって―」
「ホースト様ぁ～！お酌しまぁす！」
　逃げやがった!!
　酒瓶を振りながら、ついでに丸っこくてツヤツヤした尻も振りながらサキュバスさんは俺よりゴツい先輩の方に駆けていってしまった。
　俺の周りに残ったのは皿に盛られた何かの肉料理に下品にかぶりつくグレムリンだけだ。他のサキュバスもアーネス姐さんも不参加なのだから仕方ない。
　しかし、あれだな。悪魔も人間同様に祭り好きなのだろうか。
　そんな風に思っていたら座っていたソファーを大きく傾けて隣にホースト先輩が座った。ワイングラスが俺のやつより数倍大きいし禍々しいデザインなのでむしろ俺より主賓らしい。そのまま豪快に中身をあおったあと相変わらず厳つい牙の生えた顔で俺の方を見た。
「おう、グレムリンもどき。公爵領に出向だって？」
「そうなんだよ。何故か出世だと思われてるみたいだけど、結局はよ

り一層コキ使われるだけらしい」
「ははは、公爵様だからな。地獄の業務に誰よりも厳しいし、自分の残機の数が多いからか他者の命の扱いがすこぶる悪いんだぜ」
「それはかなり分かる気がする。共同経営者に殺人ビームを撃ってるのを見たことがあるしな」
「マジかよ、そんなもん食らったら人も悪魔も粉微塵だろ、冗談きついぜ。まあとにかくなんだ、お前のどうにも人間臭いところが気に入られたのかもしれねえが、命まではもってかれんなよ？」
　それは紛れもなく、俺の将来を案じての言葉で・・・・・・そして悪魔はウソをつかない。
　俺は体が軽くなるような感じがした。悪魔になって地獄に落とされて以来、初めての感覚だ。
「おう、気をつけるよ、俺には残機が全くないしな。先輩から教わった仕事術を活かしてみせるさ。できれば働きたくないけど」
「ああ、俺様からしたら敬意を込めて仕えるなら悪魔より邪神様がお勧めだぜ。悪魔の誘いにはどうやっても下心がこびりつく、命なんざ容易く消し飛ぶような下心がな」
「肝に刻んでおく。大悪魔のろくでもなさは身に染みているしな」
「よし、功労を期待して乾杯」
「かんぱーい！」
　ホースト先輩は杯を打ち鳴らし、あの世界にいた頃の苦労譚や邪神様がいかに人格者かという雑談を食っちゃべってくれたあと、俺の周囲にいたグレムリンを鬱陶しがるように威圧した。お前ら、上級悪魔がわざわざ腰を下ろしてくれたんだからどっかいってろよ。
　そして、長いようで短い時間が過ぎて先輩も淫魔もいなくなり、気づけば列席しているのは俺とグレムリンだけとなった。料金は先払いで先輩が払ってくれていたのに本人も紅一点のサキュバスも消えてるとかどういうことだよ。
　やっぱり悪魔だから実は飲食が苦手だったのか？夜中までドンチャン騒ぎしていたアクセルの連中との違いか、あるいは人間と悪魔の食事に対する温度差を味わった気分だ。

「その割にはお前ら、ガツガツ飯食うのな」
グレムリン達は応えない。くちゃくちゃと飯を食っている。
まあ、ちょうどいいかも知れない。ホースト先輩は結構俺のこと気にかけてくれていたから、心配かけないためにも相談できないこともあった。このケダモノ達になら愚痴っても情報漏洩の心配はないだろ。
「バニルの領地に行くのは勿論バニルを狙ってる奴を捕まえるためでな。ついでに俺の望みも果たす、取って置きの作戦なんだぜ」
グレムリン達は答えない。酒瓶の中身を奪い合って、こぼれたワインを舐めている。
「犯人は召喚魔法でバニルを狙っているらしいけど、精度が低いみたいでな。ミスって分身の方を召喚してはガチャのバニラカードみたいに処分してるらしい」
グレムリン達は料理を食い尽くした後の皿を意地汚く舐めているが一向に皿は綺麗にならない。
「で、作戦ってのはこうだ。俺がバニルの分身になる」

グレムリン達がついに互いの口の中に残った料理まで奪い始めた。傍目にはディープな口づけをしているようにしか見えない。
「俺はバニル仮面も被り慣れているしな。それに加えてバニルの魔力を込めたタキシードを着込めば充分騙せるらしい。心配なのは俺の幸運が邪魔をしないかってとこだけど」
バニルの分身、つまりバニルの魔力の塊の中に入っていたグレムリンはバニルの囮として召喚されていた。今度はそのグレムリンの代わりに俺がなる。文字通りの伏兵だ。
歴史の影で人間と悪魔をつないでいたらしい召喚儀式。その失敗を逆利用するという、悪魔からすればマナー違反というか外法スレスレの作戦らしい。
バニル曰く、レストランで意図的に注文された内容と違う料理を出すのと同じだとか、悪魔としての信用を落としかねないとか。だった

ら最初から召喚されてやれとも思うが俺にとっては渡りに舟なのでそれは言わないことにしておく。
勿論、他のバニル分身が選ばれることもあるだろうけど、いつかは俺の順番が回ってくる。そして、殺しはせずとも犯人を返り討ちにしてバニルへの迷惑行為を辞めさせる。ロシアンルーレットの弾丸になった気分だ。
「そういうわけで俺はバニルのところで働かなきゃいけない。いつか召喚される日までな」
グレムリン達が壊れた吹奏楽器のような音を立ててゲップをした。ヘドロみたいな匂いがする。
お分かりのように全く俺の話は聞いてないが、聞かれないからこそいい。一方的に愚痴るだけでもストレスは緩和される。
ここからは本音なので特に聞かれたくないのだ。

「・・・・・・やだなあ」

「その犯人、俺たち下級悪魔を何匹も瞬殺してるんだってさ」
「俺が向こうの世界に帰るには他に手段がないとはいえさ、なんで死んでからもまた決死の覚悟がいるんだよ」
既に地獄にいるのにまた死ぬかもしれない。人間として何度も何度も死んで、蘇生して、魔王と一緒にまた死んで。
悪魔になったら今、死んじまったら誰が俺を蘇生してくれるんだ？
次死んだら完全に終わり？おしまい？

グレムリン達は静かにどこかへ消えた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

こうして簡単な荷物だけを手に、地獄の奥底の一歩前、バニルの分身と部下の犇めくオフィスへと職場を移した。
といっても荷物は冒険者カードと、手袋。それと、サキュバスさん

からのプレゼントということで召喚申請書も一応懐にしまっておいた。

「我らが地獄には、浄化のために百年単位の懲罰を必要とする魂がそこらに転がっておる。故に、たかだか５０年生きるだけ長寿と呼ばれるあの世界の人間共と同じ速さの時間を過ごさせていればあっという間に地獄は魂に埋もれてしまうのだ」

「故に地獄の時間は地上の数倍の速度で流れておる。その証拠に貴様も見ているはずだ。やせ衰え、老いさらばえた悪運領主の姿をな」

今までのような気楽な現場仕事とは違う。助手のような扱いだったとは言え、一つ一つの仕事が重い意味を持ちどれも疎かにできない。普通の社会人ならやりがいや充実感でも覚えるのだろうが、俺にはプレッシャーの方が大きかった。

「冒険者カードも結局は一つの魔道具でしかない。人間と魔物、技能と魔法、戦士と貴族が明確な線引きもなく混沌としていた時代を切り開くために生み出されたものだ」

「破壊力や敏捷性、知性や寿命で魔物に大きく劣っていた人間が自分の魂に刻まれていた数々の『魂の記憶』、つまり経験値を整理整頓し分配することで力を得て対抗しようとしたわけだな。魂の操作、それが冒険者カードの機能だ。・・・かてて加えて、人類の助けとするべく開発した魔法や技能を未来へ受け継がせる意味もあったのかもしれん。そのあたりは子孫を残さない悪魔にはわからない話だが」

バニルが用意したタキシード服に逆に着られるようにして、慣れない分野の仕事をなんとかこなしていく。

俺の幸運が悪い意味で仕事をしているのか、俺はなかなか召喚されなかった。

よそ見している内にさっきまで隣にいた分身体が仮面だけを残して忽然と消えていたことも一度や二度ではない。

なるほど、これはバニルが対策を練ろうと俺に頼るわけだ。いつど

のタイミングで狙ってくるか分からない必殺の召喚術と術者の恐怖、これは屋敷の中に暗殺者が忍び込んでいるのを放置したまま生活するようなものだ。
それと近場のバニルが消えたせいで残された仕事が俺にのしかかってくるのも恐怖だ。

「我輩たち悪魔は魔法生命であるからして、自己改造は容易であるし、モンスターどもは例え知力が足りずとも獣の本能や直感でどうとでもなるのでデュラハンやリッチーといった元人間以外は冒険者カードなどいらんのだ。魔王軍の中には任務に合わせた体作りのためにわざわざカードを作る魔物もおったがな」
案外バニルがこうやって仕事の合間に雑談を振ってくれなければプレッシャーと恐怖でダメになっていたかもしれない。分身のくせに随分と気の利く奴というかなんというか。
地上に帰れるという希望と、地上で死ぬかも知れないという恐怖の二つに板挟みになりながら目まぐるしく働き、目の前で次々と消えていく上司達を見続けること数日――――

「名も無き働き悪魔よ。見通す悪魔が断言しよう、貴様は数時間後には地上に立っている」

その日がやってきた。

テンセイリーガル　～名無し勇者と小悪魔遣い～

地上に出るにあたって、俺はいくつもの問題を抱えていた。
まず、悪魔の俺には地上での味方がいない。
そして悪魔の俺は多彩な攻撃手段を持っていない。
なにより最悪なのは生活基盤が全く整っていないことだ。
贅沢で自堕落な屋敷暮らしに体の芯から馴染みきっていて、悪魔になっても地獄に自宅まで構えていた俺としては雨風をしのげない生活なんて想像するだけで怖気が走る。
悪魔となった今では馬小屋に泊まったりギルドで飲み食いしたりする資格もないのだから、バニル印のタキシードを差し引いても衣食住の食と住の二つが死んでいる。由々しき事態だ。
差し当たって、まずは食事問題から何とかしてみようと思ったわけだが、まさかその辺の人間をとっ捕まえて悪感情を絞り出すのがマズイことくらいは分かる。しかも下級悪魔の実力と要領では絶望や羞恥のような複雑な悪感情を得るのは難しく、苦痛と恐怖のような直接的なものしか選択肢がないのだから、そうなると捕まえた人間をボコボコにするほかなくなるから尚更だ。
・・・・・・・・・・ということで。
「アクマサン、ドウシタノ？」
俺の目の前には少女が一人、岩に腰掛けるようにして俺を見つめている。まん丸の瞳を無垢に瞬かせて小首を傾げる仕草は、俺でなければ心を奪われていたことだろう。
「モシカシテ・・・アナタモヒトリボッチナノ・・・・・・？ウフフ、ワタシタチオソロイダネ・・・」
周囲に人気のない森の中、俺の前にいる少女は悪魔の俺すらも受け入れるかのような無警戒で純朴な雰囲気を惜しげもなく醸し出している。
しかし俺はその正体と性根をとっくの昔に知ってしまっているので、感じ入るところなどない。
こいつの正体は植物系の人型モンスター、人懐っこい仕草で油断

させた旅人の神経を麻痺させ安楽死させる、その名もそのままズバリ安楽少女である。
つまり容赦なくやっちゃっていい相手というわけで・・・。
「『ティンダー』」
下級悪魔特有のくすんだ灰色の指先に種火が灯る。俺はそれを、積んであった小枝の山に放った。枯れ枝ばかりを選んで積んでいたので大した時間をかけずに焚き火が出来上がった。
「アッ、タキビ・・・?アタタカイ・・・アリガトウ、アクマサン・・・」
火に一瞬怯えていた安楽少女も目的がただの着火だと知ると、身構えを解いてホッとしたような表情を浮かべた。
その後、何を思ったのか安楽少女はボロボロの服、に見える植物を編み込んだ布っぽい何かの裾から丸っこいものを取り出した。見慣れない色形だが、おそらく果実の一種だろう。
「コレ、ワタシカラノオカエシ・・・ワタシノマリョクガコメラレテルカラ、アクマサンデモタベラレ・・・」
「はい、アウトー!!『ウィンドブレス』!」
手の平から出た風が焚き火の熱をまとって安楽少女に吹き込んだ。温度調整無視のドライヤー攻撃、植物タイプのモンスターには覿面の嫌がらせを決行する。
「ヤ、ヤメテ、アツイヨ、アツイ・・・アッツゥイ!アツイ!あっつ、お前えええええ!なにしやがるバイキン野郎!!」
おっと、化けの皮がはがれたな。さっきまで如何にもカタコト純朴少女のような面をしていたモンスターが熱風に当てられた途端にドスが効いた流暢な罵倒を放ってきた。
なんでアクア達はこいつに簡単に心を許したりしていたんだ?
熱による乾燥から逃れようと安楽少女はバタバタと手足を振るが、岩にくっついたままの体はその場から離れることができない。
「なんだよ!!やめろっておい!乾く乾く乾く!てめえ悪魔だろ!!とっとと悪感情でも啜ってこいや寄生虫!!」
「こうやってたらお前から悪感情が漏れ出てくるからさ、これでいいかなって・・・」

「いいわけねえだろ!?」
「お前らそれなりに知力があって腹黒なのは知っていたからさ。多少は悪感情も生み出せると踏んだんだが、大当たりだったなー」
「何が大当たりだボケ!!熱っつ!熱っつい!!人間を襲えよザコ虫!!」
「やだよ、人間に手え出したら今の俺じゃ討伐されちまうし・・ほら、弱肉強食っていうだろ?」
「このやろおおお!ザコのくせに身の程わきまえてんじゃねえええ!」
「それはお前もだろ、弱々しいアピールしといて毒の入った木の実なんてよこしやがって」
安楽少女の叫ぶこと叫ぶこと。数秒前までの儚げな雰囲気など欠片も残っていない。手に持っていた果実やその辺の土を焚き火に向かって投げつけているが、何の効果もない。
まあ、もし火の勢いが怪しくなってもその度に俺がティンダーで着火するけどな。
やがて直接的な方法ではこの窮地をどうしようもないと悟ったそいつは手を止めるとキッとこちらを睨みつけた。ニヤリとつり上がった口元を見るに何か次の策を思いついたようだ。やはりアクアより賢いのかな、こいつ。
「いいのか!?私がこうやって共倒れ覚悟で叫び続けていたら他のモンスターがじゃんじゃん寄ってくるんだぞ!?てめえみてえなザコ悪魔に一撃熊やグリフォンをどうにかできるのかよ!?」
「おっと・・・」
モンスターの仲間入りをした俺にとって人間相手に波風を立てることは自殺行為だが、だからといってモンスターの仲間になったわけではないので強力で凶暴な他モンスターは依然として避けるべき強敵なのだ。
・・・・・それにしても野菜から魔王軍に至るまであらゆる生命が異常に手強いこの世界において、頭の回る奴はなおさら厄介だ。追い詰められても機転一つで切り抜けようとしてきやがる。
だが、俺はその程度の脅迫には動じない、安心材料を既に用意して

あるからな。
「残念だったな・・・森の奥ならともかく『ここ』まではモンスターは近よってこないんだよ」
「はあ？」
「ここは『紅魔の里』近辺だからな。お前だって紅魔族の強さは知ってるんじゃあねえか？」
「チッ！」
こいつ舌打ちしやがった。
とはいえ安楽少女ならそれを把握した上でハッタリを掛けようとした可能性もあるが。
とはいえギャンギャン騒がれると別の厄介な奴に見つかる可能性が倍増するので大人しくしてもらったほうがいいのは事実だ。
安楽少女をなだめるべく一旦、落ち着いた声で話しかけた。
「分かったって。俺はもうお前らを傷つけないよ」
「だったらその焚き火を消せよ！それが現在進行形でダメージになってんだよ！」
「それは無理だ。これは傷つけるためでなく調理に使うためのものだからな」
「はァっ？」
悪魔は嘘をつかない。この焚き火はちょっとした意地悪に使いもしたが実はそのためだけのものではない。
ここで、俺が背をあずけていた大木の裏から一人の人間が出てきた。
焚き火の上にセッティングするための鍋を持ってきてくれていたのだ。
人間のカテゴリの中では少女に分類される。小柄な体に大きなマント、焚き火の赤さに負けないほど鮮やかな紅い瞳。彼女は細い腕に抱えた小枝の束を雑っぽく火の中に放り込んだ。すかさず俺が風魔法で酸素を送り込んだことで火の勢いが増していく。
「こちらにおわす〝こめっこ嬢〟は空腹であらせられるからな」
「うん！あんらく少女はスープにして食べる！」

水をなみなみに湛えた小さな手鍋を手に、
〝バニルを召喚しようとしていた下手人〟は大きく宣言した。

「えっ？は？女の子？」
「うん、このお嬢さんは常に空腹でな。なんでも食っちまうんだ」
「・・・・・・・・・嘘だろ？流石に私まで食わないだろ？」
「悪魔嘘つかない」
「やめさせろおおお！ガキに人型モンスターなんか食わせたらあれだぞ！将来食人鬼になるぞ！」
「だってさ。ようし、こめっこ嬢。こいつはバラバラにして野菜炒めにして食べようか」
「さんせい！」
「いやあああああああ!!鬼畜!!悪魔!!紅魔族うううう!!!」
「それぜんぶ、私のこと？」
「鬼と悪魔は俺のことだよ。こめっこ嬢は自分でご飯の準備ができるんだからいい子さ」
「そっかー、私、いいこ？」
「悪魔嘘つかない」
「そっか！私！いいこ！」
安楽少女の騒ぎ方がいよいよ止められなくなってきたので、ここらでメインディッシュに移るとしよう。俺は風魔法を中止し、安楽少女を軽く炙り続けていた熱風を止めた。
安楽少女は肩で息をしながらもこちらを強く睨んだまま歯を食いしばっている。
目の前であぐらをかいている悪魔と、その膝の上にちょこんと座っている食欲の化身から逃げ出したいのだろうが、安楽少女はやはり岩の上から動けない。
「くそぉ・・・レベルさえ上がれば自分の足で走って逃げられるってのにいいい・・・・・・・！」
「えっ、安楽少女ってレベルアップしたら自立できんの？」

「ううん、普通はあるかない！変異種ならあるく！」
「なんだ、焦らせやがって。でも、もしも歩き出したら踊り食いだな」
「おどりぐい!?わたしもおどりぐいしたい！」
「ひいいいいいいいい!?」
もはや怒りより怯えが上回り、震えた声で叫び始めた安楽少女が岩から飛び退こうとジタバタ暴れると、腰の辺りと岩を繋ぐ根っこのようなものがギシギシと唸ったが、切れる気配はない。どうやら変異種ではないらしい。それでも必死の形相で逃走を試みている。
安楽少女系のモンスターには一切の同情を持たない俺はそんなものを見ても助けようとは思わない。
ちなみにこめっこはというと、
「活きがいい！おいしそう！」
「いやあああああああ!!」
絶好調だった。
ちなみにこれはこめっこが冷酷なわけではなく、憐憫や同情より食欲の方が優先度が高いだけだ。
腹黒で性根の腐った安楽少女とは真逆に、こめっこは発言がちょっと過激だけど根はとってもいい子なのだ。

とはいえ、調理のためだからと屁理屈をこねたが、「俺は傷つけない」と口にしてしまった以上はもう攻撃はできないんだよなー。
「・・・・・しょうがねえなー。おいお前、チャンスをやるからちょっと待ってろ」
「は・・・？」
「こめっこ嬢、ちょっとこっちおいでー、ご飯の準備するよー」
「わあい！」
恐怖の上に困惑を顔中に滲ませた安楽少女の前に焚き火を放置したまま俺とこめっこは森の中に消えていった。
安楽少女を傷つけず、なおかつ俺とこめっこの食事をつつがなく済ませる冴えた方法など悪魔にならずとも俺には簡単に思いつくのだ。
「ちょ、お前焚き火消していけよぉ！」

そして数分後。すっかり勢いの弱まった焚き火に小枝を追加しながら『それ』を安楽少女の隣に置いた。

「エ・・・ココドコ?アクマサン・・・?」

「えっ?・・・もうひとりの私?・・・おいそこの悪魔、なんのつもりだよ?」

それはさっきまで喚いていたのとはそして別個体の安楽少女。

こいつは紅魔の里周辺の森にはそれなりにいるモンスターなので見つけるのにそう苦労はしなかった。少しばかり離れた場所にいた別の一匹を岩ごと担いで連れてきたわけだが予想外に重かったので担ぎ上げたのは最初だけでその後はほとんど引きずってきた。

その二体目の安楽少女も持ってこられた当初はあどけなさを装って周囲を見渡していたが・・・・・・・・・・。

「アレ・・・アナタ、ワタシニソックリ・・・・・・・・・おい、なんだこの状況」

即座になにやらおかしな事態に置かれていることに気づいたらしい、声色が素に戻っていた。こいつらの化けの皮なんて俺にかかれば簡単に引き剥がせるのだ。

鍋を抱えた紅魔族の幼女、焚き火の様子を見る下級悪魔、憔悴しきった同じ種の魔物。

「えっ?・・・お前・・・なんでこんなとこで?」

「いいから気をつけろ・・・この悪魔と紅魔族、ロクなことしねえぞ」

「紅魔族・・・あの連中、そういえばここ最近妙に騒がしいけど、それ絡みか?」

「わからない、噂によると魔王がどうにかなったらしいけど・・・」

隣り合うように並べられ、顔をしかめてヒソヒソ話をしている安楽少女たちは見目だけ切り取れば子供同士のいじましさと草木の儚さが同居する一枚絵にならなくもないが、今から行われるのは『食事』である。

「今から生き残るためのチャンスをやるよ」

最初にいた安楽少女は思い切り怪訝そうな顔をこちらに向け、二匹

目の少女は自分たちの生殺与奪がかなり危うい状態であることを理解し始めたらしく顔が引き攣り始めていた。
太い枝で作った梁にこめっこから受け取った鍋を引っ掛け、鍋を火にかける。
「俺は手出しをしないと言っちゃったからな。だったらこうするしかないだろ？」
怯えと怒り、不安と敵意、その他諸々の小粒で薄味な悪感情をせめて無駄なく堪能するべく安楽少女ズに正面から向き合うと、さらなる悪感情を求めて宣言した。
「生き残りたければ隣のそいつに殴り勝て。先に倒れた方が野菜炒めな」
俺の言葉を理解した安楽少女達の顔が青く染まった。そしてたっぷりと悪感情が溢れ出す。
地上復帰一日目の俺の食事はこうして始まった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

こめっこ。
めぐみんの妹にして紅魔族の将来有望株の一人、めぐみんを破壊の化身とするならさしずめこの子は暴食の化身。許容量を越えた食料を喰らい込む癖があり、愛玩動物ですら食料としてカウントする。
餌付けしてくれる相手に容易く開く欲求に素直で無防備な幼女であり、また、周囲の人間に際限なく食べ物を貢がせる魅力を併せ持つ魔性の幼女でもある。
かつて魔王軍幹部が攻め込んできた時もグースカ熟睡していたり、なのに幹部へのトドメだけはちゃっかり決めたりと、色んな意味で将来は大物になる予感はしていたが、まさか幼い身であのバニルを苛つかせるという偉業を成していたとは思わなかった。
この子へのファーストコンタクトはこんな感じ。
『こ、こめっこ？』
『おお！名前が見とおされた、本物のこうしゃく？』

思わず名前を呼んでしまったせいで何か勘違いされた気がする。人生初の召喚体験の余韻や、体感で数ヶ月ぶりに知り合いと会えた喜びや、しかもパーティメンバーの関係者であったという奇縁への感慨がごっちゃになったせいで冷静な判断ができなかったのだろう。

しかしこれでいいのだ。悪魔は嘘が吐けない代わりに相手の誤解を利用して人間を操るという、だったらわざわざ積極的に誤解を訂正し、身元を詳らかにすることもあるまい。

俺がバニルそっくりのタキシードを来ているのもその誤解を助長したのだろう。ちなみに仮面の方は召喚される瞬間に勝手にパージされたらしく、今の俺の顔面は牙と角の見えた悪魔面のままだ。

おかげでめぐみんやダクネスが俺を見ても仮面の義賊から■■■■と結びつけることもできないわけだ、ちくしょうめ。

『こうしゃくさんですか？』

『ふふ、好きに判断したまえ。ネタ種族の幼女よ』

こめっこのキラキラした瞳に対して公爵っぽく返事してみたが無意味にキザったらしくなっただけだった。仮面を被っていないとカッコつけるのもうまくいかねえなあ。

『でもこうしゃくさんの魔力、しょぼい。本当にこうしゃくさん？』

『うっ!?・・・・・それはねこめっこ嬢、悪魔というのは地上に出る際はほかの物質で依代を作るから本来の力を出せないものなのだよ、強ければ強い悪魔ほど特にね』

まあ俺は残機なしのバリバリ本体なのでこれが全力であり背水の陣なのだが、悪魔全般の話をしただけで俺に関して何か偽りを言ったわけではないのでセーフだ。

これで、こめっこは召喚魔法の連続行使を一旦は止めてくれるだろう。

しかし、今のままじゃすぐに行き詰まることも分かっている。問題はまだなくならない。

そして時は現在に戻る。

「いけにえの、梨です」
「い、いまはいいかな・・・あとで貰うよ」
昼を少し過ぎた頃、紅魔の里からそうは離れていないが、簡単には見つけられないように木々の入り組んだ森の中に俺たちはいる。
隣に座ったこめっこが果物を差し出してきたのでありがたく受け取り拒否しておいた。
悪魔は一旦契約を交わすと非常に面倒くさいことになると聞いていた俺は迂闊なことはしない。なおかつこめっこの注意を悪魔召喚以外のものに逸らす必要もある。
安楽少女たちを集めてドつきあいという名のデス・ゲームを開催しているのもそういうわけだ、マグロの解体ショーみたいでこめっこも大満足すること間違いなしだな。
こめっこは俺、ひいてはバニルに頼みたい事があるようだが、公爵レベルと契約を交わさなければ成し遂げられないような内容を俺にどうこうできるわけがないので、こうして時間稼ぎをするしかない、俺がこめっこの傍にいる間ならバニルに累が及ぶこともない。
「ところでこめっこ嬢はさ、家に帰らなくていいのか？悪魔と遊んだりするのは親もいい顔しないだろ」
いや、紅魔族の連中相手なら、『幼い身で既に悪魔を使役しているとは！やはり前世の因縁が・・・！』とか言いそうだ。
「今は我が家の留守を守ってる、おかあさんとおとうさんは姉ちゃんのところに行ったから」
「姉ちゃん？姉ちゃんって言うと・・・・・・」
どう考えてもめぐみんのことだ。あの両親はめぐみんのところにいるのか？えっ、もしかしてそれに同行するべきだったのか俺は？
バニルが忠告してくれたのはこれだったのか？
俺は少なからず動揺しながらもこめっこからさらなる情報を引き出そうとして、こめっこの方に首を向けた。
そこで、悪魔の感覚が、急速な悪感情を感知した。

「『ライトオブセイバー』」
「「エッ」」
具体的には、殺意を。
視線を戻した先、安楽少女達の首が落っこちた。
岩の上に残された体がビクっと一度だけ震えるとのけぞるようにして動かなくなった。
そこで首なし死体の向こう側に誰かが立っているのが目に入る。
「さあこめっこちゃん。家に帰るんだ」

ああ、そうだった
もうひとつの問題は全く解決していないままだったな。
『公爵悪魔を召喚する下手人』はどうにかした。

まだ、『下級悪魔を殺す下手人』が残っている。

めぐみんのものと同じ眼帯に、めぐみんとは似てもにつかない高い身長に爆乳。ドリル状に巻かれた髪にはここまで走ってきた間に付いたであろう木の葉が絡みついたままだが、ほつれることもなく艶を失っていない。
名前は、なんだったっけ・・・？
身構える俺と違って、同じ紅魔族であるこめっこは落ち着いた様子で声を上げた。
「あ、ニートだ」
「え、やっぱりあいつニートなのかこめっこ嬢？」
「ニートというのは止めないか！作家として本だってもうすぐ出せるかもしれないし！今こうしてこめっこちゃんを探しに来たのもバイトの一部なんだからね!?」
ムキになって訂正してくるそいつは、首からは俺の世界にあった羅針盤のような魔道具をぶら下げ、右手の延長上には紅魔族お得意の光

剣魔法が唸っている
いつぞや俺たちとゆんゆんに迷惑をかけてくれた、あるえとかいう奴だ。
俺がこっちの世界に召喚されてこめっこと顔合わせした直後に襲いかかってきた少女だ。
おかげで紅魔の森をこめっこと二人で逃げ回り、安楽少女のデスマッチを開催する羽目になったんだ。
「目を離した隙に何度も何度も召喚魔法！下級悪魔が湧いてくる度に処理するのは苦ではないけれどね、こめっこちゃんはまだ上級魔法を覚えていないんだからもっと用心を・・・」
「ニートのアドバイスは聞きません」
「こめっこちゃん!?」
「だよなー。社会経験のない奴の言葉に重みなんてないもんなー」
で、その元凶たるあるえだが・・・一点だけなんだかおかしな点というかツッコミ待ちにしか見えない箇所があった。
あるえが左手で握り締めている小さくて細長い布・・・・・・・。
・・・・・・あれ、どう見ても靴下だよな？
しかもあの小ささを考えるとあいつ本人のものではない。
「こめっこ嬢、あの靴下ってお前のか？」
「うん、なんであるえが持ってるの？」
「こ、これは探知魔道具の媒介に・・・」
「シッ！ダメだこめっこ嬢！彼女はきっといかがわしい趣味を暴露する気だぞ！耳を塞ぐんだ！」
「違うよ!?一体なんなんだい君は！」
「おっと、羞恥の悪感情、ゴチでーす」
「ゴチじゃない！ああもう！」
靴下をスカートのポッケにしまい、空いた手で頭を掻き毟るあるえ。ひとしきり髪を乱したところで右手をブンと振るうと、ライトオブセイバーが強く輝き出し、その長さを増した。ついでに苛立ちと羞恥の悪感情が新たにもっと物騒な感情に置き換わっていく。
そして、その悪感情と光剣が俺に、向けられた。

「君はこめっこちゃんの教育に悪い。討伐させてもらうよ」
まあそういう運びになるのは分かっていたけどな。しかし、さっき呼び出されたときは状況が違う。具体的には地獄と地上の時差ボケらしき倦怠感も治ったし、こめっこを抱えて逃げたときに消費した魔力も安楽少女と目の前のあるえから回収できたので体の疲れもない。
とはいえ、悪魔の状態で危害を加えるのは本気で悪手なのでこめっこを介しつつなんとか妥協点を探らないといけない。つまりここで目指す結果はなんとか引き分けや休戦に持ちこむことなのだ。紅魔族相手に勝利するよりかは何千倍も楽勝だな、まともに戦わないことにかけてはアクセル随一なんだからな。
身構える俺に対し、改めて光剣を構えたあるえが呟く。
「せっかく魔王が討伐されたっていうのに、その三日後に魔物の被害を受けるなんてね・・・全く、世界は剣呑なままだ」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？
俺が死んでから、まだ三日？

悪魔と遊べや紅魔たち

地獄滞在期間の最後の一日。
何者かによって召喚されることを見通された俺はバニルと打合せを行っていた。思えばバニルからの依頼を聞くなんて初めてじゃなかったか?今までのはあくまで商談や交渉だったからなあ。
「ところで貴様、地上に降り立ったのちにどうするつもりだ?」
「そりゃ、まずは俺を召喚したやつをどうにかするだろ?その後はアクセルに戻るよ。あいつらがバカやってる可能性が大なのはお前に見通してもらったし、下手すりゃ既にダンジョンに特攻かましているかもしれないんだろ?」
当然とも言える俺の答にしかし、バニルは馬鹿にしたように鼻を鳴らした。
「ふむ。仲間の目のない内に淫魔と近所付き合いを始めていたとは思えんほど実直な行動であるな」
「それは言わないで欲しい」
「しかし忠告しておくがそれは悪手であるぞ、奸計に長けているはずが焦りから浅慮になっている勇者よ」
いつもどおりの軽いジャブのような罵倒だと思っていたが、バニルの次の発言は簡単に無視できるものではなかった。
「アクセルにのこのこと顔を出したが最期、貴様の珍道中はそこで終わりを迎えるであろう」
「いきなり!?なんでそうなるんだよ?ただでさえ召喚者をどうにかするって仕事があんのによ」
「簡単な話だ。まず間違いなく思慮の足りないドアホプリーストが脊髄反射で貴様を浄化するであろう」
あ・・・・・・・・・。
忘れていたが、確かにその光景は想像できる。考えてみればリッチーであるウィズに対しても、初対面からリードの外れた駄犬のよう

に突っかかっては攻撃を繰り返していたのがアクアだ。具体的には浄化魔法を打ち込んだり聖水や神気を浴びせたりと、温和でおっとりした女性に対する行動としては下の下の下でしかない。
しかし今では二人は何だかんだ仲良くなっているのだが、これは結局ウィズがアクアの攻撃に耐え切れるだけのステータスがあったからだ。耐えきられたからこそ、その続きがある。俺がドレインタッチや不死王の手を教わり、机上の空論だった儲け話を店員であるバニルと共に実現させ、魔王を倒すためのレベル上げにもウィズがいた。
もしもウィズがアクアの浄化に耐え切れなかったら、これらの現実もなかったのだ。
だが、俺は？
下級悪魔たる俺が、力を増して帰ってきたらしいアクアの一撃を耐えきれるか？
「言っておくと、あの女の力には貴様が千の残機を抱えたとて抗えん。一撃で全ての残機を浄化され、地獄も天国もない完全な消滅を迎えるであろう」
バニルが俺の思考を見通して、付け加えるように断言した。
「・・・べ、別に襲いかかろうってわけじゃないんだ、上手いこと話の切り口を探せば」
「対話とは、ある程度知力のレベルが揃っていて初めて成立するものではなかったか？」
「くそっ無理だ！あいつの頭で俺の込み入った事情を大人しく聞いていられるわけがねえ！」
絶望的な事実と未来に俺は思わず頭を抱えた。そんな俺に上から言葉が降ってくる。勿論慰めの言葉などではない。
「単純に力を蓄えたところで高がしれている、悪魔となったことで貴様の魔法適正が上昇していようともな。我輩から出来る助言としては・・・・・・貴様は以前の貴様を取り戻すが吉であると言ったところか」
バニルのアドバイスに首をかしげる。以前の俺を取り戻す？冒険者で、人間で、魔王討伐を成し遂げたカッコイイ勇者様であるこの俺、

■■■■の姿を?それができれば苦労しないってのに。
「・・・人間に戻れってことか?戻れるものなら戻りたいけどさ、それならやっぱり俺一人じゃあ不可能もいいところだろ。紅魔族の知識とか、貴族のコネとか、宴会芸の励ましがなきゃキツくねえか?」
「人の身を取り戻すのも最終目標であろう、だがまず第一に奪還すべきは貴様の戦法、戦力である」
「戦法?・・・・・・ああ、そういうことか」
少し考えたが、理解した。そうだった、ダンジョンでのレベリングもそれが目当てだったしな。
「貴様は地獄であくせくと労働に勤しんでおったから自覚が遅れているのであろうが、リッチーの技能、盗賊の技能を初めとした数多のスキルが封殺されておる貴様は余りにも弱い。付け焼刃のスキルと貧弱な装備のあり合わせこそが貴様の命綱であろう?」
「・・・確かにスティール、バインド、ドレインタッチは俺のメインウエポンだしな。勿論それらを十全に生かす俺のクールな機転があっての話だけど」
俺の使うスティールは膨大な幸運に後押しされた結果、アクアの神器である羽衣すら奪った実績を持つ、ある意味では神に対抗しうる領域にまで達していた。他のスキルにしても一つだって役に立たないものはなかった。
「貴様の驕慢な自己評価はさておき、地上に出た貴様は単騎の駆け出し冒険者に討伐されかねん。故に我輩は助言する、勘を取り戻し、手札を揃えよと」
「分かった・・・しかし実際どうしたもんかな・・・悪魔は盗賊スキルなんて持てないし・・・」
「例えば貴様の開発したダイナマイトとやらを用意するか、王城にて貴様が『初見殺し』などといって用いた目潰しコンボのような技を増やすかするが吉である」
「・・・・・なるほどな、あれは初級魔法の組み合わせだし、アクアに出会った時に初見浄化されないためには、単純にレベルを上げるよりはたくさんスキルを取得しとけってことか」

「然様、そもそも貴様が自宅に安置しておる冒険者カードを見通したところ、純粋に肉体を鍛え上げるという方向性の前途は絶望的である」
なんで一言余計なんだこいつは。
ついにバニルからも言われてしまった。やっぱり純粋なステータス強化はこれ以上望めないらしい。
「・・・・・・・・あの世界に着いたらパーティメンバーに会う前に、身を守る手段を揃えておくよ」
「ふむ。是非そうするがいい、準備期間の長さは・・・早すぎても遅すぎても不幸な結末しかならんことぐらいは分かっておるな？」
「そうだよなあ。見通す悪魔ならどれくらいで行動し始めるべきか見通せたりしないのか？」
「ここが地獄でさえなければ児戯に等しいのだが・・・ふむ」
そこでバニル眉間のあたりをコツコツと突いた、仮面越しなのでよく分からないが何かしら俺のためになる言葉を探しているらしい。
やがてその人差し指がピッと俺の方へ向けられる。

「『合図』を見逃すな、とだけ言っておこう」
「合図？」
悪魔特有の曖昧な物言い。しかし、そのことについてクレームを付けるのは時間の無駄だろう、おそらくもう時間はない。
悪魔となった俺には分かる、誰かの魔力が体にまとわりつき始めたのが。
「では時間だ、行ってくるが良い！かの陰険なレジーナ教の神の鼻を明かしてくるのだ！」
元魔王軍関係の邪心とはいえ、神族の狙いを妨げるのが嬉しいのか、バニルが高らかに宣告すると同時、俺の視界が上に引っ張られるようにゆがみ始めた。いよいよ召喚が始まったらしい。
体感で一か月以上身を置いていた、忙しくも平和でどこか牧歌的な地獄から忙しくて命懸けでどこもかしこも危機的な地上へと連れ戻される。

地獄に馴染みかけていたせいか、後ろ髪を引かれる気分が残る、このまま黙って消えてもいいのか？
「そっ！そういえばバニル！お前なんでここまで色々助けてくれたんだ!?」
これだけは聞いておきたかった。出会った時から徹頭徹尾掴みどころのないままに周囲を翻弄しつつもちゃっかり儲けどころを逃さない、こちらの思い通りにならない不条理な存在がここまで親身になってくれるなどよく考えれば考えるほど不気味で仕方ない。こいつの場合、後で法外な恩返しを要求してきそうなので尚更だ。
俺の危惧が分からないはずもないだろうに、バニルは何でもない風に俺に応えた。
「悪魔は原則として契約と取引を重んじる、貰った分は返すのが筋なのだ」
「は？」
予想と大分違う返答に戸惑う。
あいつが貰ったというものには思い当たる節はない。俺ってバニルのためになにかしたっけ？
「貴様の過去を見通したところ、どうやら我が友人が馳走になっていたようでな、その分を返したまでのことだ」
友人？あいつウィズ以外にも友達がいたのか・・・・・・・・・・
最後によく分からないことを言われてモヤっとしたまま俺の意識は数瞬、途切れた。
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
以上が体感で約1時間の会話。
「こめっこちゃん！その悪魔から離れてこっちに来るんだ！」
「ダメだぜこめっこ嬢！あいつはお前の靴下をハスハスする変態かも知れないぞ！」
「んなっ!?だからこれは魔道具を発動させるためのものだと言っているだろう！」
「そんな怪しげな魔道具の毒牙に我が召喚者をかけるわけには行かないな！」

「役立たずの下級悪魔の方がよっぽど有害だろう！偉そうな事を言うのはせめて農作業が手伝えるくらいになってから言うんだね！」
「悪魔に軽作業させてんじゃねーよ！この世界は尽く俺のファンタジーに対する理想をぶち砕きやがる！」
「何の話だい!?」
　喧々諤々の舌戦を繰り広げる。こんなことをしている場合ではないのだが、なぜかこのあるえとは出会う度に喧嘩になってしまうのだからしょうがないし、俺は悪くない。働かない奴がこの世で一番の悪だ。
　思いがけず興奮して、息を切らせた俺たちはちらりともう一人へ目を向けた。
「どっちもがんばれー！」
「どっちも!?」
　そんな意味不明な応援の声をこめっこが上げると同時、俺とあるえは動いた。
「『ライトオブセイバー』！」
「『飛行』！」
　飛び上がろうとする俺に対し、軌道を先読みしたあるえが斜め上空に光剣を横薙ぎに振るった。
　素直に飛んでいれば今頃俺は下半身と泣き別れしているところだったが、俺は素直ではない。広げた羽を下ではなくあるえのいる前方に向かって振るっていた。体は上ではなく後ろに向かってスライドしていき、光の軌跡は見当違いの空間を切り裂いて、起こした風圧は短いスカートを押し上げた。
「んなっ!?」
「黒いぱんつ!!」
　あるえの驚愕と俺の歓喜が共鳴する。
　うっすらと肌色を透けさせながらも存在感を失わない黒い布地。その周囲を下品にならない絶妙なレベルの肉感を持った太ももが飾っている。反射的に足を閉じたことによって柔肌がくっつき合いながら鼠径部を波打たせることでぱんつの表面を艶かしく滑ってい

く光沢。さらに悪魔的視力の前ではぱんつの皺が生き物のように形を変える瞬間さえも見逃さない。
「こうしゃくさん、めっちゃ見てる」
「ぱんつパワーを得ているんだ。こうすると魔力が高まるんだぞ」
「そうなんだ、すごいえっち！」
「こめっこちゃん！そいつの言葉に耳を貸すんじゃない！碌な大人になれないから！」
　これはそれほど嘘ではない。光剣を解除しスカートを抑えたあるえの羞恥の悪感情が胃の奥へと流れ込み、魔力として俺のパワーになっていたからだ。アルダープの怒りや絶望、罪人の魂から滲み出る原始的な嫌悪が主食だった俺にとって初体験の味だ。
「・・・・・・なるほど。バニルがどハマリするのも納得の味だ」
「ばにる？こうしゃくさん、見通す悪魔のバニルじゃないの？」
「うえっ!?・・・確かにバニルじゃないけど、見知った仲ではあるよ」
「そうなんだ、えっちさんすごい！」
「えっちさん・・・？」
　危うくこめっこからの俺への評価にヒビが入るところだったがなんとか誤魔化せた。しかし純粋な尊敬の眼差しには悪感情がない分、むず痒い。一方で俺の視線を恐れたあるえは既に腰が引けて、こちらを睨んだまま追撃してくる様子がない。ここを去るにはいいチャンスだ。
「ぱんつ見せろ！」
　両翼を大きく羽ばたかせる。
　吹き上がる土埃と風圧にあるえが反射的にスカートを押さえたのに対して、俺の体はその場で上昇していた。
　さきほどお見舞いした、飛ぶと見せかけたスカートめくりとは逆のフェイント。単純な策だが引きこもりニート作家志望とはいえ仮にも女子のあるえが下着の危機を無視できるはずがない。
　結果として紅魔族特有の強力な魔法を放つ両手は下半身を庇い、討伐対象たる俺は上空に向かった。例え今からこっちに照準を向けようとしても、真上に腕を持ち上げる一瞬で充分射程範囲外に逃げ切れ

る。逃げ足、もとい俺の飛行速度だけは下級悪魔を凌駕しているのだから。
「ばーかばーか！逃げる俺を捉えたきゃ爆裂魔法でも撃つんだな！」
樹木の頂点を越えて飛び去る一瞬、あるえと目が合う。そこに見える悪感情は悪魔に一手出し抜かれた悔しさと――
「こ、こめっこちゃん!?」
「え？」
俺の尻尾にぶらさがったまま一緒に上昇していくこめっこを案じる不安と恐怖だった。
「わーい！」
「はあああああああああああ!?」
「早く下りてくるんだ！私が受け止めるから！」
意表を突く発言と完璧なタイミングでの脱出であるえをやり過ごしたと思ったら、俺の意図を読んでいたとしか思えない素早さでこめっこがくっついていた。
流石はめぐみんの妹、頭はいいほうだと思っていたが俺の思考を読む能力までめぐみんそっくりかよ！
悪魔の尻尾は高速飛行において体のバランスを保つ役割がある。恐竜にとっての尻尾と同じだ。
今そこに、小さな子供がくっついているということは・・・・・・。
「いやあああああああああああああ!!」
「目の前がぐるぐる～」
地上一日目。
紅魔の森の上空にて、俺を歓迎したのはキリモミ旋回から墜落コースだった。
ちなみに一緒に落っこちたこめっこはちゃんと無傷で守り抜いたぞ。

下級悪魔のロリ風冷や飯、巨乳を添えて

『魔王、ついに討伐される！』
『十人にも満たない急造パーティの偉業！』
『王都にて記念式典を予定！』
『ベルゼルグ王族からも感謝！』

『メンバーの一人であるサトウカズマ氏は未だ療養中』

「なめんな!!」

大きく広げた両腕の間で新聞が真っ二つになった。さらに引き裂き続けるうちに記事を形作っていた文字たちが千々に飛んでいく。

ちょっとした閉鎖環境にある紅魔の里では新聞は貴重な情報源だとかあるえの奴が言っていたが、俺は知っている。これは紅魔族の大人がその気になれば王都にちょろっとテレポートして買ってこれる程度のものであることを。

「ちらかしたらだめでしょー！めっ！」

しかし、件の新聞を持ってきてくれたこめっこが俺を叱った。小さな子供に逆ギレするわけにもいかないので大人しく新聞紙だったものを掻き集め、めんどくさくなったので開いた窓から盛大に放り投げた。火炎魔法のおまけ付きで。

指先からから吐き出されたティンダーの火は上手に燃え移ったものの、紙束全てを燃え尽くすのは無理そうだ。初級魔法じゃ仕方ない。

「もー！もー！こうしゃくさまはそんなことしちゃだめでしょ！」
「悪魔だからいいんだよ」

地上に舞い降りた名もなき悪魔たる俺が紅魔族二人と丁々発止、命のやり取りを終えてから一晩明けて、俺が手に入れたのは朗報と悲報。前者は地獄で過ごしていた何ヶ月もの時間は地上では三日分し

かなかったこと、後者は魔王を倒した最大の功労者である俺の紙面上での扱いが小さいこと、しかも怪我の治療とやらで面会謝絶状態であるらしいこと。

「どういうこったよ。ダンジョンの方で俺を捜索してるんじゃなかったのか？」
「なに？」
「いや、なんでもないよ、はあ・・・」
窓枠にもたれながら、外を眺める。悪魔になったあと、勤勉に働いていたせいで決まった時間に起きる癖がついてしまった。人間だった頃は昼過ぎに起きるのがざらだったのにこうして朝日を眺めているのだから変われば変わるものだ。
目線を下ろせば黒い外套に紅い目を輝かせた大人たちがよく分からない魔法で屋台の組み立てや看板の装飾に取り組んでいて、その傍らで同じく紅い目の少年少女が強化魔法によって木材や鉄骨を軽々と運搬している。なにかしらの祭りの準備をしているみたいだ。
「それにしてもあいかわらずのセンスだ」
『魔の落日に祝杯を捧げし祭』『爆ぜろ魔獣！弾けろ魔王！大魔法まんじゅう』『長きに亘る我ら一族の悲願ここに成就せしジュース』
何かかっこいいことを言おうとしているのは伝わってくる内容のやけに尖ったフォントの文字があちこちに踊っている。まあ解読するまでもなく、魔王討伐祝いのキャッチコピーだろうなあ。
いやいやいやいや、魔王退治の主役たる俺を差し置いてなんてことをしてやがるんだこいつらは。

俺のパーティーメンバーは今もダンジョンで捜索しているというのに。
しているのか？しているよな？知ろうにも新聞はさっきの通り魔王討伐に浮かれた記事ばかりで、ダンジョンの崩落事故なんて一文字も出てこなかったからなあ。
あるいは隠蔽されているとか？

なんにせよ、
「うん、やっぱ新聞燃やして正解だったわ」
「だーめー！」
こめっこが俺のタキシードの裾をぐいぐい引っ張ってきたので窓の外から視線を戻した。
そろそろかまってやらないと命に関わる、こめつこが俺と遊ぶのに飽きればあるえは嬉々として俺の首を刈るに違いないからな。
「よーしこめっこ嬢。何か持っておいで、悪魔のお兄さんが遊んであげよう」
「ほんと!?わーい！」
こめっこが裾から離した手で万歳した。
「はっはっは、嬉しいかー？」
悪魔的には喜悦の感情は勘弁願いたいところだが、こめっこは俺を真っ直ぐ見つめて口を開いた。
「おもちゃよりはごはんの方がいいので、それほどうれしくはないです」
「うん、だろうな。落胆の感情がいっちょまえに滲み出てる」
「でもなにもしないよりましなのでとってきます」
てこてこと小さな足音が去っていくと俺は改めて今の隠れ場所を見回す。今のこめっこの落胆が俺の朝飯になった。
それにしてもここは前の世界を思い出すいい場所だ。そしてなにより屋根がある！
ちなみに今の俺について知っているのはこめっことあるえだけだ。あるえはどうやらこめっこのベビーシッターのようなバイトをしていたらしく、それでご両親が不在の間にこめっこがバカスカ召喚する小悪魔の処理を行っていたらしい。出会い頭でこめっこの靴下を握っていた理由はよくわからん。作家として行き詰まり過ぎて頭がアクシズしたんだろう。どうでもいい。
俺としてはめぐみんの両親がほぼ身内とはいえ人を一人雇えるだけの経済的余裕を持ちつつそれを保てるようになっていた事実が何よりの驚愕だ。めぐみんの仕送りがようやく実を結んだんだろうと

思うと泣けてくる。魔王討伐報酬でもっと楽な生活ができるといいな。

とにかく、こめっこの両親が帰ってきたら末娘についた悪い虫である俺は間違いなく討伐されるし、そうでなくともあるえの気が変わってバイト代のために俺を討伐する可能性は消えていない。

あるえが一晩たっても俺を見逃しているのは俺がこめっこに危害を加えず、むしろ落っこちそうになったところを庇ったりした事実とこめっこが俺に懐いたからに過ぎない。

とりあえず当座の目標はスキルを磨くことだ。初級魔法と中級魔法、それに飛行だけじゃ生き抜くのは難しいし、あとアクアに普通に滅される。

ここだけの話、爆裂魔法に加え、地獄で練習した奥の手もあるのだが魔力量の問題で使い勝手が死ぬほど悪い。

「これ！こうしゃくさまこれ読んで！」

先行きの暗い話をウジウジ考えているところにこめっこが戻ってきた。小さな両手にはゴツい本を抱えていて、その表紙には王都で見かけたことのある豪華な料理の絵が描かれていた。どうやらかなり本格的な料理本らしい。

「おやおやこめっこ嬢、食欲の念が漏れ出てるよ」

「えへへー」

しかし、本棚には他にも子供の気を引きそうな絵本の類も散見されるがそれらをぶっちぎりで無視して料理っすか。俺はこめっこからその本を受け取る。

そう、俺が隠れ場所に選んだのは紅魔の学校の中にある図書室だったのだ。

紅魔の里は今、ＭＶＰたる俺をほっぽっておくほどに大人から子供まで祭の準備に忙しい、故に紅魔の里随一にして唯一の教育機関は休校となっているので、施設内の奥まった場所にあった図書室に隠遁させてもらった。どうせならベッドのある保健室に行きたかったが、窓が住宅地に面していてうっかり見つかりかねなかったとかであるえに却下された。

「・・・・・・莫大な財産と魔王退治の栄誉を得た俺が今や幼女の子守係か・・・」
「えいよー？」
「いや、なんにも」
まあ子供は好きだしこめっこは利発でいい子だから腹も立たないけどな。
受け取った本を開いて冒頭数ページに目を通す。てっきりレシピ本の類かと思っていたが料理についての由来やエピソードが中心の、食の歴史的資料のようだ。
目次を見たところ、この世界で初めてジャイアントトードを料理しようとした冒険者の話や、グリフォンやマンティコアといった複数の生物が合体した結果複雑な骨格を持った魔物の調理法まで書かれているらしい。
椅子に腰掛けた俺の膝に座ったこめっこがこっちを見上げてくる。しかしこわいものしらずだなこの子。爆裂魔法以外何の武器もなしに旅に出たどっかの世界最強の妹だけある。
「はやくはやく、ごはんの本！」
「こらこら、急がなくたって本は減らないって」
「でもおなかはへるでしょ？」
「うん・・・うん？」
よくわからないことを言うこめっこに生返事を返してぺらぺらと手早くページをめくる。そうしていくつもの目次が視界を流れていく中で丁度その一節が俺の目を引いた。
『マニアック料理編・安楽少女の野菜炒め』
あったのかよ。
＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋
「君はもしかしなくとも公爵級ではないね」
「いきなりなんだこの眼帯巨乳、その胸部のお肉をこめっこに食わせてやろうとは思わんのか」
「そういう品性のなさが特にだよ！」

貸出カードと鉛筆の置かれた机を挟んで向かいあったあるえが顔を真っ赤にして両胸を抱くようにして隠しながら俺を糾弾する。しかして豊かな胸は柔く形を変えて腕の隙間から溢れでただけだった。躍動感のある胸は良いものだ。

こめっこは次に読んでほしい本とやらを探して図書室の奥に走っていったままだ戻らない。

料理本やら食材の本ばかりをせがんでくる上に美味しそうな挿絵の描かれたページにしか興味を示さないので斜め読みや飛ばし読みばかりになり、あるえが来るまでに既に四、五冊の分厚い本が用済みになって机の隅に放置されている。

「品がないからなんだよ、こめっこ嬢には優しくしてるじゃねえか。今まで召喚された悪魔に俺ほど紳士的な奴がいたか？」

「たしかに話が通じる悪魔は君が初だけれど、君の魔力は中級悪魔にすら及んでいないじゃないか」

「それはあれだ、召喚の仕方があれだったとかそんなんだろ、本調子の俺はすごいぞ。悪魔嘘つかない」

「ほーう、本気の君は如何ほどのものか聞かせてもらおうじゃないか。迂遠でまどろっこしい言い回しは禁止だよ」

厨二的な単語とフレーズをこれでもかと散りばめた迂遠でまどろっこしい言い回しに定評のある紅魔族が言うじゃねえか。

なのではっきりと言ってやる。

「お前のぱんつを目にも留まらぬ速さで盗めるぞ」

スティールが使えていた頃の話だが。

ガツンと音を立ててあるえは机に突っ伏していた。くるくる巻き毛の中にめぐみんとお揃いの眼帯が埋もれる。どうやら言葉もないらしい。

「どうしてこめっこは君に懐いてるんだ・・・」

「そりゃあの子の前ではこんな発言しないしー？」

「そういう召喚主にだけいい顔を見せるところも逸話の悪魔そのものだね、だけど言っておくよ」

そこであるえは顔を起こした。机に擦れた眼帯がズレたことで

真っ赤な両目が俺を縫い止め、色濃い魔力と鋭い戦意が俺の肌を打つ。
改めて目の前にいるのが上級魔法を使いこなす魔法使いのエリートであることを思い出した。こめっこに忖度しているとはいえこいつは俺の何倍も強いのだ。
「こめっこのためなら、こめっこが泣くのも私は構わないよ」
バイト代のために？とは聞けない雰囲気だ。
あと一度机に伏せた態勢から顔を起こしたせいか、もにゅりと形を崩した胸が以前見た下着とは比べ物にならない魅惑の暗黒を誇る深い谷間を形成していたが・・・そのありがたい光景にも言及しない。本人が気づいてなさそうだけど、ツッコめる空気じゃないもんね。
「危害は加えないっての。本領でない俺にはむしろ味方が欲しいんだ。むしろ紅魔族とは仲良くしておきたいな」
あるえがジト目でこちらを見てくる。何を企んでいるかは知らないけど、ロクでもないことくらいは分かるとでも言いたげだ。怪訝と疑惑の悪感情がポツポツと湧いて出ているのが見える。
やがてそれも治まった頃に、あるえが口を開く。
「信用はしないけど、そういうのならちょっと仕事を手伝ってもらおうかな」
仕事？
自他共認める自堕落冒険者としては本能的に拒絶反応の出る言葉だし、地獄の勤労者たる悪魔としては人間に取り入るチャンスであると意欲的になれる言葉だ。ただそれよりも気になることが、俺にはあった。
「お前、ニートじゃなかったのか」
「君が私の何を知っているというんだい!?」
昨日も今もこめっこの面倒見係を仰せつかっているじゃないか、とブツブツ言いながらスカートのポケットから取り出した紙切れを開いていくあるえ。ちなみにスカートの丈はやはり短いので太ももがよく見えた。紅魔族は常識人のゆんゆんも含めて服装が妙に扇情的なんだよなあ、こめっこは除くが。

「魔王討伐を祝った祭典があるのは知っているかい？」
「知ってるよ、知りたくなかったけどな」
「おや？魔王軍関係者だったみたいな言い草じゃないか？」
「いや、敵だよ。あいつら人間殺すから地獄で仕事が増えて苦労した」
「ふうん、興味深い話だが、取材は後でさせてもらうとして・・・とにかくこの祭りは大規模でね、今はなにかと入り用なんだ。それで料理や設備の素材集めに私も駆り出されることになっている」
「へえ、ニート卒業おめでとう。こめっこと二人で応援してるよ」
「ニートではない、そして問題はそれだよ」
　あるえがピッと俺を指差す。反対の手はなぜか自分の顔にカッコよく当てがっていた。ポーズでも決めているつもりだろうか。
「私がこめっこちゃんの傍を離れてしまう時間が増え、君が傍にいる時間が増えるということが問題なのさ」
「俺は気にしないけど、バレたらぶっちゃけお前はベビーシッタークビになるわな」
「そういうわけだ。だから私の代わりに君が素材集めにいってくるんだ」
「行けるかバカ野郎」
　めぐみんに聞いたことがある。紅魔族は生活必需品や売り物に使用する素材のために紅魔の森に生息する凶暴なモンスターを『ちょっとお遣い行ってくる』みたいなノリでポンポン狩っていると。上級魔法を使いこなす紅魔族だからこそできる凄技であり、アクセルどころか王都でさえ同じ内容を依頼しようとすれば数十万エリスを越える報酬を　用意しなければならないこともあるらしい。
　そんなものを俺一人でできるわけがない。
　・・・しかし、そう考えると爆裂魔法しか使えなかっためぐみんはバイトすらできなかったのか？
「君を召喚してから約一日、この図書室に君を隠して一晩。既にこめっこは君のことを拾ったペット程度には大事にしている。今更私が君を始末するのはこめっこからの心象に差し障るんだよ」

「そういえば最初に召喚された時もこめっこはお前から逃げてたみたいだったしな」
「ああ、召喚魔法の練習に私が邪魔でよく逃げられてね。最後には人探しの魔道具まで借りることになったよ。見つけた頃には君がいたが」
　これでもかつては近所の子供達に人気の■■■お兄さんとして鳴らしていたからな。子供に好かれる俺の人徳まではレジーナも奪えなかったんだろう。うん、間違いない。
「で、それとは全く関係ないんだけれど森へ素材集めに行ってくれ。こめっこのために、一人で」
「だから悪魔に自殺を勧めんなって」
　あるえはその答えが分かっていたとばかりに大げさな手振りで額を抑えながら嘆息した。カッコつけてんのか？
　しかし、召喚しておいて殺しに来たと思えば自殺同然の仕事を振ってくるとか、紅魔族は魔物に対する容赦や命への敬意がなさすぎるだろ。
「あれだぞ？分かってるのか？もし俺がいなくなったらこめっこはまた悪魔召喚を繰り返すぞ？今度はもっと凶暴な悪魔が出るかもな～」
「む・・・」
　こめっこの大物っぷりと才覚を考えるとそれこそ次は本当に公爵を喚んでしまうかもしれない。バニルならいいがマクスウェルなんて召喚してしまったら紅魔族の存亡すら危うい。
「上級魔法が使えるとはいえ、それでも手強い奴は手強いぞ？公爵に至っては訳が分からん」
「その言い振りだと君自身は公爵ではないんだね」
「それは想像に任せるさ、こめっこ嬢の」
　・・・・・でも拒否ばかりもしていられない。俺一人で紅魔の森なんぞに放置されてたまるかと言いたい所だが、いずれ俺はパーティーの所に戻らなければならないのも事実。
　だからこめっこの元に縛られるよりはあるえから追放してもらった方が目的には合致する。しかし、バニルからの依頼も無碍にできな

い。
理想としては、こめっこが悪魔の召喚を止めてバニルは快適に仕事をしつつ俺は紅魔の森を出て世界最大のダンジョンに行く、それまでにアクアに瞬殺されないだけの戦力を整えている状態になっておきたいのだが・・・・・・。
「よし、じゃあこうしようぜ」

＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋

「『ライト・オブ・セイバー』!!」
「包丁じゃないか」
「『カースド・クリスタルプリズン』！」
「こおりのくつみたーい」
「『インフェルノ』オオオオオオオ！」
「言葉も出ないとはこのことか・・・」
紅魔の森に踏み入り数時間後、木々の間に俺の声が響き、目の前の巨獣に対していくつもの魔法攻撃が繰り出されていった。
苛烈な光刃が体表を覆う鱗を削ぎ取り、堅牢な氷の棺が足を止め、トドメの火炎魔法が剥き出しの身を情け容赦なく炙る。
そうして俺の悪魔的手腕によりとうとう魔物は残酷に料理されてしまったのだった。
「サラマンダーを料理しただけじゃないか」
「いいにおい！」
「ままならねえなあオイ！」
見よう見まねで放った上級魔法の数々はあるえからちゃちゃっと手早く伝授されたものなのだが、本来の威力の十分の一も発揮できていないのが現状だ。
全身これ魔力と魔法による生命体、そんな悪魔たる俺は魔法の習得度だけはとんでもなく早くなっているので、人間だった頃は結局覚えきれなかった上級魔法の名を冒険者カードに刻むのは簡単だったのだが、下級悪魔相応の魔力しかないのがネックとなっていた。

今も大型犬程度の大きさのトカゲのモンスターの鱗を削いで軽く炙っただけで命までは奪えていない。それに使用する魔力を絞ったとは言え上級魔法を連発したので体力がキツい。
「こうしゃくさまよわいねー」
こめっこの声にバカにするような空気はなく、ただ事実を確認するだけといった風だ。
俺は自分の弱さについて自覚的だが、楽観的ではない。現状のまずさは理解していた。
魔法を食らった結果作り出された炙り肉の匂いが気になるのか、あるえの後ろにいたこめっこの口元からは小さくよだれを垂らしながら匂いの元に駆け寄っていった。
いや、ちょっと待て！サラマンダーは背中の肉をこんがり焼かれただけでまだ生きてるっての!!
火傷の痛みに悶えていたサラマンダーの無機質な瞳が、無防備に近づいていくこめっこに固定されて、
「 瞑目せよ鱗の隣人、そなたの旅路はこの地にて潰えん。『ライト・オブ・セイバー』」
あるえの声で、妙な呪文が聞こえたと思ったらでかいトカゲの首がゴロリと転がり落ちていた。胴体はそのまま残されている。
いや、マジかよ。見えなかったぞ・・・？
あるえを見ると既に両手をパンパンと払っていて、攻撃の残心さえ見えない。
「今のどうやったんだ？速いし静かだし、俺の知ってるのと違うんだけど」
「君がやったことと同じさ、少ない魔力で刃を細長くして素早く伸ばしただけ、君も公爵なら簡単にできるんじゃないかな」
「何が同じだよ、俺はただ単に魔力不足なだけだ。セクハラさせてくれたら俺の刃も大きくなるんだけどな・・・」
「こめっこが離れた瞬間に下品にならないでくれるかい？」
こめっこはオオトカゲの背に乗り、鱗の剥げた部分に噛み付き、食いちぎるのに夢中だ。と、止めた方がいいのか・・・？いや、でも火

は通したし腹は壊さないよな・・・。
と、この隙にあるえの耳元に口を寄せる。
「そういう少ない魔力の運用とか、技術を教えてくれって言ってんだけど・・・。約束したろ?ちゃんと上級魔法が使えるようになったら紅魔の里を出ていくってさ」
俺の問題、あるえの問題、こめっこの問題。それらを解決する第一歩としてまず俺が上級魔法をあるえに習うことを提案した。
上級魔法の行使に必要な体の構えや魔力循環は人間だった頃は時間とセンスが足りずに覚えられなかったが悪魔となった今は別なのだ、そう時間はかからないと予想し、実際そうだった。
結果としてはさっきの通り、トカゲ一匹殺せなかった訳だが。
光刃は包丁サイズ、氷の檻も足元を凍りつかせるだけ、インフェルノも弱火。ないよりまし、という感想しか出てこない。
とにかく、俺は上級魔法という手札を手に入れ、紅魔の里を出る。
あるえは俺を追い出し、ベビーシッターとしての面目を保つ。
こめっこに関してはこうして三人で行動することで両親が帰ってくるまで時間を稼ぐ。親さえ戻れば悪い遊びもできないだろうという心算だ。
だというのに、どうもあるえが協力的でないような・・・。
「悪魔の君は知る由もないだろうが、紅魔族の教育は何も手取り足取りという訳じゃないのだよ」
俺の不満顔に気づいたのか、そんな弁解が返される。
「呪文を教え、魔力の扱いを教え、あとはレベルが上がって上級魔法を獲得するまで傍で見守るのみさ、何かあれば即座に助けるけどね。」
見守っているつもりなのかこいつは・・・。なんか誤魔化されてないか?
紅魔族の学校では魔法の扱いを中心とした社会に役立つ教育やレベル上げを行っているらしいが、それについて話していたゆんゆんが渋い顔をしていたことを思い出すと何を教えていたのか想像がつく。
俺の知る学校との大きな違いとしては冒険者カードを使って何かしらのスキルを獲得すると即刻卒業できるということか。

飛び級とかそんな話じゃなく卒業と来た。将来役に立つかわからない知識より実践的な技術を優先する方針は厳しいこの世界を生き抜くには適していると思うが、中級魔法しか使えない上チョロ甘で誰にでも騙されそうなゆんゆんと爆裂魔法による爆裂魔法のための爆裂道を邁進するめぐみんが野に放たれたことを忘れてはいけない。おそらく俺と同じ転生者が学校制度を作ったんだろうが、うまく伝わらなかったらしい。

将来役に立たないことを勉強するのが学校という機関なのに、そこを無視している。

「そうかいそうかい、見守ってくれているのならありがてえ、だったら見ていてもらおうか。俺の上級魔法が練磨されていく様をよ！」

そう吐き捨てながらあるえに背を向ける。

別行動をするつもりではない、悪魔の聴力が何者かの重々しい足音を聞き取ったからこその臨戦態勢だ。

木々の隙間を素早く動けるように固く小さく折りたたんでいる翼を意識する。

ガサガサと枝葉がこすれあう音がして、警戒したあるえがこめっこに駆け寄り抱き上げた。こめっこのいた場所には背骨と肋骨の一部が露出したトカゲの死体が・・・・・・あの子の食欲は一体何なんだ？

今出来うる戦闘スタイルはやや命懸けだ。ちまちまと弱い攻撃与えることで相手の悪感情を引き出し、それを魔力に変換してより強い攻撃を繰り出すという、地獄でアルダープを使いながらマクスウェルと対峙した時のものをそのまま流用するつもりだ。

しかしこれ、モンスターには通用しない戦法かもしれない。動物は感情ではなく本能で動くからだ。実際さっきのサラマンダーから摂取できた悪感情はあまりにも希薄で腹の足しにもならなかったことを考えるとやはり悪魔は人間のみの敵らしい。

とはいえ安楽少女には通用したのも事実なのだから、色々と検証していかないとな。

検証とか実践とか俺らしくないこと極まりないが、生き残るために

は仕方ない。
俺は包丁程度の大きさの光刃を生み出すと、ガサガサと揺れる茂みに向かって勢いよく駆け出した。

＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋

「くさいごはん」
「こんな昼過ぎからドラゴンゾンビが出るなんてね、肉の焼ける匂いにつられたかな」
「くそったれえええええ!!!ゾンビに感情があるかよおおおおおお!!!」

一発目から相性最悪だった。